

# 教育は いま

第7号

- ◆総合的な学習の時間の推進に関する研究（第二年次）
- ◆仙台市立小・中学校教員の自己啓発・自己形成に関する調査研究
- ◆学校における情報通信ネットワークの活用に関する研究
- ◆子どもの“学び”と“育ち”から見た理解の視点と支援の在り方を探る

仙台市教育センター

## はじめに

大改革と称される今次教育改革も、いよいよ実践の時を迎えるました。今年4月から始まる新教育課程への移行措置に伴い、各学校では、これまでの準備の段階からいよいよ実践化に向けて、特色ある教育課程の編成に全力を注いでいることと思います。新しい学習指導要領は、ゆとりの中で一人一人の子供たちに「生きる力」と「豊かな人間性」を育成することを基本的なねらいとし、その達成のために総合的な学習の時間などを創設し、各学校における創意工夫に満ちた教育活動の創造と展開に大きな期待を寄せています。

このような状況の中で、研究・研修機関としての当センターの果たす役割は、極めて大きくその重責を厳しく受けとめております。当センターの重要な事業の一つである本調査研究には、学識経験者(4名)、委嘱研究員(24名)、所員(16名)によって4つの調査研究委員会を設置し、一丸となって取り組んで参りました。研究内容は、今次教育改革の理念と背景を重視し、新学習指導要領の趣旨を踏まえながら、教科・領域等に関する専門研究分野が2編、今日的課題に関する課題研究分野が2編、合計4編を、平成11年度の調査研究紀要「教育はいま」としてここに発刊する運びとなりました。

専門研究分野の1つ「総合的な学習の時間の推進に関する研究」は、3年間の継続研究の2年次のもので、本年度は、特に新学習指導要領移行措置期間における実践上の課題を考察しております。次に「教育相談に関する研究」では、通常の学級において、担任が特に「個別的に配慮を要する」ととらえている児童生徒の理解と支援に焦点をあてた研究で、今後の教育相談における新たな視点を提案しています。

課題研究分野の1つ「教職研修に関する研究」は、教職員に求められる資質の向上と、それを支える本センターの研修事業の在り方を探るために、教職員の自己形成の実態と自己啓発の意識等を調査し、今後の研修体系の構築に生かすことを目指したものです。また、「情報教育に関する研究」は、現在急速に学校現場に浸透しているインターネットのメディアを、教育利用という観点からとらえた研究で、情報活用能力育成のためのインターネット利用の条件や、望ましい情報教育の推進に向けたいくつかの提案を行いました。

これら4つの研究の内容につきましては、これからさらに充実しなければならない課題も山積しておりますが、各学校の教育実践及び教育研究の参考にご活用いただければ幸いに存じます。

特に本年度は、研究発表を当センターから全国65カ所の都道府県及び政令指定都市の教育研究所等に衛星通信（エルネット）によって配信し、直接ご指導をいただく機会を得ましたことは、私たち所員にとりまして大きな励みとなりました。地方局からの研究発表の単独放送は、岡山県に次いで2番目、全国から質問や意見がリアルタイムで寄せられるなど、今後の教育センター等の在り方にもかかわる、画期的な試みとなりましたことも特筆に値することあります。

最後に、今回の調査等にご協力をいただきました各学校の先生方、また適切な指導助言をいただきました学識経験者の先生方、豊富な体験・経験に基づく貴重な提言をいただきました委嘱研究員の先生方、そして、衛星通信関係の方々など、本事業にご協力をいただきました全ての方々に、心から感謝申し上げます。

平成12年3月

仙台市教育センター  
所長 早坂 祥

## 総 目 次

■総合的な学習の時間の推進に関する研究（第二年次）	5
—小・中学校における総合的な学習の時間の取り組みの事例を通して—	
■仙台市立小・中学校教員の自己啓発・自己形成に関する調査研究	29
■学校における情報通信ネットワークの活用に関する研究	57
—インターネットを利用した教育に対する意識調査を通して—	
■子どもの“学び”と“育ち”から見た理解の視点と支援の在り方を探る	83
—通常の学級で特に個別的な配慮を要する児童生徒の調査と事例を通して—	

## 総合的な学習の時間の推進に関する研究（第二年次）

## — 小・中学校における総合的な学習の時間の取り組みの事例を通して —

要 約

この研究は、総合的な学習の時間の推進のために3年間の継続研究として行われている研究の、第二年次のものである。

新学習指導要領移行期間における総合的な学習の時間の実践に向けて、「第1段階：共通理解・実態把握」「第2段階：実践」の2段階を設定した。各段階における実践上の課題を検討し、解決のための具体的な施策を提示するとともに、各段階における実践事例を紹介した。

## ■キーワード

- 総合的な学習の時間      移行期間中の実践      実践上の課題

- 共通理解の視点  実態把握の視点  対応の観点  実践事例

# 目 次

I	はじめに	
1	第1年次の研究結果から	7
2	研究の目的	7
II	新学習指導要領移行期間中の教育課程	
1	新学習指導要領移行措置の概要	7
2	新学習指導要領移行措置のポイント	8
III	移行期間中の総合的な学習の時間の取り組み	
1	第1段階の取り組み	
(1)	総合的な学習の時間の共通理解の視点	9
(2)	学校の実態把握の視点	9
(3)	地域の実態把握の視点	10
2	第2段階の取り組み	
(1)	総合的な学習の時間の活動計画作成	10
(2)	総合的な学習の時間の学び方	14
IV	総合的な学習の時間の実践事例	
1	第1段階「共通理解・実態把握」	
『事例1』特別委員会による総合的な学習の時間のアプローチ	16	
『事例2』教師の意識改革と協働の精神の構築を目指す プロジェクト会議の設置	18	
2	第2段階「総合的な学習の時間の実践」	
『事例3』既存の取り組みの見直しを通した実施計画づくり	20	
『事例4』学年テーマで取り組む総合的な学習の時間	22	
『事例5』短期集中型の時間割編成による全校での取り組み	24	
『事例6』授業と結びつけた総合的な学習の時間のカリキュラム作成	26	
V	おわりに	
1	研究のまとめ	28
2	課題	28

## I はじめに

### ■1 第1年次の研究結果から

総合的な学習の時間を推進するための方策を探求する3年間の継続研究として、初年度の平成10年度には市内の全小・中学校の研究主任を対象に、総合的な学習の時間に関する実態調査及び意識調査を実施した。第1年次の調査結果によると、総合的な学習の時間の実態及び各学校が抱えている実践上の諸問題の概略は以下の通りである。

第一に、総合的な学習の時間の取り組みに関して、新学習指導要領移行期間以前の平成10年度の段階では、各学校とも学習形態や学習内容は様々であり、まさに試行錯誤の段階であった。

第二に、小・中学校間で総合的な学習の時間に対する課題意識に差がみられた。小学校では、総合的な学習の時間の実施に当たっての具体的な学習内容が課題になっていたが、中学校では、学習内容検討以前の条件整備が課題となっていた。各学校において総合的な学習の時間に取り組むに当たり、校内の研究推進体制の確立、学校や地域の特色を生かした学校独自の教育課程の編成、人的・物的環境の整備などの課題解決が急務であることを示唆する結果であった。

第三に、総合的な学習の時間の取り組みの段階として、「校内教員の共通理解」、「学校・児童生徒・地域の実態把握」を経た後に「総合的な学習の時間の活動計画作成」に取り組み、「総合的な学習の時間の実践」に移る、という過程を想定している学校が多いことをうかがわせる結果であった。

総合的な学習の時間の取り組みを、第1段階「総合的な学習の時間の創設の趣旨の共通理解及び実態把握の段階」、第2段階「総合的な学習の時間の実践の段階」と考えると、新学習指導要領移行期間第1年次の平成12年度は、すでに第2段階である実践段階に入っているなければならない。各学校においては総合的な学習の時間の実践に向けての準備が急がれる。

### ■2 研究の目的

第2年次の今年度の研究は、上述した第1年次の調査結果で明らかになった実践上の課題を受けて、総合的な学習の時間の実施に向けて、各学校が直面するであろう実践段階における諸問題について検討する目的で企図された。研究の推進に当たっては、仙台市立小・中学校における総合的な学習の時間の取り組みの実践事例を通して、第1段階における総合的な学習の時間の共通理解と校内体制の確立の在り方及び第2段階における活動計画の作成・実践の在り方を中心に検討する。

※ 以下の論述は、本調査研究委員会における委嘱研究員の討議記録及び相澤秀夫宮城教育大学助教授のご指導に基づき構成した。

## II 新学習指導要領移行期間中の教育課程

### ■1 新学習指導要領移行措置の概要

#### (1) 移行措置の期間について

新しい学習指導要領の趣旨をできるだけ早く生かすよう、平成12年度から新学習指導要領が適用される平成14年度までの間に移行措置を実施する。

#### (2) 移行措置の内容について

##### ①新学習指導要領の規定に従うもの。

###### Ⓐ総則

- ・第1 教育課程編成の一般方針
- ・第4 授業時数等の取り扱い(中学校は第5)
- ・第5 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項(1(2)以外の項;中学校は第6)

###### Ⓑ教科領域等

- ・道徳、特別活動
- ・授業の1単位時間の弾力化

##### ②全部または一部を新学習指導要領の規定に従うもの(できるだけ新学習指導要領により指導するよう努める→各学校の判断に委ねる)。

###### Ⓐ小学校(国語、生活、音楽、図画工作、家庭、体育)

###### Ⓑ中学校(国語、音楽、美術、技術家庭、保

### 健体育)

③現行学習指導要領の下で、必要な事項を省略しつつ実施するもの（新学習指導要領の趣旨を生かして指導するよう努めること）。

- ・新学習指導要領において上学期に移行した事項や削除した事項について、学習の重複を避けることなどから、移行期間中からその事項を削除する。

・小学校（社会、算数、理科）

・中学校（社会、数学、理科、外国語）

④総合的な学習の時間を加えて教育課程を編成できること（この時間の趣旨を踏まえ、積極的に取り組むよう努めること）。

### （3）移行期間中の授業時数等について

年間総授業時数は現行どおりとしつつ、現行学習指導要領の特例等を考慮して、各教科の授業時数について弾力的に運用できること。

### （4）総合的な学習の時間の取り扱い

①新学習指導要領「第1章総則」第3「総合的

な学習の時間」（中学校は第4）による。

②総合的な学習の時間に充てる授業時数は、各学校が定めるものとする。

- ・特別活動の授業時数の一部を総合的な学習の時間に充てることができる。
- ・年間35週以上の規定にかかる年間、学期ごと、月ごとなどに適切な授業時数を充てる。
- ・各教科の授業時数の弾力的な運用により、各教科の授業時数を総合的な学習の時間に充てることができる。
- ・総合的な学習の時間を加えて教育課程を編成する場合には現行の学習指導要領の第4～6学年までの特別活動の授業時数を総合的な学習の時間にも充てることができる。（小学校）
- ・現行の学習指導要領の特別活動の授業時数及び選択教科に充てる授業時数を総合的な学習の時間にも充てることができる。（中学校）
- ・学校裁量の時間を総合的な学習の時間に充てることができる。

## ■2 新学習指導要領移行措置のポイント

教科・領域等	小学校	中学校	備考
国語	○	○	・漢字の指導部分を除く
社会	●	●	・新学習指導要領の趣旨を生かして指導するよう努める。
算数	●	—	・新学習指導要領で上学期に移行した事項や削除した事項について、学習の重複を避けるために、移行期間中からその事項を削除する。
数学	—	●	
理科	●	●	
生活	○	—	
音楽	○	○	
図画工作	○	—	
美術	—	○	・できるだけ新指導要領により指導するよう努める（各学校の判断に委ねる）
家庭	○	—	
技術・家庭	—	○	
体育	○	—	
保健体育	—	○	
外国語	—	●	・筆記体の指導を省略することができる
道徳	○	○	
特別活動	○	○	
総合的な学習の時間	○	○	・この時間の趣旨を踏まえ、積極的に取り組む
総則	○	○	・授業の1単位時間の弾力化、個に応じた指導等

○……移行措置を新学習指導要領で実施するもの

○……全部または一部について新学習指導要領によって実施するもの

●……現行学習指導要領で必要な事項を省略しつつ実施するもの

### III 移行期間中の総合的な学習の時間の取り組み

#### ■ 1 第1段階の取り組み

##### (1) 総合的な学習の時間の共通理解の視点

###### ①学校づくりとしての総合的な学習の時間

総合的な学習の時間は、「新しい学校づくりの一環としての教育活動」という側面をもっている。総合的な学習の時間の活動内容を検討する際には、児童生徒の学びの姿や学校の教育課題など、各学校の実情を明確にするとともに、教育改革の方向を見据えて、「今後学校として何をなすべきか」を確かめる一方で、「何ができるか」「どのように行うか」を考える必要がある。

###### ②総合的な学習の時間の共通理解の視点

総合的な学習の時間に取り組む場合、第1段階として、中央教育審議会「第1次答申」、教育課程審議会「答申」、学習指導要領「第1章総則」、学習指導要領解説「総則編」、学習指導要領解説「各教科・領域編」などの基本的な文献に基づき、創設の趣旨、ねらい、教育課程上の位置づけ、学習活動、学習方法、授業時数、学校経営的な視点、評価について、十分な共通理解を図りたい。

##### (2) 学校の実態把握の視点

###### ①学習情報センターとしての学校図書館

- Ⓐ 専用コンピュータの配置（蔵書管理・検索・貸し出しシステム用、調べ学習用）
- Ⓑ 蔵書のデータベース化
- Ⓒ インターネットへの接続
- Ⓓ マルチメディアCD-ROMの所蔵
- Ⓔ 学校図書館への電話回線の敷設
- Ⓕ 蔵書構成（百科事典、図鑑、国語辞典、漢和辞典、調べ学習に必要な本）
- Ⓖ 視聴覚資料の充実
- Ⓗ 公共図書館との連携、等

《充実させたい学校図書館の機能》

総合的な学習の時間で重視されている問題解決的な学習に対応するために、学校図書館を学習情報センターとして整備し、上記の機能を充実させる必要がある。併せて、空き教室の有効活用として学習情報センターへの転用も検討したい。

###### ②教育課程の面からの学校の実態把握

実態把握の視点として、教科の学習、学校行事、児童会・生徒会活動、創意の時間など、既存の取り組みの見直しの中から特色ある活動を洗い出してみる。これまでの教育活動で積み上げてきた体験学習・校外学習のノウハウ、及び校風（学校の歴史、沿革等）、学年・学級の雰囲気、保護者・地域との連携などのよう、いわゆる「潜在的なカリキュラム」の面からの把握も見落とすことができない視点である。

###### ③児童生徒の実態把握の視点

「総合的な学習の時間ではぐくみみたい力」だけでなく、「自ら学ぶ意欲の前提となる学習習慣」に関するもの、以下に示すような具体的な視点を設定して児童生徒の実態を把握する必要がある。

###### ①自ら学ぶ意欲の前提となる学習習慣

- 1 教師の話を注意深く聞く習慣
- 2 分からないことを質問する習慣
- 3 既習事項を生かす習慣
- 4 よりよい解決方法を工夫する習慣
- 5 誤りの原因を明らかにする習慣
- 6 参考資料を活用する習慣
- 7 学習計画を立てて実行する習慣
- 8 学習したことを自己評価する習慣

###### ②総合的な学習の時間ではぐくみみたい力

- 1 学習計画を立てる力
- 2 進んで活動する力
- 3 いろいろな人と共に活動する力
- 4 学習したことを分かりやすく伝える力
- 5 学習を振り返り次の学習に生かす力

なお、以下に示したのは、総合的な学習の時間ではぐくみみたい力の下位項目の例である。

### 1 学習計画を立てる力

- 1) 調べたいことは何かをはっきり決める力
- 2) 問題がどこにあるか判断する力
- 3) 目標を設定する力
- 4) 問題を重要な順に整理する力
- 5) 調べ方が分かり、学習計画を立てる力

### 2 進んで活動する力

- 1) 本で調べたり、人に聞いたり、自分から進んで活動したりする力
  - 2) 仕事に着手し遂行する力
  - 3) 最後までねばり強く活動に取り組む力
  - 4) 活動時間を有効に使うことができる力
- 3 いろいろな人と共に活動する力
- 1) 友達と仲良く協力して活動を進める力
  - 2) 自分の思いや考えを周囲の人々に伝えることができる力
  - 3) 友達や教師のアドバイスを聞くことができる力

### 4 学習したことを分かりやすく伝える力

- 1) 情報を集める力
  - 2) 情報を活用しまどめる力
  - 3) 他の人に分かりやすい方法で表現する力
  - 4) 調べたことを整理して発表する力
- 5 学習を振り返り次の学習に生かす力
- 1) 自分の学習状況を把握する力
  - 2) 自分の良さが分かり、伸ばそうとする力
  - 3) 自分の活動を振り返りながらよりよいものにしようとする力
  - 4) 友達の活動の良さが分かり、認め合う力

### (3) 地域の実態把握の視点

地域の実態を把握する視点としては、次のような事柄が考えられる。

#### ① 人的環境

- 1 地域に居住する様々な職業人
- 2 地域の人的資源（人材バンクの作成）
- 3 地域の企業・各種団体

#### ② 自然環境

- 1 地域の地理（川、池、沼、海、山等）

- 2 地域の気候

- 3 植生・動植物の生態系

#### ③ 歴史的環境

- 1 地域の歴史・風土

- 2 歴史的建造物（神社、仏閣）、史跡、遺跡

#### ④ 社会的環境

- 1 基礎的事項（人口、戸数、職業構成等）

- 2 公共施設（公園、公共図書館、区役所、市民センター、社会教育施設等）

- 3 福祉施設（老人ホーム、授産所等）

- 4 商業施設（商店、デパート、スーパー・マーケット、コンビニエンスストア等）

- 5 工業施設（工場見学可能な工場・企業等）

- 6 交通体系（JR駅、地下鉄駅、バス停留所、国道、県道、市町村道等）

## ■ 2 第2段階の取り組み

### (1) 総合的な学習の時間の活動計画作成

#### ① 実践を通しての理解

新学習指導要領には、総合的な学習の時間のねらいと課題の一部（国際理解、情報、環境、福祉・健康）が例示されているだけである。具体的な活動内容については、各学校の特色を生かして実践する必要がある。したがって実際に実践してみたいことには、完全な理解はありえない。

総合的な学習の時間を考える際には、実践を行う過程で理解を深め、教育活動の改善を図る、という視点も不可欠である。

#### ② 新しい学校づくりの一環としての視点

総合的な学習の時間の活動内容だけを取り出して「何をすべきか」と議論する傾向が見受けられる。しかし、総合的な学習の時間は本来「新しい学校づくり」の一環として創設されたことも見逃せない。この視点が欠落すると、「活動あって学習なし」という、単なる「体験ごっこ」に墮する危険性がある。

新しい学校づくりの核として、総合的な学習の時間が何を担うのかを見据えて計画し、実践していくことが求められている。総合的な学習の時間は、学校づくりといかにかかわるかが問われている。

### ③総合的な学習の時間の活動計画作成の手順

計画作成に当たっては、全く新しい活動を創出するよりも、これまで各学校で実践してきた特色ある教育活動をどのように総合的な学習の時間に生かすか、という視点から各学校の教育活動を見直すことが現実的である。

まず、総合的な学習の時間につながりそうな教育実践をもとに、学習プランを作つてみる。小学校3、4年生の場合を例にとると、平成12年度に無理に105時間を完全に実施しようと考えずに、平成12年度から13年度にかけて、実施可能な学年（活動）から実践していく。すなわち、小さなユニットの活動から少しづつ拡大していく、平成14年度に105時間実施できるように段階的に計画すると、無理のない活動計画が立てやすい。

総合的な学習の時間の実践においては、実践の過程で時々立ち止まり、時には回り道をしながら試行錯誤を繰り返すということも求められる。諸条件（施設・設備、人的要因、時間等）がすべて満たされなければスタートできないとか、スタートすべきではない、と考えるのではなく、全校体制で実践できない場合には、とりあえず実践可能な学年から実践し、平成14年度の全面実施に向けてノウハウを積み重ねることが大切である。

まず実践してみて、その過程において反省を加え、次年度からのカリキュラムに生かすとよい。

### ④総合的な学習の時間の課題設定の在り方

子ども主体・子どもの願いからスタートすべき、という考えが強すぎて、「子どもの興味・関心による課題でなければ総合的な学習の時間ではない」という誤解がある。「児童生徒の思いや願いを大切に」ということは大切だが、これだけでは豊かな教育活動の創造にはつながらないのではないか。

- Ⓐ子どもの願い → 子どもの興味・関心に基づく活動
- Ⓑ教師の願い → 学校の実態に基づく活動
- Ⓒ保護者の願い → 地域の実態に基づく活動

総合的な学習の時間の課題はⒶが基本となるが、Ⓑのような学校としての考え方、教師の側から示すこともまた大切である。児童生徒の興味・関心による課題へ偏重せずに、児童生徒の思いや願いを学校として教師としてどのように受け止め、児童生徒の発達を考慮してどのような学習活動を設定できるかが問われている。

以下に、小学校の発達段階に応じた総合的な学習の時間の課題類型ごとの時間設定の一例を示す。

#### 【小学校3、4年生の実践例】

- |                            |         |
|----------------------------|---------|
| Ⓐ学年・学校としての課題               | 20~30時間 |
| Ⓑ児童生徒の実態、教師の特性による課題        | 30~40時間 |
| Ⓒ児童生徒の発想による課題              | 10~20時間 |
| Ⓓ学年の枠をはずした活動<br>(異年齢集団活動等) | 20時間    |

105時間

#### 【小学校5、6年生の実践例】

- |                            |         |
|----------------------------|---------|
| Ⓐ学年・学校としての課題               | 10~20時間 |
| Ⓑ児童生徒の実態、教師の特性による課題        | 30~40時間 |
| Ⓒ児童生徒の発想による課題              | 20~40時間 |
| Ⓓ学年の枠をはずした活動<br>(異年齢集団活動等) | 20時間    |

105時間

誰が「課題」を設定するかではなく、追究に値する「課題」をいかに設定するかが重要である。児童生徒自身が学習の導入の段階で質的に高い問題を設定し難いのであれば、当面の間教師が課題を設定してもよいのではないだろうか。

⑤学校の財産としてのカリキュラムの編成

総合的な学習の時間の実践を通して、「学校の目指す児童生徒像の具現化のために、児童生徒にどのような力を付けさせたいか」を考える必要がある。次のような検討の過程で教科(選択)、領域、総合的な学習の時間との関係が自ずと明らかになってくる。各学校のこれまでの実践を洗い出し、総合的な学習の時間を核にして、「学校の財産としてのカリキュラム」を編成することが重要である。

- Ⓐ 最終的な目標として、どのような方法や技能を、どのような場面でどのように発揮できるように育てるのか。
- Ⓑ Ⓐの能力は、具体的にはどのような個々の能力（見る力、話す力、聞く力）などから成り立っているのか。
- Ⓒ 個々の能力をどの時期にどのレベルまで育てるのか。
- Ⓓ それぞれの能力は、どのような状況において効果的に育てることができるのか。
- Ⓔ Ⓨの状況をどのような学習活動のどのような場面で生み出すことができるのか。

⑥カリキュラムの編成の視点

「学校の財産としてのカリキュラム」を編成する際には、次のようなⒶ～Ⓔの視点が考えられる。

Ⓐ 学習課題

- 1) 横断的・総合的な課題
- 2) 児童生徒の興味・関心に基づく課題
- 3) 学校や地域の特色に応じた課題
  - ・全校統一の課題
  - ・学年ごとの課題（学年内は同一課題）
  - ・学級ごとの課題
  - ・グループまたは個人ごとの課題
  - ・教師が与えた課題
  - ・選択肢として与えられた課題から子どもが選択した課題
  - ・教師と子どもが話し合って設定した課題

・子どもが自分で設定した課題

Ⓑ 学習方法

- 1) 自然事象や社会事象と直接かかわる体験
  - ・自然体験（喜び、偉大さ、神秘さ、恐怖、感動の体験）
  - ・文化・社会体験（文化財、先端技術、日本の文化、外国の文化の体験）
- 2) 地域の人々や友達と直接かかわる体験
  - ・他者体験（愛情、喜び、悲しみ、理解、信頼の体験）
  - ・自己体験（弱い自己、高慢な自己、思いやりの自己の体験）
- 3) 実体験による多様な学習
  - ・調査、取材、実験、観察、見学、体験
  - ・発表、討論、ものづくり、生産活動

Ⓒ 学習態勢

- 1) 一斉学習
- 2) グループ学習
- 3) 個人（個別）学習
- 4) 異年齢集団による学習

Ⓓ 指導体制（多様な人的学習環境）

- 1) 学年のTTT、異なる教科の教師の協力など、全職員が一体となっての指導体制
- 2) 保護者や地域の人材など外部の人材の協力

Ⓔ 学習の場（多様な学習環境）

- 1) 校内（教室以外の施設・設備の活用、多様な学習環境の準備）
- 2) 校外（社会的環境の活用、自然的環境の活用、歴史的環境の活用）

Ⓕ 学習時間

- 1) 時間割上に固定し、年間を通して実施
- 2) 適切な時期を選んで実施
- 3) ある時期に集中して実施（まとめ取り）

Ⓖ 学習の評価

- 1) 活動、学習の過程でのよさの評価
- 2) 報告書、作品、発表等の学習の状況・成果
- 3) 児童生徒のよい点、学習意欲、進歩の状況

※教科学習のような評定を行わない

## ⑦総合的な学習の時間と教科・領域との関係

今回の学習指導要領の改訂で、分化としての教科・領域を統合する形で総合的な学習の時間が誕生した。なお、小学校の生活科は平成元年に合科の教科として誕生した。生活科には教科としての目標・内容が設定されているところが総合的な学習の時間と異なる点である。教科・領域と総合的な学習の時間の関係を図示したものが図1である。

図1に示したように、総合的な学習の時間を支えるのは、母語としての国語力（インタビュー・まとめ・発表等）である。国語科の学習の在り方は今までいいのか、総合的な学習の時間との関連で国語科の学習内容を吟味することも必要になってくる。このように、総合的な学習の時間には、教

科の学習にフィードバックされるという教育課程改善の側面があることも忘れてはいけない。

## ⑧総合的な学習の時間と特別活動との関連

特別活動は、総合的な学習の時間の活動を支える学級経営の基盤として、すなわち『学校生活の基盤としての学習・生活環境づくり』という大切な役割を担っている。（新学習指導要領においては学級経営が一層重視されており、小学校学習指導要領で初めて「学級経営」の文言が現れた。）

なお、総合的な学習の時間と「なすことによって学ぶ」特別活動とは、体験的な活動を重視するという視点から考えると近い関係にある。そのため、この両者の区別がとかく不明確になりがちである。この点に関して、小学校学習指導要領解

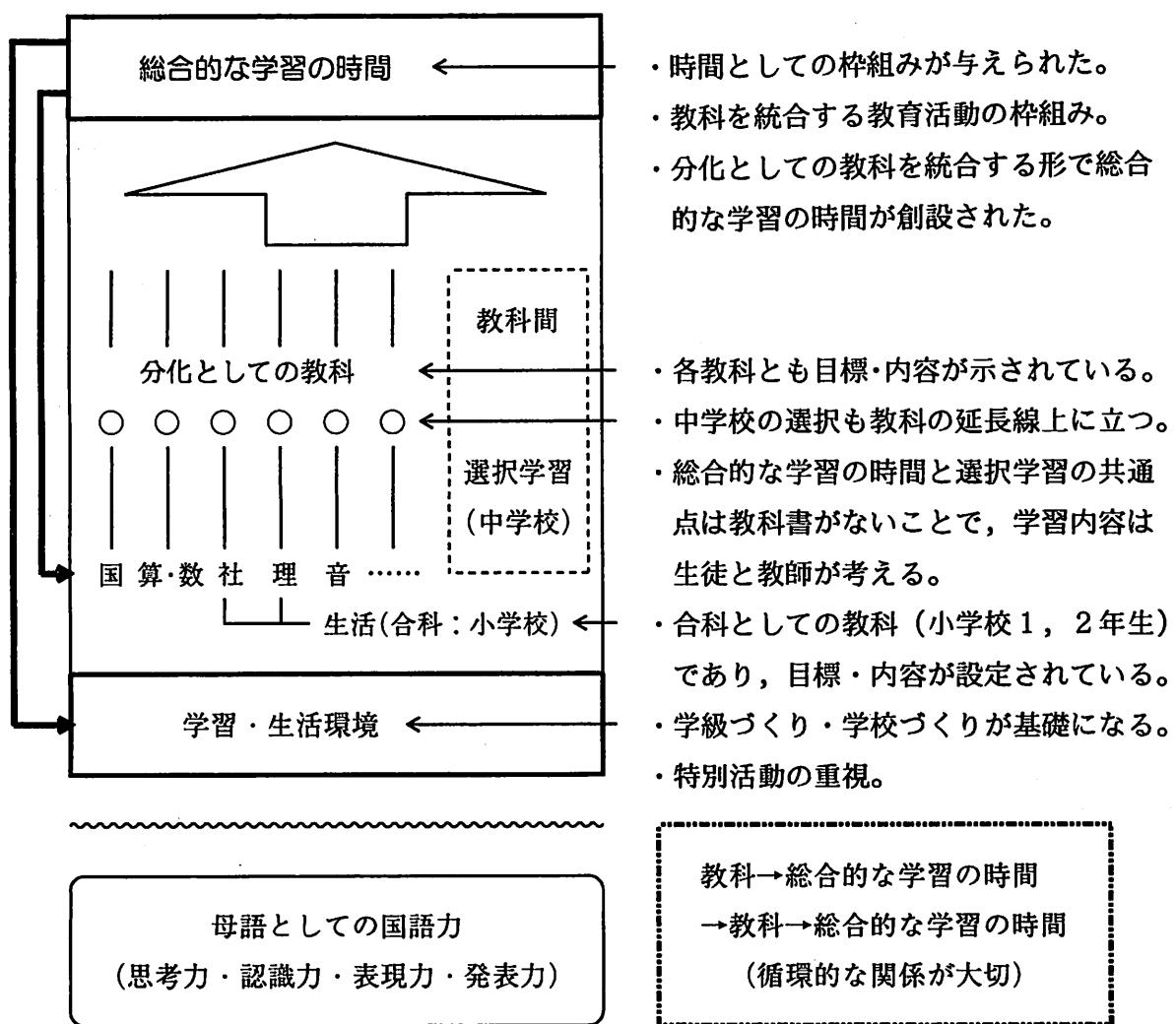


図1 教科と総合的な学習の時間との関係（相澤試案）

説特別活動編では、総合的な学習の時間と特別活動との関係を次のように明確に述べているので以下に転載する。

『総合的な学習の時間では、特別活動で培った資質や能力を生きる力として根付かせていくことになる。(中略) 計画と運営に際しては、特別活動で身に付けた自発的、自主的な活動の進め方が応用され、發揮されるようにする必要がある。このような意味で総合的な学習の時間には、特別活動における経験を遺憾なく發揮することが期待できる。』

## (2) 総合的な学習の時間の学び方

総合的な学習の時間で重視されている問題解決的な学習では、問題や課題の設定及び解決の過程の踏ませ方が大切である。児童生徒ははじめから課題設定能力や問題解決能力を身に付けているわけではない。総合的な学習の時間において、追究する価値のある課題を設定し、解決することができるようするためにも、教師が日常の教科・領域の指導において、ものの見方や考え方、課題設定や解決の仕方を十分に指導し、体験させておく必要がある。

### ①学習課題の発見

課題を見つけるためには、まず、観察対象となる自然事象や社会事象をどのように見ればよいのか、子どもにものの見方を学習させ、自分なりに観察対象を見つめさせなければならない。

日常の生活や学習の中で疑問に思ったり、不思議に感じたりしたことから学習課題を発見させるために、学習の中に課題発見・選択の場を積極的に設けるようにする。教師は、子どもの課題発見の過程を重視し、子どもとのやりとりを大切にすることが求められる。新たな疑問に目を向けさせるために活動の過程で立ち止まらせたり、疑問を広げ深めさせるために学級全員の課題を提示し、学級みんなで話し合わせたりするなど、決定までの過程に十分時間をかける必要がある。

### ②学習課題の修正

課題の選択に当たっては、子どもが取り上げた課題をもう一度考え直させたり、他者の課題を見た後で課題を再吟味させたりする手立てが必要である。教師は、子どもが追究しがいのある課題を選択できるように、指導する必要がある。

よりよい課題は発達段階で異なる。小学校低学年では、疑問を発見し、自ら確かめる過程を大切にする。小学校高学年以上では、課題のもつ価値を判断させ、課題がどのような意味をもつか、これまでの学習とどのように関連するかなどに十分な時間をかけさせ、追究させるようにする。

### ③学習計画の作成・修正

設定した課題を、「内容は追究するのにふさわしい課題か」「資料は入手可能か」「その課題は解決可能か」「解決の方法論は妥当か」など、これまで自分が知っていることや既習事項と関係付けてとらえ直しをさせることが大切である。

「課題を設定したら即追究」と急ぐ必要はない。課題設定から解決へのプロセスをゆっくり踏ませ、課題解決の過程で学ばせるゆとりが大切である。

学習計画の立案では、資料や情報の収集方法、発表の仕方やまとめ方など、課題に即した学習方法を選択させる。日ごろの学習において、KJ法やブレーンストーミングなどの問題解決の技法に数多く触れさせておくことも必要であろう。

教師は、子どもの学習の進め方に問題があると感じた場合には、最初に作成した計画に固執せずに柔軟に修正させ、修正した計画に従って再度学習方法を検討させるようにするとよい。

### ④課題追究（観察）

課題を設定したら、視点を定めて観察対象を見つめ、何度も観察させる。『漠然と見る→自分の見方を明らかにして（課題を踏まえて）見る→自分の見方を確かめるために見る→新たな課題の発見』という観察の仕方を学習させる。子どもは、何をどのように見ればよいのか、見るべき視点が明確になると、今まで分からなかったことが明らか

になったり、学習のつまづきを立ち止まって考えることができるようになったり、課題を見つけたりすることができるようになる。その際、小学校では、特に1、2年生の生活科における観察学習が生きてくるように、生活科とのつながりを大切にしたい。教科・領域における既習事項の使いこなしを図るためにも、学習指導要領との有機的な関連を図る必要がある。

#### ⑤課題解決

大人でも解決できない課題に取り組んだ場合の「解決」とはどのようなことをいうのだろうか。例えば、「酸性雨」というテーマで「酸性雨の原因は工場の排煙だから、地球環境を守り酸性雨をなくすために、工場の操業を止めればよい」という結論を出したとすると、これは解決といえるのであろうか。このような場合、教師の指導の手だけ、配慮が必要となる。

#### ⑥自己評価・相互評価

自分の課題や力に見合った学習計画であったか、学習の進め方に問題はなかったか、学習計画をどの程度達成できたか、学習に満足感は得られたか、今後訂正すべき課題は何か、など、具体的な視点を設定し、評価し合う能力を育てたい。

#### ⑦発表・表現

問題解決的な学習における発表活動では、発表の前後の指導が大切である。一般に発表前は発表に備えてよく指導するが、発表後は指導が十分になされないことが少なくない。これは、発表活動を「終結の段階のまとめの学習」としてとらえているからではないか。発表を、内容についての質問や対立などが生まれる場、見直しや考え方の契機として位置付けてはどうだろうか。発表活動を「発表学習・発表活動の一つの過程」としてとらえ、これまでの学習活動を振り返らせることが大切である。発表は、次の学習のスタートでもある。次の学習につながるように、発表後の指導にも力を入れたいものである。

## IV 総合的な学習の時間の実践事例

以下に、これまで述べた「総合的な学習の時間の取り組みの各段階」における具体的な提言に基づいて実践した6つの事例について紹介する。

### ■1 第1段階「共通理解・実態把握」

事例1は、新しい学校づくりの一環として総合的な学習の時間を位置付け、実践に向けて特別委員会を設置して校内体制を整え、具体的な活動計画作成などを通じて教師間の共通理解を図った栗生小学校の実践事例である。

事例2は、問題解決的な学習を中心とし、教科指導の改善という視点からも総合的な学習の時間についての共通理解を図り、研究を推進し、実践を始めるために校内プロジェクトチームを組織した田子中学校の実践事例である。

### ■2 第2段階「総合的な学習の時間の実践」

事例3は、日ごろの教育実践を総合的な学習の時間にどう生かすか、柔軟な教育課程の編成という視点からこれまでの教育活動を見直し、学習プランを作成した西山中学校の実践事例である。

事例4は、総合的な学習の時間の実践を通して課題と可能性を見出すために、まず準備の整った実施可能な学年から試行を開始し、学習方法・学習形態・学習の場などの課題を検討した榴岡小学校の実践事例である。

事例5は、平成12年度からの教育課程を作成する目的で、全校規模で総合的な学習の時間の実践に取り組み、各学年の実態応じたテーマ設定の在り方、時間割の工夫・発表会の運営の工夫などの課題を検討した広瀬中学校の事例である。

事例6は、移行期の3年間に学校独自のカリキュラムを作成すること目標に、学校の特性を洗い出し、各学年が総合的な学習の時間に取り組み、実践の反省を基にカリキュラム作成に取り組んだ西山小学校の事例である。

### 《事例 1》特別委員会による総合的な学習の時間のアプローチ

栗生小学校では、特別委員会を設置し総合的な学習の時間の在り方や具体化への検討を行い、「子ども一人ひとりが安心して楽しく生活できる学校づくり」を目指した長期的なビジョンを立てた。それを基に、各学年・各担当が具体的な活動計画作成などの作業を行うことを通して、教師間の共通理解を図るとともに、平成12年4月からの実践に向けて準備を進めている。

## I 「総合的な学習の時間特別委員会」

### 1 特別委員会の機能

別主題である校内研究と切り離し、総合的な学習の時間の実施に備え特別委員会を設置した。

総合的な学習の時間を平成12年度から実施していくに当たり、校内の条件整備及び調査研究の推進の中心となり、全体へ提案していく機関として機能させる。

### 2 特別委員会の構成員

特別委員会は、校長、教頭、教務、研究主任、各学年1名で構成し、定期的に開催する。

(校長が特色ある学校づくりの方向性を示す上で大事な役割を果たしている。)

## II 本校における3カ年計画

### 1 平成11年度：「学び、備える」

表1 平成11年度の取り組み

月	取り組みの実際と11年度の検討内容
6	・今後の取り組み方について確認
7	・取り組みに関する原案作成 ①テーマの考え方 ②時間の確保の仕方 ③学校、学年の取り組み方
8	・取り組んでみる具体的な単元の検討
9	・音楽、図工、家庭、体育のカリキュラム作成 ・総合的な学習の時間の単元計画
11	・総合的な学習の時間の単元の検討 ・児童の実態調査、把握
1	・タイムテーブルの検討
2	・次年度からの試行確認 ①総合的な学習の時間のねらい ②カリキュラム等の検討と決定
3	・次年度の取り組みに関する確認

### 2 平成12年度：「実践」

新指導要領に対応できるカリキュラムづくりに着手する。音楽、図工、家庭、体育を新学習指導

要領で定められた時間で行い、時間を生み出す。

学校全体としての総合的な学習に関するねらいを設定し、これまで取り組んできた特色ある内容を生かしていく方向で、各学年が実施可能な分野・内容を決め実践する(表2)。また、地域人材調査を含む地域に根ざした教材開発を進める。

表2 総合的な学習の時間で取り組ませたい分野

分野	内容
福祉教育	・キャップハンディ体験 ・募金運動 ・地域の組織との連携
環境教育	・校内緑化活動 ①・蕃山、斎勝川 広瀬川を通した環境問題
性教育	・健康に関する指導も含む
伝統・歴史	・五郎八姫ゆかりの地 ①・竜神太鼓 ・蕃山(民話:磐二磐三郎) ・隠れキリシタンの里
野外活動など	・各自の計画に基づく活動やまとめ
栽培・緑化	・さつまいも栽培 ①・イネの栽培 ・学級農園、花壇の世話など
体力づくり	・水泳記録会や陸上記録会に向けて の取り組み(5、6年生)

(\*情報教育は各分野においてコンピュータなどを利用する過程で行う。)

### 3 平成13年度：「全面実施へ向けて」

学習内容すべてを新学習指導要領に移行し実施してみる。時間割も新指導要領に対応できる形を模索し、平成14年度からの新学習指導要領の全面実施に備える。

総合的な学習の時間のカリキュラムを作成する。総合的な学習の時間を行う予定時間は次の通りである。

3、4年：105時間 5、6年：110時間

### III 実態の把握と「特色ある学校づくり」

#### 1 地域の実態・特色の把握

- ①南には蕃山の峰々がそびえ、北に広瀬川、学区の中ほどを斎勝沼を源とする斎勝川が流れる自然豊かな地域である。
- ②近年、宅地化が進み、次々と住宅団地が造成されている。また、学校北部を中心に県営住宅や県職員住宅があり、古くからの住人と新しい住人などが混在する地域である。
- ③伊達政宗の姫、五郎八姫が移り住んだ土地である。キリスト教であったと伝えられる姫が建立したと言われる鬼子母神堂等があり、キリスト教の聖日（旧8月15日）に奇祭が行われるなど、歴史的にも由緒ある地域である。

#### 2 児童の実態把握

児童の実態把握の視点（P.3～4参照）をもとに調査した結果、下記のような習慣や力が本校児童に不足していることが分かった。

##### (1) 自ら学ぶ意欲の前提となる学習習慣

- ・教師の話を聞く習慣
- ・解決方法を工夫する習慣
- ・原因を明らかにする習慣
- ・参考資料を活用する習慣
- ・学習計画を立てて実行する習慣

##### (2) 総合的な学習の時間で身につけさせたい力

- ・問題がどこにあるか判断する力
- ・問題を重要な順に整理する力・決定を下す力
- ・活動時間を有効に使うことができる力
- ・自分の思いや考えを伝えることができる力

#### 3 「特色ある学校づくり」の視点から取り組ませたいプラン（例）

「校歌に歌われている私たちの山、蕃山」

《このテーマで身に付けさせたい力》

◎自分たちの力で調べたり、確かめたりすることの楽しさを味わうことができる力

◎郷土の歴史や自然のすばらしさに気付き、住んでいる地域に誇りを抱くと共に、自然を大切にしていこうという気持ちをもつことができる力

#### 4 ウェビングによる予想される学習内容

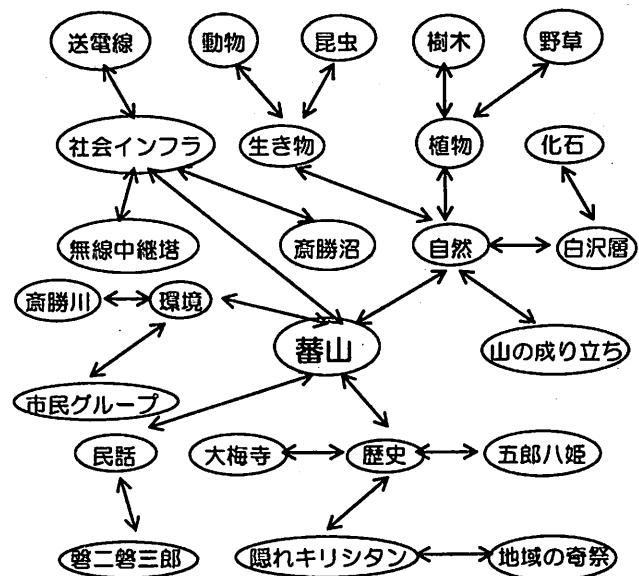


表3 学習を進めていくに当たっての資料・方法

自然	<ul style="list-style-type: none"> <li>・副読本「仙台の理科」</li> <li>・図鑑の活用</li> <li>・「蕃山21の会」の協力</li> <li>・登山（観察）</li> </ul>
環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔と現在の比較（航空写真、地図等の活用）</li> <li>・ブナの原生林</li> <li>・蕃山周辺の都市開発計画</li> <li>・市民グループの協力</li> </ul>
歴史	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の老人の話</li> <li>・史跡の調査、見学</li> <li>・文献調査</li> <li>・文献「旧宮城町史」</li> <li>・仙台市博物館の見学（資料収集）</li> </ul>
民話	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仙台の民話</li> <li>・地域老人の話</li> <li>・VTRの活用「広瀬川にまつわる民話」（建設省作）</li> </ul>
社会インフラ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東北電力の協力（電気に関する調査）</li> <li>・郵政省、NTTの協力</li> <li>・斎勝沼、川の調査</li> </ul>

#### IV 実践の中から見えたこと

##### (1) 目的を明確にして組織した特別委員会

職員の共通理解を図り、総合的な学習の時間を全職員が校内で共に学んでいく上で、また諸条件を整備する上で中心的な役割を果たした。

##### (2) 特別委員会の構成メンバー

校長が委員会に入り、校長としてのビジョンを積極的に示すことにより「特色ある学校づくり」を中心とした本校の総合的な学習の時間の在り方を委員会の中で検討することができた。

## 《事例2》教師の意識改革と協働の精神の構築を目指すプロジェクト会議の設置

田子中学校では、どの生徒にも「意欲・学び方・生き方」をはぐくむことを目指して、プロジェクト会議を設置し、総合的な学習の時間を学校づくりの一環として、組織的に研究と実践を推進する体制づくりを行った。そして移行期における活動プログラムを作成するとともに、問題解決的な学習を中心とした教科指導の改善や行事の見直しを行っている。

### I 組織的な体制づくり

#### 1 プロジェクト会議の設置と位置付け

総合的な学習の研究推進母体として、総合的な学習のプロジェクトチームを組織し、月1回の定例会(プロジェクト会議)をもつ。校長、教頭、教務主任、各学年の代表と研究主任の7名で構成し、特色ある学校づくりのための教育活動の一環として総合的な学習の時間を位置付け、組織的に研究と実践を推進する。(表4)

表4 プロジェクト会議の主な活動内容

No.	期日	活動内容
1	9/28	プロジェクト会議の位置付けの確認、今後の活動内容、日程の決定
2	10/1	資料の配付と読み合わせ
3	10/28	校内研修会「総合的な学習の時間とは何か」 (講師:教育センター指導主事)
4	11/19	今後の進め方の確認、実態調査のアンケート項目の作成
5	11/30	実態調査の実施と集計(教師と生徒)
6	12/20	校内研修会「問題解決的な学習とは何か」 (教科ヒアリング)

#### 2 プロジェクト会議の基本方針

移行期の取り組み(P.3~9)を基本方針とし、平成14年度には田子中独自のカリキュラムを編成する予定である。

#### 3 プロジェクト会議の主な活動内容

##### (1) 校内研修の充実

「総合的な学習の時間をどうするのか」のみに心が向きがちであるが、教育改革の今こそ、教師全員が新学習指導要領告示までの経緯や趣旨を正しく理解することが必要である。その上で小さな実

践を積み重ね、指導の工夫・改善を図ることが、教師の意識改革のうえで有効であると考える。

そこで本校では「中教審第一次答申」「教科審答申」「新学習指導要領第一章総則」などの資料を配布した。特に総合的な学習の時間については、配布した資料の読み合わせを行ったり、仙台市教育センターの指導主事を講師に、校内研修会を実施するなど計画的に研究会を開催し、全体で共通理解を図ることを重視した。

また定例の校内研修会だけでなく、適宜職員会議や朝の打ち合わせ等の機会をとらえ、教育改革や総合的な学習などについての情報交換を行い、話題づくりに心がけた。このような過程を踏むことで、教師一人一人が「自分はこの時間で何ができるのか」という課題意識を高め、その結果、担当者任せの雰囲気を払拭できるものと考える。

##### (2) 卷紙式時間割の試行

総合的な学習の時間に向け、平成11年4月より卷紙式時間割を試行している。その評価を基に平成12年度に向けての改善策を作成中である。

##### (3) 活動プログラムの作成

平成13年度までの準備すべき点についてプロジェクト会議で原案を作成し、教師全員で共通理解し、実践にあたる。(表5)

(4) 生徒の実態調査と身に付けさせたい力を明確にするために、生徒自身の自己評価と教師の観察による生徒の実態調査を実施した。(調査項目についてはP.3~4参照)

### II 問題解決的学習を取り入れた教科指導の改善

総合的な学習の時間のねらいのひとつに問題解

決的な学習法の習得がある。問題解決的な学習に関しては、以前から教科指導でもその必要性が指摘されてきたがあまり実践されていない。そこで教師の意識改革を図るため、まず教科で問題解決的な学習を実践し、教師の自信と意欲を喚起しようと考へた。教師が教科指導で問題解決的な学習法を体験すれば自分の持ち味を生かしながら総合的な学習の時間への応用が容易になるであろう。平成11年度の3学期に全教科で問題解決的な学習に取り組み、その成果と課題を教科ごとにレポートにまとめ、問題解決的な学習に関する研修を深めていく。

### III 既存の行事の見直しと試案の作成

既存の学校行事については、以下に示す総合的な学習の時間の視点から見直した。

- ①各自の課題が設定可能な活動があること
- ②体験的な活動が取り入れ可能なこと
- ③生き方の探究との関連が可能なこと

また、福祉、環境、国勢理解教育の内容も含め、総合的な学習の時間の活動案を作成した。（省略）活動母体は学年単位とし、1年間を前期と後期に分けて3年間の見通しをもち、実践することにした。実践の積み重ねの過程で、総合的な学習の時間の最終目標である「生き方の探究」についてもさらに深めることができるものと考える。

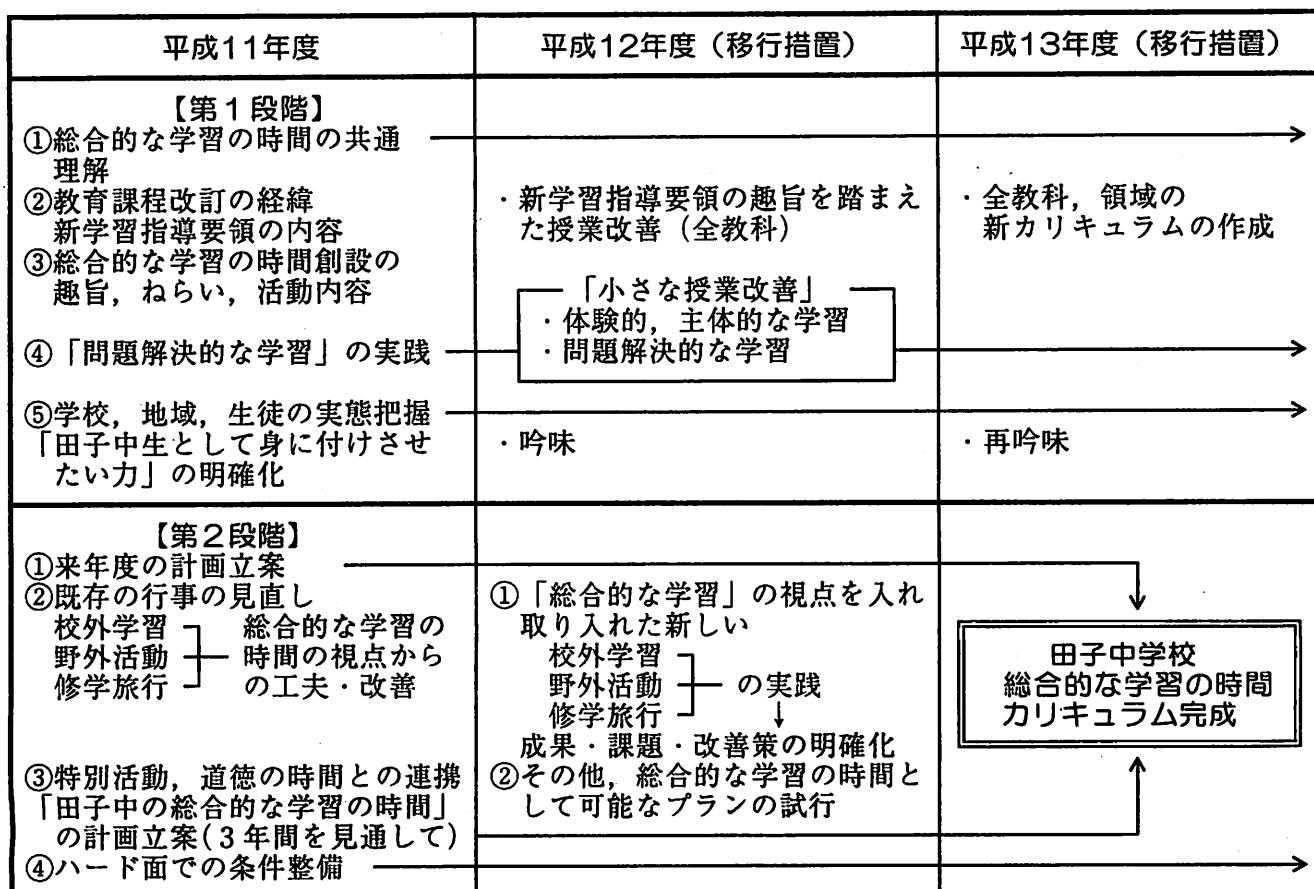
現在、平成12年度の学校行事を立案中である。野外活動では登山だけでなく、理科との関連から

“あぶくま洞”での調査・観察を、修学旅行では社会科、進路学習、国際理解教育との関連から、ユニセフなどNGOの訪問と調査を予定している。

### IV 実践の中から見えたこと

- (1) 総合的な学習の時間の試行と成果
- (2) 課題の分析と平成13年度の計画立案の視点
- (3) 田子中学校として、生徒に身に付けさせたい力の再吟味
- (4) 教科指導の工夫・改善の視点

表5 今後3年間の活動プログラム



### 《事例3》既存の取り組みの見直しを通した実施計画づくり

西山中学校では、総合的な学習の時間の柱として「長く根付く学習活動」「柔軟な教育課程の編成」「教師の組織化と連携の強化」を中心に据えて実践をしている。特に、既存の取り組みの見直しを図り、平成12年度からの3年間を見通した活動計画を立案し、時数の設定を行った。このような実践を通して新教育課程への教師の意識改革が少しずつ進んでいる。

## I 総合的な学習の時間の柱

### 1 長く根付く学習活動

指導者の有無に左右されるのではなく、生徒や地域の実態を踏まえた上で長く続けられる学習内容を考えた。

### 2 柔軟な教育課程の編成

実践を第一とし、できるだけ運用がしやすく移行期間中の3年間を有効に使える教育課程を考えた。

### 3 教師の組織化と連携の強化

研究推進委員会を中心とし、全体会・教科部会・学年会を密接に連携させながら、全職員を挙げて計画的段階的に研究に当たった。

## II 見直し可能な既存の取り組み

### 1 なぜ既存の取り組みの見直しなのか

(1) 今まで実践してきた内容だけに、指導内容や指導方法、時数などの具体的な課題が全職員間で共通理解しやすい。

(2) 各教師が今やるべきことが、絞られる。

①意識改革（専門性を外したり個性や特技を生かす、支援者・コーディネーター・チームプレイヤーとしての役割）

②授業の改善

③総合的な学習の時間の流れ（『概要説明→テーマ把握→課題発見→調査活動→体験学習→表現活動→発信→行動・実践』の段階的指導）

④全教科による学び方の訓練（課題設定・メディア利用・表現活動）

(3) 資料や教材、施設や設備が比較的充実しており、予算を最小限度に押さえられる（購入物が厳選できる）。

## 2 現在の指導事項で見直し可能な学習内容

	学習内容			学習活動
学年	1年	校外学習	行事	社会体験
	2年	職場体験	進路	社会体験
	3年	野外活動	行事	自然体験
	高校調べ	進路	進路調査	進路調査
	修学旅行	行事	社会体験	社会体験
学校	先輩に聞く	進路	進路調査	進路調査
	菊作りボランティア	環境	栽培・福祉	栽培・福祉
	音楽活動	行事	教科	教科
	文化発表会	行事	発表	発表
	エイズ教育	健康	調査	調査

## III 実践計画例

### 1 平成12年度新入生の3年間の指導計画（案）

年度	段階	学習内容		時数
平成12年	70時間	校外学習	行事	10
		菊作り※	環・福	12
		施設訪問	環・福	10
		文化発表会	行事	5
		職場体験	進・情	23
		野外活動	行事	10
平成13年	105時間	野外活動	行事	25
		創作活動	環・福	15
		施設訪問	環・福	5
		文化発表会	行事	5
		高校調査	進・情	35
		修学旅行	行事	20
平成14年	105時間	修学旅行	行事	35
		先輩に聞く	進・情	10
		文化発表会	行事	30
		卒業式	行事	30

(環・福=環境・福祉 進・情=進路・情報)

## 2 菊作りの指導例

### (1) ねらいと活動内容

	合意的な学習の時間の ねらい	菊作りでの 活動内容
資質や能力	自ら課題を見つけ、 自ら学び、自ら考え 主体的に判断し、よ りよく問題を解決す る資質や能力を育て ること	・植物の特性と栽培計画 の理解 ・委員会活動計画 ・環境調査 ①起源 ②品種 ③土 ④栽培法 ⑤イベント
方法的能力	情報の集め方、調べ 方、まとめ方、報告 や発表・討論の仕方 学び方やものの考え方 方を身に付けること	・情報収集 ①書籍 ②パソコン ③実地調査 ・観察日誌と栽培記録 の作成 ・委員会便り、ホームページ ・贈呈状、集録作成
態度の育成	問題の解決や探求活 動に主体的、創造的 に取り組む態度を育 てる	・リーダーの選出 ・菊ボランティアの選出 ・グループ編成 ・調査と栽培(管理・作業) の実際
生き方自覚	自己の生き方につい ての自覚を深めるこ と	・道徳の時間の学習 ・開花感想 ・贈呈施設訪問 (卒業小学校、福祉施設、 校医等)

### (2) 活動計画 (12時間扱い)

月	活動内容※
4	①菊栽培の意義と流れ
5	②学級テーマ（課題）の提示と選択
6	③課題調査と作業1（さし芽）
7	④課題調査と作業2（定植）
9	⑤課題調査と作業3（摘蕾） ⑥道徳
10	⑦作業4（輪台）と贈呈状書き ⑧⑨出発式と贈呈施設訪問
11	⑩課題調査と感想文書き ⑪⑫発表会とまとめ

※ 菊作りは、1学年は授業で全員が取り組み、2学年以上はリーダーとして希望者が取り組む。

## 3 平成12年度の教育課程編成にあたって

- (1) 総合的な学習の時間は、1学年は週2時間、2～3学年は週1時間実施する。
- (2) 総合的な学習の時間の確保として、現在上限の時間をとっている教科の時数を削減する。
- (3) 1学年の2時間は時間割上1時間ずつ設定するが、偶数週は2時間続きで使えるようする。
- (4) 総合的な学習の時間の1時間は、全学年同じ時間設定にし、運用をしやすくする。
- (5) 総合的な学習の時間は学年で担当する。
- (6) 総合的な学習の時間では、学校行事への取り組みと関連させた実践を行う。
- (7) 平成12年度週時程（案）

A週（奇数週）						
校時	月	火	水	木	金	土
1	1	6	12	17	23	28
2	2	7	13	18	24	29
3	3	8	14	19	25	30
4	4	9	15	20	26	
5	5	10	16	21	27	
6	創意	11		22	創意	

B週（偶数週）						
校時	月	火	水	木	金	土
1	1	6	12	17	23	
2	2	7	13	18	24	
3	3	8	14	19	25	
4	4	9	15	20	26	
5	5	10	16	21	27	
6	28	11	30	22	29	

## IV 実践の中から見えたこと

- (1) 今までの取り組みを見直す学習活動なので、内容的には取り組みやすかった。
- (2) 今までの取り組みを見直す学習活動の中から学年主導の指導体制や時間割作りとその運用、そして今後の教科指導など、次の段階の具体的な課題も見えてきた。
- (3) 平成14年度全面実施に向けた実践として、職員の共通理解を図りながら柔軟な発想の実践をしたいと考えている。

## 《事例4》学年テーマで取り組む総合的な学習の時間

榴岡小学校では「まず一つの実践から総合的な学習の時間に取り組み、課題と可能性を見出していくこう！」を合い言葉に、研究主体を学年（部）とし、具体的な実践に取り組んだ。5年生は、児童の興味・関心と教師の願いをもとに、学習課題と学習活動を構想し、活動にふさわしいグループ活動の在り方を工夫しながら実践している。

### I 計画立案に当たって

今回の総合的な学習の時間を実践するに当たり、以下の視点から計画を立案した。

#### 1 総合的な学習の時間の視点から

- ①児童の興味・関心をもとに、一人一人が課題を設定し解決していく過程を重視する。
- ②児童が目的地の選択をしたり、交通手段を考え実際に利用したりすることも、生きる力をはぐくむうえでは重要な活動である。

#### 2 児童の実態から

- ①問題解決的な学習や、見通しを持って取り組む活動の経験が不足している。
- ②領域によって児童の興味・関心に差があり、行動面の意欲にまで反映している。

#### 3 教師の願いから

- ①児童にとっても興味のある題材である「食」をテーマに総合的な学習をすることにより、学習スタイルに児童を慣れさせたいと考えた。
- ②「食」にかかわる人々の願いや思いに直接触れるのは、自分たちの生活を見直す機会である。

#### 4 その他

必要があれば、範囲を宮城県内にまで広め、できるだけ児童の要望に合う目的地を選定させる。

### II 校外での調査活動に至る経過

#### 1 課題設定・学習計画に当たって

以下の点で教師の共通理解のもとに行った。

- ①事前学習のための資料を、学年担当の3人の教師で手分けし、市内の各施設を回り収集する。
- ②適切な課題になるまでは、児童間の練り合いを大切にするとともに、解決の見通しのつく課題設定となるように教師が積極的にかかわる。

③個々の児童に課題設定をさせていく中で、似たような課題や調査地については、安全面からも積極的にグループ化を図る。

④列車やバスの時刻、各施設の営業時間についても児童に調べさせる。

#### 2 教師側の主な動き

表6 教師の仕事内容

No.	教師の仕事内容	備考
1	各グループの調査地や日程の把握	・市外(白石、亘理、名取、岩沼、松島、塩釜)→6グループ ・市内(学区外)→5グループ ・市内(学区内)→8グループ
2	訪問先との連絡	・趣旨、日程等をまず電話でご理解いただく。
3	行動一覧表の作成	・児童名、目的地、連絡先、人数、日程等。
4	訪問先への依頼状の作成・発送	・依頼状には、児童の乗る予定の列車・バスの到着・発車時刻も明記。
5	保護者説明会実施	・説明会を開き、保護者に説明。 ・当日、保護者に巡回を依頼。
6	出発・帰着チェック表の作成	・各グループごとに調査地が異なる。 ・学校を出発・帰着地として、教師が見送り、出迎える。
7	礼状の作成と発送	

#### 3 児童側の主な動き

##### (1) 学習について教師側から説明を受ける

T：総合学習とは、一人一人の興味や関心をもち、課題を立てます。その課題を解決したり追究するためには、どんな方法があるのかよく考え、学習計画にそって実践していく学習です。

## (2) 学年テーマを知る

T：学年テーマ「食べる・食料・わたしたち」です。このテーマから思いつく言葉を自由にあげてみましょう。

## 【児童が思いついた言葉（抜粋）】

- ・噛む・味わう・体つくり・新鮮な野菜
- ・食生活の習慣・環境破壊・食糧自給問題
- ・品種改良・砂漠化・人口増大・松坂牛
- ・食料不足の国・食料の安全性・韓国料理
- ・ダイオキシン・プロテイン・ドリンク

## (3) 課題とその解決のための調査先を考える

T：一人一人の学習計画をたてます。課題を決める前に図書室で調べたり、電話やインターネットで調べたりしてみましょう。

## 【児童が考えた課題と調査先（抜粋）】

- ・米の品種とおいしさ→名取農業センター
- ・亘理いちごの作り方とその工夫→J q 亘理営農センター
- ・なぜ「笹かまぼこ」と言われるようになったのか。手作りのものと大量生産されたものとの違い→佐藤蒲鉾店、笹生の里
- ・「噛むこと」について→泉図書館
- ・手打ちそばの仕方とその秘密→学区内児童の保護者の店
- ・豚肉とおいしい料理の仕方→学区内精肉店

## (4) 課題を見直す

T：自分が立てた学習課題について、みんなで検討してみましょう。

T：友だちや先生の話をきいて、必要ならよりよい課題や学習計画に直していきましょう。

## 【課題の修正が必要だったケース】

- ・事前の調査や学習が不十分なグループや「食べる」だけが目的で、調査・体験しようとする意識が薄いグループもあった。
- ・日程的に無理がある。（午後1時に戻る約束）

## (5) 実際に調べたり体験する

T：学習計画をもとに、実際に調べたり体験したりしてみましょう。

## 【実際にあった予想外の出来事】

- ・仙台駅発の常磐線が遅れたために、南仙台駅で連絡するバスに乗り遅れた。
- ・予定していたパン工場が、閉鎖。関連の工場を改めて紹介してもらう。

## (6) 調べたり体験したことをまとめる

T：どんなことに取り組んだのか、お互いに見える形で発表しましょう。そして次のことを考えに入れてまとめてみましょう。

- ・学習を通して「食に対する考えがどのように変わったのか」
- ・学習を通して、「自分の生活を振り返る」

## (7) 発表会(12月8日)

実演を取り入れながら、ポスターセッションを主とした発表になった。

(当日は中国の小学校教員30名も見学)



写真1 見学風景（塩釜水産加工場）

## III 実践の中から見えたこと

- (1) 校外学習の場合、積極的にグループ化を図り、安全面に配慮することが必要である。
- (2) 市外での活動も予想して、普段から市内はもとより県内の学校間におけるネットワークを作っておくことが望まれる。
- (3) 学習記録ファイルをもたせ、教師側で作成した学習カードや自分で集めた資料を活用して整理させることによって、児童は自分自身で学習の流れをつかむことができた。

### 《事例5》短期集中型の時間割編成による全校での取り組み

広瀬中学校では、教科担任制という中学校の特質を生かすために、まず全校体制で実践を行い、そこから課題を明確にして、平成12年度からの教育課程を作成することを基本に、実践に取り組んだ。特に、教科を視野に入れながら、学年所属の教師でチームを組み、短期集中型の特別時間割を編成した。各学年ごとにその実態に応じたテーマを設定し、調べ学習や課題解決学習中心の総合的な学習の時間を実践している。

## I 全校体制の総合的な学習の時間の設定

### 1 時間の設定

#### (1) 時間割の設定にあたって

現行の時間割は、中学校の場合、教科担任制の枠組みから、2教科以上の教科担任による合科的な取り組みが難しい。

学年所属の教師を当該学年の総合的な学習の時間の担当にすると、時間割の調整が比較的容易である。

#### (2) 短期集中型の時間割の設定

全校体制で総合的な学習の時間を実践するためには、短期集中型の時間割を設定した。(表7)

##### ①必要な学習時間の摸索

- ・特別時間割を編成し、時数を調整
- ・19時間扱いのまとめ取り

##### ②適切な設定時間の摸索

- ・時間割は3パターンを設定

1日に1时限(50分)2时限続き(100分)1

日に6时限続き(全日)

### 2 教師の支援体制

学年や生徒の実態に応じて学習集団を組織し学年所属の教師を、教科を意識した合科的なTTに編成して、各分野の助言、支援にあたった。

(例: 食べる~保健体育科・技術家庭科担当教師、  
淘える~国語科・英語科担当教師など)

また、学年を掌握する担当やインターネット担当、図書室担当、資料コピー担当を置き、生徒の要望にできるだけ応えられるようにした。校外での調査活動時には、安全面から各施設や駅などに、教員を配置し、事前に計画書を提出させ、生徒の所在と活動の把握に努めた。

表7 短期集中型の時間割と学習内容

月日 (曜) (月)	時間割	総合的な学習の時間内容 (19時間扱い)
8/30 (火)	1 2 3 4 5 創	・学年所属教師の組織編
31 (火)	1 2 3 4 総 総	・生徒へのガイダンス ・学習集の組成
9/1 (水)	1 2 3 4 5	・資料収集 ・条件整備
2 (木)	1 2 3 4 総 総	・課題設定 ・図書室等利用 ・学習計画書の作成
3 (金)	1 2 3 4 5 6	
4 (土)	総 奉 奉	・課題の追求 ・図書室等利用 ・校外学習の計画
6 (月)	1 2 3 4 総	・課題の追求 ・資料収集 ・図室等利用
7 (火)	1 2 3 4 5 6	
8 (水)	1 2 3 4 総 総	・課題の追求 ・資料収集 ・まとめの計画
9 (木)	総 総 総 総	・校外学習 ・まとめ ・発表会準備
10 (金)	1 2 3 4 総	・まとめ ・発表会準備
13 (月)	1 2 総 総 5	・発表会① ・相互評価、自己評価
14 (火)	1 2 3 4 総 総	・発表会② ・相互・自己評価 ・活動のまとめ

## II 生徒の学習活動

### 1 学習の主な流れ

学年ごとに教師が設定した大テーマを基に、生徒が興味・関心に応じて各々小テーマを設定した。生徒がテーマに基づき資料を収集し、校外での調査研究を行い、発表するなどの活動を、今回の総合的な学習の時間の学習活動とした。資料収集には、主に学校図書やインターネットを活用させた。

### 2 課題設定

#### (1) 学年テーマから班テーマへ

1年生は学級担任が助言しやすい「国際理解」をテーマに、2年生は「野外活動の事前学習として気仙沼大島に関連した環境、文化、産業経済、歴史」を、3年生はすでに体験した「東京方面の修学旅行」に関連づけて「東京」とした。(表8)

表8 各学年テーマ・学習集団・担当教師

学年	学年テーマ	学習集団	担当教師
1	国際理解	学級生活班	1学年学級担任 + α
2	野外活動 「大島」	同好の分野 同好の班	2学年所属の合科的なTT
3	修学旅行 「東京」	同好の分野 同好の班	3学年所属の合科的なTT

## (2) 課題設定場面での教師の支援

学年テーマに関連する小テーマを数多く考えさせ、課題の系統図を作成させた。課題設定が苦手な生徒には、特に援助・助言し、有意義な課題解決学習になるよう配慮した。

## (3) 校外での調査研究活動

班ごとに計画を作成させ、校外の施設などに行けるようにした。(表9)

表9 テーマと調査場所

	大テーマ	小テーマ	人	調査場所
1 学 年	国際理解	カナダの自然と文化	5	宮城県図書館
	国際理解	中国の歴史 (秦、漢、三国志)	7	アエル (兵馬俑展)
	国際理解	韓国の民族衣装	6	支倉ビル
	国際理解	台湾の歴史	6	民家 (聞き取り調査)
2 学 年	大島文化	大島の食文化	6	図書室 インターネット
	大島環境	うみねこ	7	環境センター
	大島産業	大島の人口と産業	4	県庁・市役所
3 学 年	住む	水	5	国見浄水場
	住む	東京と仙台のごみの違い	6	リサイクルセンター
	働く	電気店の比較	6	ヨドバシカメラ
	伝える	英語で東京を紹介しよう	5	国際センター
	食べる	自分たちの食生活と健康	5	給食センター

## 3 発表会の運営

学年を大きく発表するグループと発表会に参加し聴講するグループの2つに分け、1日目と2日目で、発表と発表会参加を交替して会を運営した。発表用に模造紙の説明資料や説明用プリントを用意させた。民族衣装を実際に着たり、各国料理の調理や、英語で発表したりするなどの取り組みがあった。発表者は聴衆に分かりやすい説明(発表の形式は、班の創意工夫で自由)を心がけていた。発表者は、聴衆に評価カードを記入してもらうことにより、自己評価に役立てることとした。

調査、学習したことを発表するという学習活動は、学習内容を深く理解、把握するために大変有効な手段となった。聴衆を意識することは、調べ学習をするうえでも、学習の目標や励みになり、表現力の育成にもつながった。発表会当日は、学級、学年の枠をはずして、個人の興味・関心に応じて移動しながら参加できる形式にしたので、1年生が3年生から学ぶことも可能になった。また、発表を聴いた人から評価カードをもらう儀式は、学習の励みにもなり、自己評価についても客観性がより高いものになった。

## III 実践の中から見たこと

- 教師が設定した課題よりも、生徒が興味・関心に応じて自ら設定した課題の方が、生徒の自律性と自己有能感を伸ばすことが分かった。
- 保健室によく行く座学が苦手な生徒も、この時間には自分から進んで活動したことなど、予想を越えたプラス面の効果が出た。
- 総合的な学習の時間が創設されれば、その分教科の時数が減ること、したがってより一層の基礎・基本の精選と指導の徹底を図った教科の年間計画づくりが大切であることが実感できた。
- 行事や選択教科等との関連などを含めた、各学校独自の特色ある教育課程づくりが必要であることに対して共通理解を図ることができた。

### 《事例6》授業と結びつけた総合的な学習の時間のカリキュラム作成

西山小学校では、移行期の3年間で学校独自のカリキュラムを作成することを目標に、総合的な学習の時間の研究と実践を始めた。特に、共通理解を図るために学習会と教師一人一人の持ち味を生かした組織づくりを重視するとともに、カリキュラムの基盤となる学校の特性の洗い出しと、総合的な学習の時間の活動の充実を目指した授業実践を展開している。

### I 平成11年度の実践内容

#### 1 共通理解を図る学習会（全8回）

#### 2 教師一人一人の持ち味を生かした組織

##### ①研究班…学年を越えた組織

- ・地域素材研究班（マップ・一覧作り、施設の概要調査、校地内素材整備等）

- ・人材開発班（ゲストティーエマーの発掘等）

- ・情報班（研修図書紹介、校内学習環境整備等）

##### ②授業研究…学年（部）での取り組み

##### ③T T委員会…みんなで取り組む指導体制

- ・学年TT・加配教員・養護教諭・栄養職員等

#### 3 学校の特性の洗い出し

##### （1）実態の把握

- ①児童（特性、追求したい学習等）

- ②教師（趣味、特技、ネットワーク等）

- ③学校（施設、設備、諸活動等）

- ④地域（人材、自然、施設等）

#### （2）学校の特性を考える視点

- ①本校児童「育てたい力」を考える

- ②取り上げたい課題を考える

- ③校舎・校地の活用を考える

- ④校外学習・行事・諸活動を見直す

- ⑤カリキュラム・時間割の工夫を考える

#### 4 授業実践の積み重ね

##### （1）学校として「育てたい力」の共通理解の視点

- ①課題解決能力 ②学習意欲・態度・習慣

- ③創造的思考力 ④表現力

- ⑤社会性・コミュニケーション能力

- ⑥感性・心情 ⑦情報活用能力

##### （2）授業実践と授業検証の視点（表10）

- ①活動のねらい（育てたい力）について

- ・活動の様子、単元活動計画、活動過程、支援

- ②「授業仮説」について

- ・総合的な学習の時間のテーマとしての有効性

表10 授業実践と検証の視点

[テーマ]	学習活動	時数	「活動のねらい」について	「授業仮説」について
3学年	[クラブ活動をしよう] 児童の興味・関心に基づく同好会的な集まりによる活動とその発表	23	主体的・自動的な活動が見られた。話し合い活動を重視し少數意見を大切にすることが、互いのよさを認め合い協力することにつながった。外部講師の活用も検討したい。	4年生からのクラブ活動を前に、クラブ創設から主体的に参加しようという意欲を高めた。児童の主体性と教師の特性を生かした単元づくりとして有効である。
4学年	[始めようボランティア] キャップハンディ教室での体験を基に自ら見つけた課題についての問題解決的な学習	11	体験を問題解決的な学習に発展させたことで学習に深まりがみられた。「思いやりの心を育てる」というねらいを達成するためには、実践化・生活化まで視野に入れた単元づくりが必要である。	「福祉」は「課題」として取り上げたい。全学年継続した活動が必要だが、特に4年での「親子キャップハンディ体験」は有効である。
5学年	[みんなで作る劇] 学芸会での発表を目指した児童自らによる創作劇	27	一人一人が主体的に取り組み、個性を生かした創造力・表現力が發揮できた。学芸会での発表の成功により、達成感・満足感が味わえた。	児童の思いと教師の願いを生かした課題による単元づくりとして有効。学芸会という行事への主体的参加の在り方の示唆にもなった。
6学年	[酸性雨] 理科・社会科学習を含めた横断的・総合的で問題解決的な学習	33	問題解決的な学習の各段階において様々な工夫をすることで、児童は学習意欲を継続し、主体的に多様な課題追求ができた。地域隣接の環境情報センターとの連携も継続したい。	「環境」は「課題」として取り上げたい。地球規模の課題を、地域の実態を通して、学年に応じた系統的・継続的な取り組みについていく方法を考えたい。

## II 平成12年度の計画

### 1 計画づくりための共通理解

11年度の実践をもとにカリキュラム作成に向けてのプランを立て、研究実践をさらに広げ、深めるためには、移行措置全体の見直しが必要であることから、以下の点を確認した。

#### (1) 移行措置による各教科の授業時数

①14年度へ向けての段階的削減

②総合的な学習の時間の生み出し

#### (2) 総合的な学習の時間の単元数と時数

①2単元+全校総合的な活動

②年間70~80時間実施

#### (3) 時程・時間割の工夫

①15分モジュール、1ブロック90分の時間設定、それに伴うノーエヤイムの導入

②基礎・基本の繰り返し時間の設定

#### (4) 行事の見直し

①準備時数と行事の在り方

②総合的な学習の時間として扱う行事

### 2 当校の総合的な学習の時間の課題

①現代的な課題（課題A）

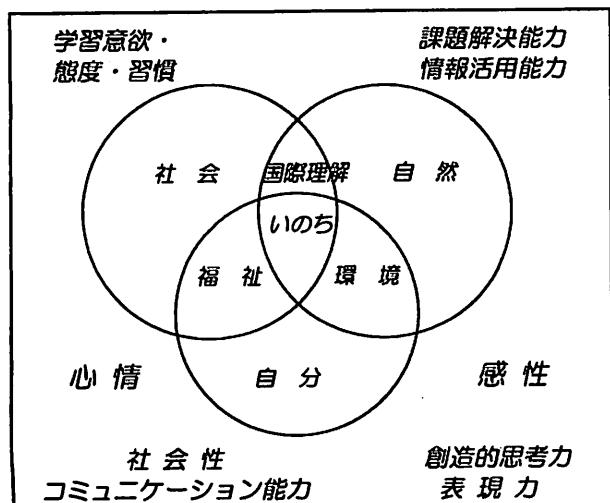
②児童の実態、教師の特性を生かした課題、トピック的な課題（課題B）

③児童の発想による課題（課題C）

④学年の枠をはずした活動（課題D）

### 3 カリキュラム作成に向けてのプラン

#### (1) 「育てたい力」と「課題」からのプラン



#### (2) 「課題」「学年」「時数」からのプラン

①() 内は各課題の目安の時数である。(表11)

②課題A・Dでは、学校の特色が出せる。

③課題B・Cでは、児童・教師の主体性が生かせる。

④課題Dの活動としては、「西山まつり」「国際交流」「縦割り活動」などが考えられる。

表11 学年・課題類型別の時数プラン

	課題A	課題B	課題C	課題D	計
6年	国際理解 (30)	(40~50)	卒業テーマ (20)	(10~20)	110
5年	環境 (30)	(40~50)	2テーマ (20)	(10~20)	110
4年	福祉 (30)	(45~55)	1テーマ (10)	(10~20)	105
3年	いのち (30)	(45~55)	1テーマ (10)	(10~20)	105
1,2年	生 活 科			(10~20)	

## III 実践の中から見たこと

(1) 学校の特性を生かすためには、地域の特性を生かすという視点だけでなく、これまでの諸活動の見直しや教師の特性を生かすという視点も有効であり、それらを生かすカリキュラムプランがあるとよい。

(2) 総合的な学習の時間の充実を図るために、追究に値する課題の設定と、学校として、授業レベルとしての「育てたい力」の吟味と学年(部)の系統性を明確にすることが必要である。

(3) 各教科・領域との関連、特に、生活科との系統性、課題解決の手段としての情報教育の在り方、表現力を高める国語科の在り方との関連性などを明確にしていきたい。

(4) 試行錯誤ではあるが、実践に勝るカリキュラム作成はないと考える。実践することによって課題が見え、次のカリキュラム作成に生かすことができた。

## V おわりに

### ■ 1 研究のまとめ

当調査研究委員会では、総合的な学習の時間は新学習指導要領の移行措置の実施を前に、すでにその理念の理解の段階にとどまらず、実践を通して理解を深める段階に入ったとの認識から、総合的な学習の時間の実践上の課題を検討してきた。平成11年度の総合的な学習の時間の取り組みの在り方として、次のような2つの段階を設定し、具体的な施策を提言すると共に、各段階における実践事例を紹介した。

#### 《第1段階「共通理解・実態把握の段階」》

特別委員会（校内プロジェクトチーム）を組織して条件整備に取り組んだ栗生小学校（事例1）及び田子中学校（事例2）の事例。

#### 《第2段階「試行・実践の段階」》

既存の取り組みの見直しを通して実施計画づくりを図った西山中学校（事例3）、実施可能な單一年度の実践から開始した榴岡小学校（事例4）、学校全体で取り組んだ広瀬中学校（事例5）、総合的な学習の時間の実践の反省を基にカリキュラム作成に取り組んだ西山小学校（事例6）の事例。

### ■ 2 課題

新学習指導要領の移行期間に入る平成12年度は、もはや「試行」の段階ではない。「教育課程に位置付けて」実施していかなければならない時期である。各学校においては、平成11年度の試行の上に立ち、学校の実情を踏まえ、準備が出来次第、週1～3時間程度の総合的な学習の時間の実践を始める必要がある。

実践に当たっては、教科間の連携を図ったり、チーム・ティーチングにより教師間の協力体制を確立したりするなど、指導の改善を図りながら、総合的な学習の時間の全面実施を視野に入れた「学校の財産としてのカリキュラム」の作成を進めていくことが求められている。平成14年度の

新学習指導要領の全面実施までに、教育課程編成のための校内組織づくり、魅力ある単元・題材の開発、児童生徒の学習意欲を高める評価の在り方の工夫など、各学校において解決すべき実践上の課題が山積している。

調査研究第3年次の平成12年度は、移行期間に入り、新学習指導要領への取り組みが本格化する年でもある。第3次研究においては、第2次研究で必ずしも十分に考察することができなかつた「教育課程における総合的な学習の時間の位置づけの検討」及び「学校の財産としての総合的な学習の時間のカリキュラムの開発」を取り上げ、総合的な学習の時間の在り方をさらに追究したい。

### ●参考文献

- 中央教育審議会第1次答申 1996
- 教育課程審議会答申 1997
- 文部省 小学校（中学校）学習指導要領 1998
- 文部省 小学校（中学校）学習指導要領解説総則編 1999
- 文部省 小学校学習指導要領解説特別活動編 1999

### ●委嘱研究員

宮城教育大学助教授	相澤秀夫
仙台市立榴岡小学校教諭	白鳥徳義
仙台市立西山小学校教諭	内藤恵子
仙台市立栗生小学校教諭	早坂忠好
仙台市立西山中学校教諭	相澤弘行
仙台市立広瀬中学校教諭	里見幸広
仙台市立田子中学校教諭	須藤由子

### ●担当

仙台市教育センター

主任指導主事	吉野信武
指導主事	米澤孝雄
指導主事	今藤紀雄
指導主事	首藤真弓

# 大 目

## 仙台市立小中学校教員の自己啓発・自己形成に関する調査研究

### ■要 約

この研究は、仙台市教育センターの今後の研修事業展開の在り方を探るため、本市教員の自己形成の実態と、これからの教育に対する意識、また、本センターの活用状況をとらえようとしたものである。

その結果、本市教員の自己研修に対する意欲や自己啓発をどのように行おうとしているのかが明確になり、さらに、本センターに対する教員の具体的な期待や要望など、本センターの研修事業推進にかかる生きた資料を得ることができた。

### ■キーワード

- これからの教員像
- 自己啓発
- 自己形成
- 教員研修
- 仙台市教育センター
- 理想の教師像

# 目 次

I はじめに .....	31
II 調査の概要 .....	31
1 調査時期及び調査対象 .....	31
2 調査の内容と方法 .....	32
III 調査結果の分析と考察 .....	32
1 理想の教師像 .....	32
2 自己形成の実態 .....	35
3 教育の新しい動向への対応 .....	38
4 仙台市教育センターの事業について .....	45
IV 研究のまとめ .....	52
1 自己啓発・自己研修の概要 .....	52
2 仙台市教育センターの事業について .....	53
◇ 参考文献 .....	53
◇ 委嘱研究員 .....	53
◇ 資料1 仙台市教育センターの事業についての要望（抜粋） .....	54
資料2 校長先生から 「自己啓発・自己研修にかかる期待やアドバイス」より抜粋 .....	55

## I はじめに

21世紀を展望し、国民の信頼に応えうる学校教育を開拓していくためには、その担い手である教員の資質の向上が重要である。これまで教育職員養成審議会において、これから教員の在り方が検討され、養成・採用・研修にかかる提言がなされてきた。

その第1次答申(平成9年7月)では、「教員に求められる資質能力」として次の2点が提言されている。

一つは、いつの時代にあっても教員に一般的に求められる資質能力である。

二つめは、変化の激しい時代の中で、子どもたちの「生きる力」を育むため、今後特に教員に求められる能力であり、

- ① 地球や人類の在り方を自ら考え、幅広い視野を教育活動に積極的に生かす能力
- ② 変化の時代を生きる社会人に必要な資質能力
- ③ 教職に直接関わる多様な資質能力

が挙げられている。そしてさらに、すべての教員に一律にこれらの能力を期待するのではなく、画一的な教員像を避け、生涯にわたり資質能力の向上を図るという前提に立って、全教員に共通に求められる基本的な資質能力の確保とともに、各人の得意分野づくりや個性の伸長を図るという観点に立つことが大切であるとしている。

また、第2次答申(平成10年10月)では、修士課程を積極的に利用した教員養成の在り方等について、そして、第3次答申(平成11年12月)では、教員の生涯にわたる研修ビジョンの確立とそれに基づく毎年度当初の個人レベルの年間研修計画立案の必要性、短期・長期の社会体験研修の奨励など、具体的な教員研修にまで言及している。

しかし、これらの提言を待つことなく多くの教員は、教職を目指した時から、少なからず教育者としての使命感や教育に対する愛情を持ち、昨今

の社会や教育の諸問題・諸課題に対峙する度に、教育者としての自己の資質能力や力量の向上に何らかの手を打たなければならないと感じているはずである。さらに、これからの教育の中で、子どもたちの個性や創造力、表現力など様々な力を育てて行く上で、教員自身にも自ずとそれらが求められる。また、特色のある学校づくりや生涯学習社会における学びのふるさととしての学校づくりが提案されているが、その実現にあたっても、ますます個々の教員の個性や力量が必要となる。

仙台市教育センターは、教員の資質・力量向上の支援の役割を担い、これまで研修内容の改善や受講システム等の整備に努めてきたが、この教育の転換期を迎えて、時代の求める「これからの教員像」に応えるために、今後どのような研修事業を開拓していくべきか考える時期にきている。

そこで、本研究では、これらの点をふまえ、本市教員のこれからの研修の方向性を示すこと及び、今後の本センターの研修事業の在り方を探る資料とすることをねらいとし、仙台市立小中学校の教員を対象に以下の内容で調査を実施した。

- 1 これまでの自己研修と自己形成の実態
- 2 「これからの教員像」に対する意識とそれにおける自己啓発の意識の概要
- 3 仙台市教育センターの活用状況

## II 調査の概要

### ■ 1 調査時期及び調査対象

#### (1) 調査時期

平成11年9月10日～9月24日

#### (2) 調査対象

- |              |      |
|--------------|------|
| ① 仙台市立小中学校校長 | 185人 |
| ② 仙台市立小中学校教諭 | 785人 |

#### (3) 有効回収数(回収率)

- |              |             |
|--------------|-------------|
| ① 仙台市立小中学校校長 | 176人(95.1%) |
| ② 仙台市立小中学校教諭 | 782人(99.6%) |

#### (4) 教諭の内訳

表1 調査対象別人数一覧

## (1) 校種別

小学校	480人	中学校	302人
-----	------	-----	------

## (2) 年代別

20代	83人	40代前半	164人
30代前半	131人	40代後半	129人
30代後半	168人	50代	107人

## (3) 教職経験年数別

0~5年	65人	16~20年	158人
6~10年	133人	21~25年	129人
11~15年	182人	26年以上	133人

## (4) 校務分掌等別

教務主任	51人	学級担任	419人
研究主任	57人	副担任	26人
学年主任	170人	その他	58人

## ■ 2 調査の内容と方法

## (1) 調査の内容

## (1) 教諭を対象として

ア 「理想とする教師像」の有無とその形成要因

イ これまでの自己研修の内容と方法、研修の障害の有無と内容

ウ 教育の新しい動向への対応の仕方（時期、内容、研修方法）

エ これから学びたいこと、身に付けたい資質能力

オ 仙台市教育センターの研修会の受講状況、他の事業への参加状況、資料室利用状況、刊行物活用状況

カ 仙台市教育センターの研修会等への要望

## (2) 校長を対象として

ア 自己形成の契機

イ 自校の教員に望む教育の新しい動向に対する対応の仕方（時期、内容）

ウ これからの教員に学んでほしいこと、身に付けてほしい資質能力、期待、助言

エ 仙台市教育センターの研修会の内容、事業への要望

## (2) 調査の方法

質問紙法

## III 調査結果の分析と考察

## ■ 1 理想の教師像

## (1) 理想の教師像の有無

仙台市の小中学校教員の教職に対する意識の在り方を、「理想の教師像」あるいは、「教師としてこうありたいというイメージ」を持っているかどうかによって探ってみた。

Nは表1①②参照

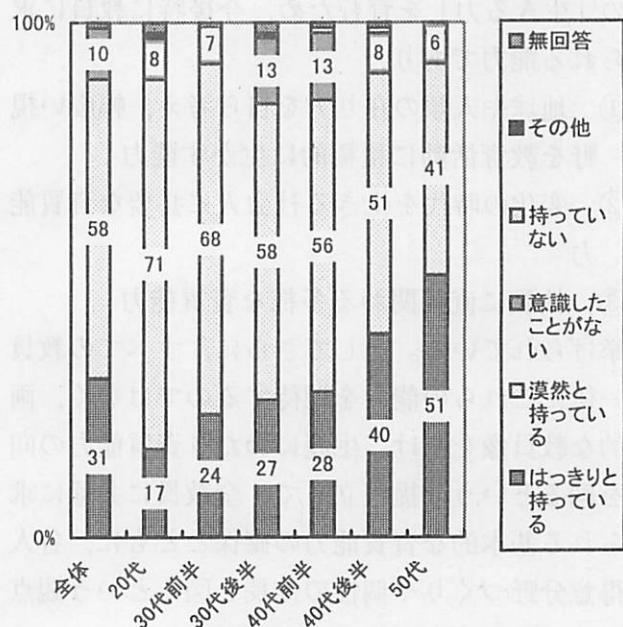


図1 「理想の教師像」の有無（年代別）

図1で、理想の教師像、あるいは教師としてこうありたいというイメージ（以下「理想の教師像」とする）を「はっきり」、あるいは「漠然と」持っている合計が89%と高い数値を示しており、理想の教師像を強く意識していることが分かる。「意識したことがない」は10%であった。

また年代が上がるにつれて、理想の教師像をはっきり持っている傾向が強く示された。

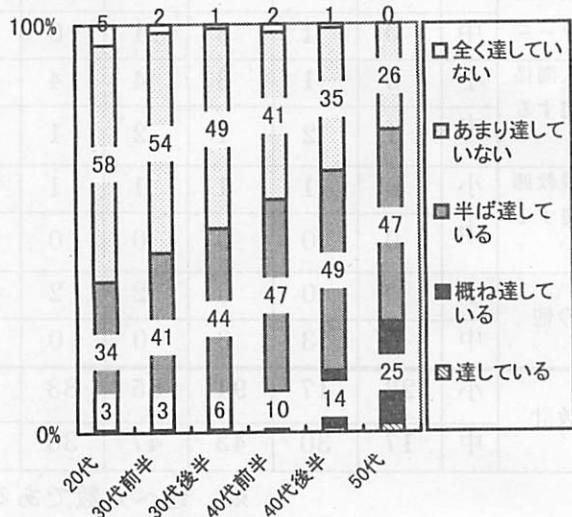
## (2) 理想の教師像への到達の程度

「はっきり」あるいは「漠然と」理想の教師像を持っていると答えた教員にその到達の程度を聞いたのが表2である。

表2 理想の教師像への到達の程度 単位(%)

理想の教師像	達している	概ね達している	半ば達している	あまり達していない	全く達していない	計
						%
はっきりと持っている N=245	1	19	49	30	1	100
漠然と持っている N=448	0	6	42	50	2	100

「はっきり」あるいは「漠然と」の回答者を比べてみると、理想の教師像をはっきりと持っている回答者では「概ね達している」が19%を示し、理想の教師像を漠然と持っている回答者の3倍を越えている。「理想の教師像に半ば達している」を見ても、理想の教師像を持っている教員ほど、その到達の程度が高くなる傾向を示している。

図2 理想の教師像への到達の程度  
(年代別)

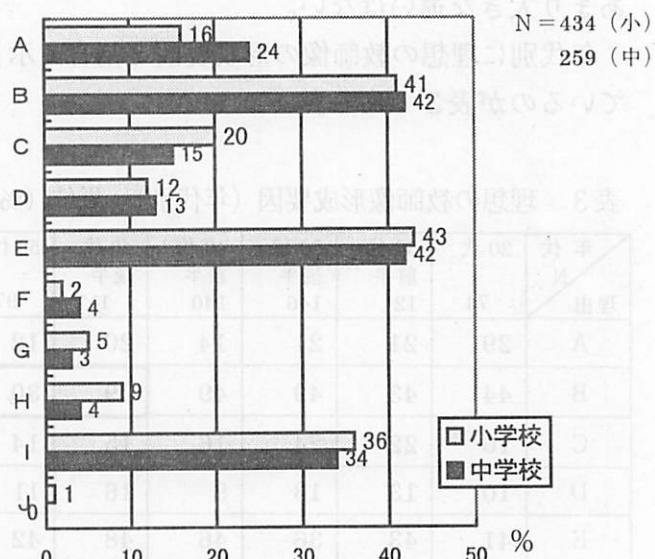
N=74 (20代), 121 (30代前半), 146 (30代後半)  
140 (40代前半), 117 (40代後半), 97 (50代)

また、図2で理想の教師像への到達の程度が「概ね達している」と答えた教員を年代別に見ると、年代が上がるにつれて到達の程度が上がっている。このことは、教職経験年数を積むことにより、着実な自己形成がなされていることの表れであろう。

その自己形成は、どのようにしてなされたのであろうか。

## (3) 理想の教師像形成の過程

「はっきり」あるいは「漠然と」理想の教師像を持っていると答えた教諭に、その形成の主な要因を聞いたのが図3である。



- 【選択肢】 A : 自分の恩師とのかかわりから  
 B : 先輩教師とのかかわりから  
 C : 職場の同僚とのかかわりから  
 D : 職場以外の人と（家族も含む）のかかわりから  
 E : 学校の子どもとのかかわりから  
 F : 校務分掌や担当した職務から  
 G : 講演・研修会等から  
 H : 本・テレビ等のメディアから  
 I : 自分自身の生き方・考え方から  
 J : その他

図3 理想の教師像形成要因 (複数回答)

理想の教師像の形成要因は、E「学校の子どもとのかかわりから」、B「先輩教師とのかかわりから」、I「自分自身の生き方・考え方から」の順で

上位を占めている。F「校務分掌や担当した職務から」やG「講演・研修会などから」、H「本・テレビ等のメディアから」が低い値を示しているのに比べ、「恩師、先輩教師、同僚、職場以外の人とのかかわりから」の合計が90%を越え、人とのかかわりの中から理想の教師像が形成されたと考えている教員が多いことが分かる。

校種による比較においては、A「恩師とのかかわりから」では中学校の方がやや高く、C「職場の同僚とのかかわりから」、H「本・テレビ等のメディアから」では、逆に小学校の方がやや高いが、あまり大きな違いはない。

年代別に理想の教師像の形成要因を割合で示しているのが表3である。

表3 理想の教師像形成要因（年代別） 単位（%）

年代 N 理由	20代 74	30代 前半 121	30代 後半 146	40代 前半 140	40代 後半 117	50代 97
A	29	21	21	14	20	12
B	44	43	49	49	29	30
C	16	22	24	16	15	14
D	10	13	13	9	16	11
E	41	43	36	46	48	42
F	0	3	5	2	1	4
G	0	3	5	6	4	3
H	5	3	10	9	6	6
I	41	30	28	32	44	43
J	0	1	0	0	3	3

(※ A～Jの項目は図3と同じ、複数回答)

年代別では、40代後半から50代では、他の年代と比較すると、B「先輩教師とのかかわりから」が低めになっている。また、20代と40代後半、50代では他の年代と比較すると、I「自分自身の生き方・考え方から」が10ポイント以上高くなっている。しかし、年代によって形成要因は大きく異なってはいない。なお、20代の若い教員は教師になった時の思いを大切にしながら理想の教師像を

形成していると考えられる。

#### (4) 理想の教師像

今回の調査では、「理想の教師像の有無」を尋ねた項目で、理想の教師像を「はっきり」あるいは「漠然と」持っている回答者に、その内容の自由記述を求めた。その結果、小学校では434名中207名(48%)、同様に中学校では259名中112名(43%)から回答があった。進んで回答したこの数字の大きさからも、仙台市の中学校教員の教職に対する意識が高いことがうかがわれる。

自由記述の内容を分類したのが表4である。

この表からは、理想の教師像として、子どもとのかかわりや自分自身の在り方についての記述が多いことが分かる。

表4 理想の教師像 自由記述内容分類 単位(人)

校種 内容	校種	20代	30代 前半	30代 後半	40代 前半	40代 後半	50代
子どもに 関すること	小	12	10	42	29	45	24
	中	13	18	20	25	5	12
自分の在 り方に關 すること	小	8	2	40	41	21	30
	中	3	6	19	19	24	14
授業に關 すること	小	2	3	5	8	10	3
	中	0	1	3	1	0	0
対人関係 に關すること	小	0	1	3	4	4	1
	中	1	2	1	2	1	1
先輩教師 に關すること	小	0	1	1	1	1	0
	中	0	0	0	0	0	0
その他	小	0	0	0	2	2	0
	中	0	3	0	0	0	0
人数計	小	22	17	91	85	83	58
	中	17	30	43	47	30	27

※ 延べ人数である。

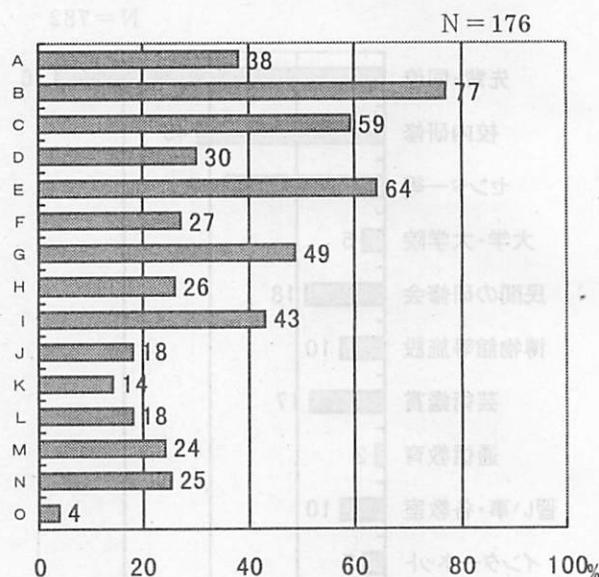
中学校の40代後半の教員において、理想の教師像の「自分の在り方に關すること」の値が30人中24人と高くなっていることが目を引く。中学校に

おいてこの年代は、それまでの学級担任としての立場から各種主任等の立場へと変わっていく時期であり、自分の在り方から理想の教師像を描こうとするのではないだろうか。

全体的には、若い教員ほど「子どもに関するここと」の記述が多く、年齢が上がるにつれて「自分の在り方に関する」記述が増加する傾向にある。

#### (5) 自己形成の契機（校長）

これまで教諭の理想の教師像を見てきたが、ここでは、校長を対象に、「今までの教員生活を振り返ってみて、教師としての自分の在り方に影響を与えたと思うこと、また変化をもたらした契機は何か」を質問し、校長の自己形成の契機を探ってみた。図4がその結果である。



- 【選択肢】 A：自分の恩師とのかかわり  
B：先輩教師との出会い  
C：職場の同僚とのかかわり  
D：職場以外の人とのかかわり  
E：教師としての児童・生徒とのかかわり  
F：結婚や子どもなど家庭生活から  
G：校務分掌や担当した職務から  
H：講演や研修会などから  
I：研究活動を通して  
J：部活動等の指導を通して  
K：社会的活動への参加  
L：趣味や特技を通して  
M：本、テレビ等のメディアを通して  
N：自分の生き方、考え方から  
O：その他

(複数回答)

図4 校長の教員生活への影響・変化の契機

B「先輩教師との出会い」、E「教師としての児童・生徒とのかかわり」、C「職場の同僚とのかかわり」という項目が上位を占めた。上位二つの項目は、教諭の理想像形成の要因と同じである。その外、教諭の理想像形成要因としてあまり挙げられていないなかったが、校長の自己形成の契機として、G「校務分掌や担当した職務から」、H「講演や研修会などから」が高い値を示している。さらに、教諭の形成理由の選択肢はないが、I「研究活動を通して」も43%であり、自己形成の重要な契機の一つとなっている。

## ■ 2 自己形成の実態

仙台市の教員のこれまでの自己形成の実態を自己研修の調査により探ってみた。

### (1) 研修内容

仙台市の教員が、これまで力を入れて取り組んできた自己研修の主な内容は、図5に示すとおりである。

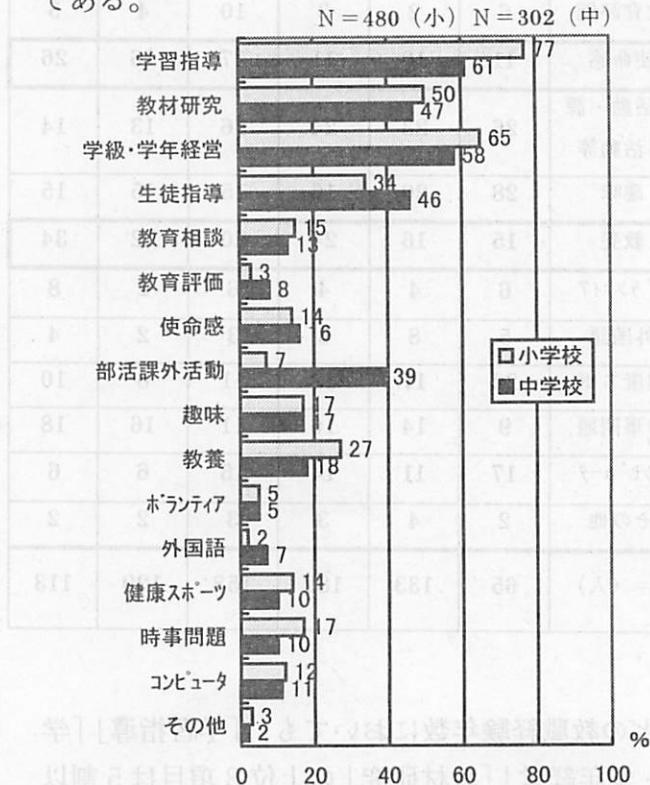


図5 これまでの取り組み内容 (複数回答)

図5を見ると、その内容が「学習指導」「学級・

学年経営」「教材研究」「生徒指導」など、日ごろの教育活動に直接かかわるものであることが分かる。上位4項目については、小・中ともに同じ傾向である。校種による違いを見ると、小学校では「学習指導」、中学校では「生徒指導」と「部活動・課外活動」の値が高く、現場の状況を反映している。

これまでの取り組みの内容を教職経験年数別に示したのが表5である。

表5 これまでの取り組み内容 教職経験年数別  
(複数回答) 単位 (%)

年数 内容	~5 年	6~ 10年	11~ 15年	16~ 20年	21~ 25年	26年 ~
学習指導	52	65	65	75	84	79
教材研究	52	38	48	52	51	53
学級学年 経営	60	68	59	63	63	61
生徒指導	28	37	32	43	44	44
教育相談	9	9	15	13	15	22
教育評価	6	2	3	10	4	5
使命感	11	10	11	17	16	26
部活動・課 外活動等	26	23	24	16	13	14
趣味	28	20	16	15	15	15
教養	15	16	24	20	32	34
ボランティア	6	4	4	6	2	8
外国語	5	8	3	3	2	4
健康スポ	22	17	12	11	8	10
時事問題	9	14	16	11	16	18
コンピュータ	17	11	14	15	6	6
その他	2	4	3	3	2	2
N = (人)	65	133	182	158	129	113

どの教職経験年数においても、「学習指導」「学級・学年経営」「教材研究」の上位3項目は5割以上である。また、数値としては高くないが、教職経験年数を重ねるに従い、「教養を高める」や「教師の使命感・心構え」「教育相談」の数値が増加し

ていく傾向がある。これは、教職経験年数が増えるとともに、豊かな人間性や人間としての幅の広さが教員に求められているという意識の表れであると考えられる。さらに、学校における立場を考えた時、20年以上の教員において、より幅の広い研修ビジョンの確立が期待される。

なお、全体的に「ボランティア」や「趣味を深める」「教養を高める」「時事問題」など、社会に開かれた形での取り組みが少ない。

## (2) 研修の手段・方法

自己研修が、主にどのような方法で、あるいは何を通して行われてきたかを尋ねてみた。その結果が図6であり、それを教職経験年数別にまとめたのが表6である。

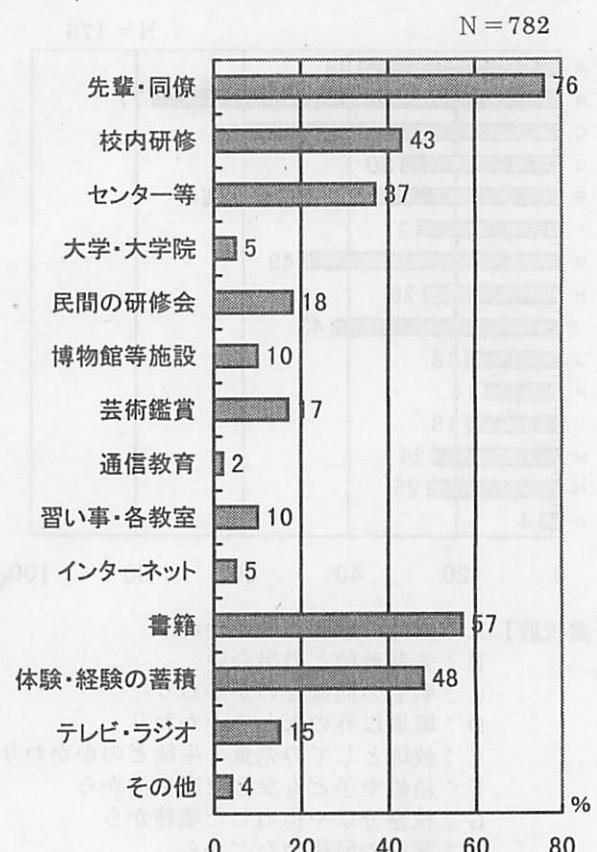


図6 研修の手段・方法 (複数回答)

「先輩・同僚」「書籍」「体験・経験の蓄積」のように、身近で比較的手軽な手段・方法を通したものが多かった。このことは、教職経験年数別に見ても同様の傾向が見られる。

表6 手段・方法 教職経験年数別（複数回答）  
単位（%）

方法 年数	~5 年	6~ 10年	11~ 15年	16~ 20年	21~ 25年	26年 ~
先輩・同僚	83	82	74	73	76	69
校内研修	18	41	41	45	45	49
センター等	35	27	42	30	30	34
大学・大学院	6	5	4	4	4	4
民間の研修会	8	11	16	22	22	28
博物館等	2	8	10	12	12	12
芸術鑑賞	9	16	12	25	25	27
通信教育	0	2	3	2	2	2
習い事等	15	8	10	8	8	13
インターネット	9	3	7	2	2	2
書籍	40	47	61	67	67	63
体験・経験	43	46	46	51	53	49
テレビ・ラジオ	8	12	12	12	22	23
その他	6	5	4	6	1	4
N = (人)	65	133	182	158	129	113

### (3) 障害の有無

表7は、自己研修を進めていく上で障害があつたかどうかを示したものである。

表7 障害の有無 単位（%）

校種	性別（N）	有	無	無回答	計
小学校	男（233）	53	47	0	100
	女（247）	73	27	0	100
	全体（480）	63	37	0	100
中学校	男（169）	55	40	5	100
	女（133）	68	29	3	100
	全体（302）	61	35	4	100

この表によると、小・中ともに6割が自己研修を進めていく上で障害があつたと答えている。男女別では、小・中とも女性が約7割、男性が約5

割である。教職経験年数別では特に差異は見られなかった。

### (4) 障害の内容

その障害はどのようなものなのだろうか。それを示したのが図7である。C「時間の確保がむずかしい」が9割、A「勤務校の諸事情」が4割と高い数値を示している。これは、予想したとおりの結果であった。D「経費面でむずかしい」が3位となっている。教職経験年数別にみても、どの年代でも3位であった（表8）。また、F「必要とする研修会や講座がない」が4位であった。

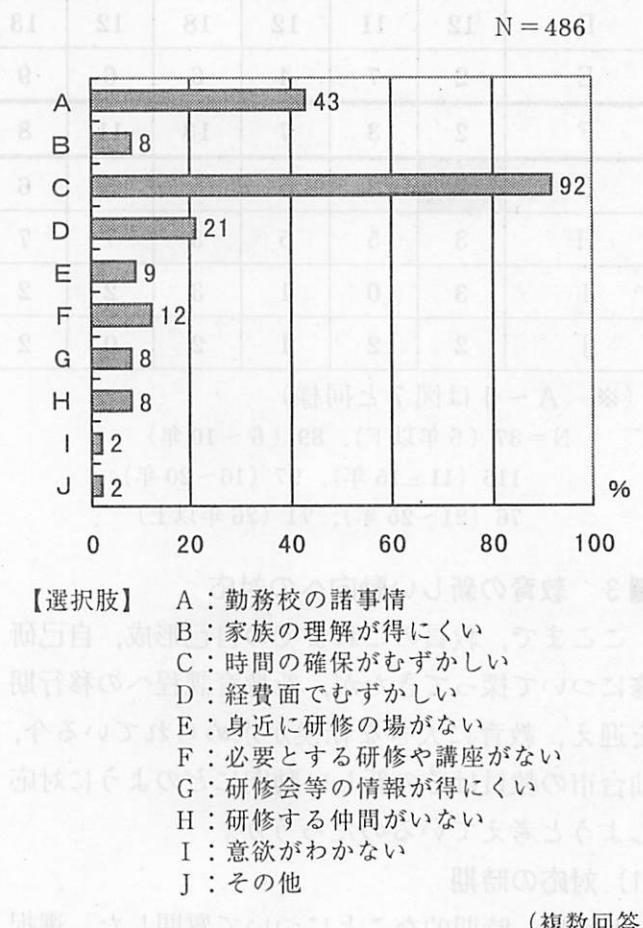


図7 障害の内容

次の表8によると、教職経験年数が多くなるにつれて、F「必要とする研修や講座がない」と感じる回答者が徐々に増加し、特に、教職経験16~25年の教員に多い。このことから、当センターでも中堅層以降に対応した研修を充実させていく必

要があろう。また、5年以下でG「研修会等の情報が得にくい」が多くなっており、情報提供の方法も考えていかなければならない。

表8 障害の内容（教職経験年数別）

複数回答 単位(%)

年数 障害	～5 年	6～ 10年	11～ 15年	16～ 20年	21～ 25年	26年 ～
A	15	32	25	25	33	26
B	3	7	6	3	5	6
C	51	62	59	57	54	55
D	12	11	12	18	12	13
E	2	7	4	6	6	9
F	2	3	7	13	11	8
G	9	3	5	5	5	6
H	3	5	5	3	7	7
I	3	0	1	3	2	2
J	2	2	1	2	0	2

(※ A～Jは図7と同様)

N=37(5年以下), 89(6～10年)

115(11～15年), 97(16～20年)

76(21～25年), 71(26年以上)

### ■3 教育の新しい動向への対応

ここまで、教員のこれまでの自己形成、自己研修について探ってきたが、新教育課程への移行期を迎えるに大きな転換が求められている今、仙台市の教員はその新しい動向にどのように対応しようと考えているのだろうか。

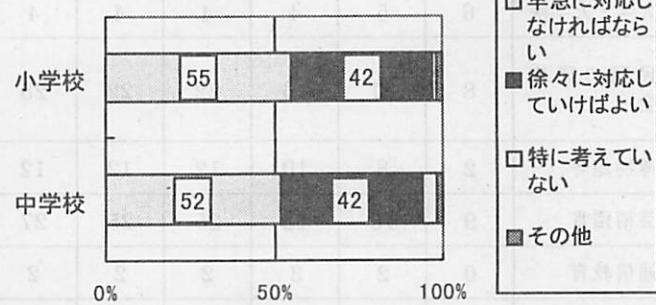
#### (1) 対応の時期

始めに、時期的なことについて質問した。選択肢は、「早急に対応しなければならないと思っている。」「徐々に対応していけばよいと思っている。」「特に考えていない」「その他」である。その結果を図8にまとめた。

「早急に対応しなければならないと思っている」と答えた教員は、小学校、中学校ともに50%を越えており本市の教員の半数は、教育の新しい動向

に早急に対応しなければならない必要性を感じている。その反面、「徐々に対応していけばよいと思っている」と答えた教員が40%を越えているということも見逃せない。最近の社会の急激な変化やそれに対応した教育改革の速さを考えた時、一層の自己啓発が望まれる。

N=480(小学校), 302(中学校)

図8 教育の新しい動向への対応  
(時期的なこと)

N=51(教務主任), 57(研究主任), 170(学年主任)

419(学級担任), 26(副担任), 58(その他)

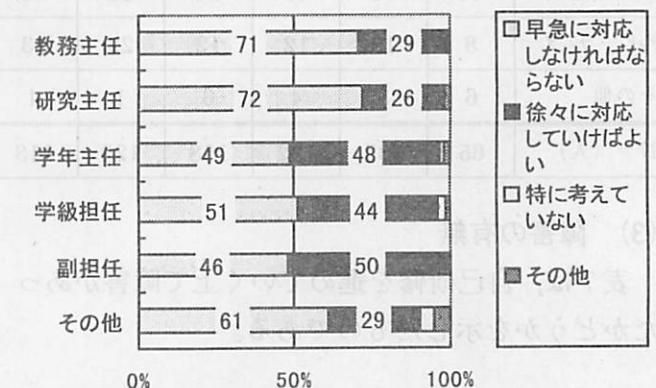


図9 教育の新しい動向への対応

(時期的なこと) 校務分掌別

校務分掌別によると、「早急に対応しなければならないと思う」と答えているのは、教務主任や研究主任の割合が高く、全体を見据えながら学校を動かしていく立場にある教員は、やはり教育の新しい動向に対する意識が高い。

同じように、校長を対象に、自分の学校の教員に教育の新しい動向にどのように対応してほしいかを尋ねた。選択肢は、「早急に対応していってほしい」、「徐々に対応していってほしい」、「特に考

えていない」、「その他」である。図10が示すように、66%が「早急に対応してほしい」と答えている。教諭対象の調査では、「早急に対応しなければならないと思っている」が約半数で、学校経営者である校長との意識の差が感じられる。

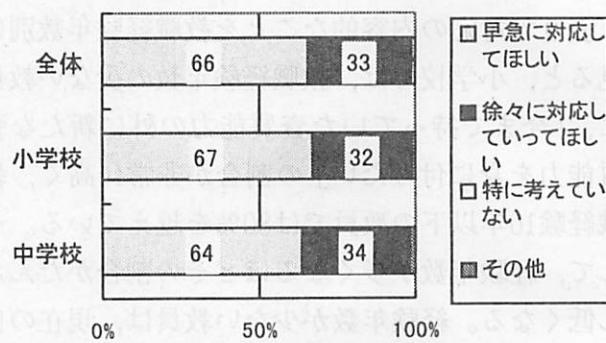


図10 校長が思う教育の新しい動向への対応  
(時期的なこと)

教諭対象の調査の「早急に対応しなければならないと思っている」と答えた回答者を教職経験年数別に見たのが図11である。

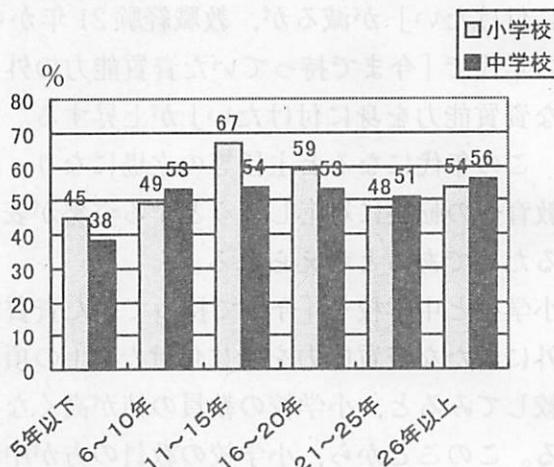


図11 早急に対応しなければならない  
と思っている(教職経験年数別)

※図11の N = (人)

年 校種	5年 以下	6~10年	11~15年	16~20年	21~25年	26年 以上
小学校	31	72	113	98	92	72
中学校	34	61	69	60	37	41

これによると、小学校の教員において、「早急に対応しなければならないと思っている」は、教職

経験11~15年の教員で67%と最も高く、次に16年~20年の59%と続き、いわゆる中堅とよばれる教員の割合が高い。26年以上の教員も強く感じている。

中学校では、「早急に対応しなければならないと思っている」が教職経験6年以上のすべての年代で50%を越えている。5年以下の教員は38%と低い割合を示している。これは、教職について間もない教員は、日常の教育活動に追われ、教育の新しい動向への対応について考える余裕がないためと考えられる。

## (2) 対応の内容

次に、内容的にどのように対応していきたいか質問した。選択肢は、「今まで持っていた資質能力の外に、新たな資質能力を身に付けたい」、「今まで持っていた資質能力をさらに伸ばしたい」、「今まで持っていた資質能力で対応できる」、「特に考えていない」、「その他」の五つであり、その結果が図12である。

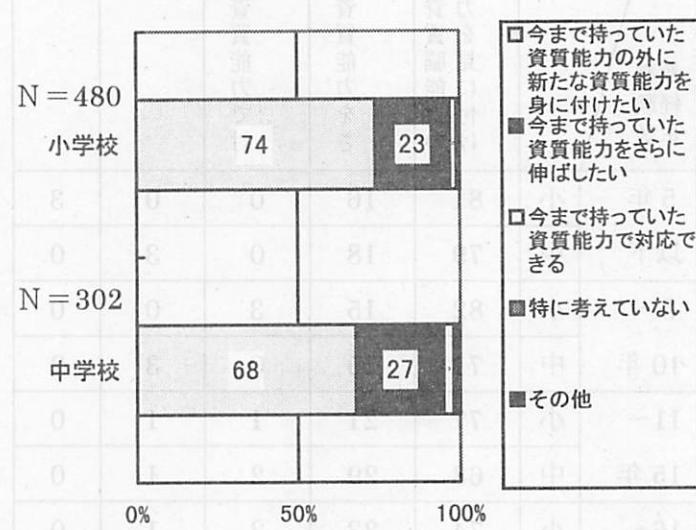


図12 教育の新しい動向への対応  
(内容的なこと)

対応の内容については、「今まで持っていた資質能力の外に新たな資質能力を身に付けたい」の割合が、小・中学校の教員ともに高い割合を示し

ており、「今まで持っていた資質能力をさらに伸ばしたい」の2倍以上になっている。今までに身に付けてきた資質能力に加えて、さらに新たな資質能力を身に付けていかなければならない必要性を感じている教員が多いことが分かる。これは、来年度から、新学習指導要領の移行措置期間に入り、「総合的な学習の時間」の実施や各教科の内容の改訂による新しい教材開発などの必要を感じているためであると考えられる。しかし、「時期的なこと」の調査結果と合わせて考えてみた時、新たな資質能力獲得のための自己啓発の取り組みを早めしていく必要があると感じる。

表9 教育の新しい動向への対応  
(内容的なこと) (教職経験年数別) 単位%

内容的な対応		た い 外 に 今 ま で 持 つ て い た 資 質 能 力 を 見 に 付 け	ら に 今 ま で 持 つ て い た 資 質 能 力 を さ ら に 伸 ば し た い	今 ま で 持 つ て い た 資 質 能 力 で 対 応 で き る	今 ま で 持 つ て い た 資 質 能 力 で 対	特 に 考 え て い な い	そ の 他 ・ 無 回 答
教職 経験 年数		小	中	小	中	小	中
5年 以下	小	81	16	0	0	3	
	中	79	18	0	3	0	
6～ 10年	小	82	15	3	0	0	
	中	71	25	0	3	2	
11～ 15年	小	77	21	1	1	0	
	中	68	29	2	1	0	
16～ 20年	小	74	23	2	1	0	
	中	62	36	2	0	0	
21～ 25年	小	72	22	2	2	2	
	中	68	16	11	0	5	
26年 以上	小	63	33	1	1	2	
	中	61	29	5	0	5	

※表9の N = (人)

校種	年 5年 以下	6～ 10年	11～ 15年	16～ 20年	21～ 25年	26年 以上
小学校	31	72	113	98	92	72
中学校	34	61	69	60	37	41

表9で対応の内容的なことを教職経験年数別に見ると、小学校では、教職経験年数の少ない教員に、「今まで持っていた資質能力の外に新たな資質能力を身に付けたい」の割合が非常に高く、教職経験10年以下の教員では80%を越えている。そして、経験年数が多くなるほどその割合がだんだん低くなる。経験年数が少ない教員は、現在の自分の資質能力では、まだ十分ではなく、さらに新しい資質を身に付ける必要性を感じている。

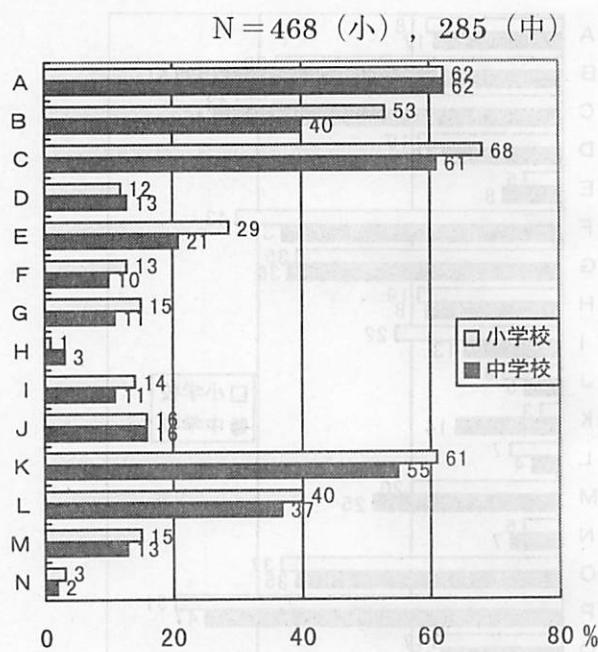
中学校においても、小学校と同様の傾向が見られるが、教職経験16年から20年で「今まで持っていた資質能力をさらに伸ばしたい」が増え、「今まで持っていた資質能力の外に新たな資質能力を身に付けたい」が減るが、教職経験21年から25年の年代で「今まで持っていた資質能力の外に新たな資質能力を身に付けたい」が上昇する。これは、この年代になると主任等の立場になり、新しい教育への転換に対応しようとする姿勢が表れてくるためであると考えられる。

小学校と中学校を「今まで持っていた資質能力の外に新たな資質能力を身に付けたい」の項目で比較してみると、小学校の教員の値が高くなっている。このことから、小学校の教員の方が中学校的教員より教育の新しい動向に対して関心が高いことが分かる。

### (3) 研修の方法

教育の新しい動向への内容的な対応で、「今まで持っていた資質能力の外に新たな資質能力を身に付けたい」と「今まで持っていた資質能力をさらに伸ばしたい」と答えた回答者に何を通して身に付けたいか、研修の方法を尋ねた。図13がその結果である。

図13によると、小学校、中学校の教員とともに、



- 【選択肢】 A：職場の先輩、同僚とのかかわり  
 B：校内研修  
 C：教育センター等の公的機関の研修会  
 D：大学や大学院  
 E：民間の研修会  
 F：博物館、資料館、天文台等の施設  
 G：美術や演劇、音楽等の芸術鑑賞  
 H：通信教育  
 I：習い事や各種教室  
 J：インターネット  
 K：書籍  
 L：体験・経験の蓄積  
 M：テレビ・ラジオの番組  
 N：その他

図13 研修の方法

C「教育センター等の公的機関の研修会」、A「職場の先輩・同僚とのかかわり」、K「書籍」が高い割合を占め、B「校内研修」、L「体験・経験の蓄積」の順で続いている。この結果からは、新しい資質能力をセンター等の公的研修会に求めようとする教員の姿が見え、教育センターへの期待度が大きいことが分かる。次いで、校内での日常のかかわり合いの中から自分に必要なことを学び、お互いに切磋琢磨していくこうとしていることがうかがえる。また、書籍を参考にしながら研修していくこうとしている教員も多い。一方、D「大学や大学院」、F「博物館、資料館、天文台等の施設」、I

「習い事や各種教室」のように対外的な研修を求める教員は1割程度である。また、M「テレビ、ラジオの番組」やJ「インターネット」などのメディアを通して情報を得ようとしている教員も、15%前後いる。さらに、小学校ではB「校内研修」に期待するものも大きい。

また、研修の方法を教職経験年数別に見たのが、表10である。

表10 研修の方法（教職経験年数別）

複数回答 単位(%)

障害 \ 年数	~ 5 年	6 ~ 10 年	11 ~ 15 年	16 ~ 20 年	21 ~ 25 年	26 年 ~
A	67	76	61	53	58	59
B	35	49	46	47	48	59
C	70	55	70	68	66	59
D	13	9	15	18	8	8
E	13	20	26	28	33	28
F	6	9	14	12	9	15
G	10	10	12	12	17	18
H	3	0	0	3	2	4
I	16	16	13	8	13	12
J	14	11	19	20	16	10
K	44	54	61	53	71	62
L	49	44	38	35	40	31
M	11	13	12	11	15	22
N	0	5	3	3	3	1

(※ A～Nは図13と同様)

N=63 (5年以下), 128 (6~10年)

178 (11~15年), 154 (16~20年)

117 (21~25年), 106 (26年以上)

21年以上の教員においてはK「書籍」が第1位であり、特に教職経験21年から25年では7割を越える。また、G「美術や演劇、音楽等の芸術鑑賞」は、全体的には低い値だが、その中でも21年以上の教員が占める割合が大きい。このことは、前述の「これまでの取り組みの内容」で見られた、

経験年数が増えるとともに「教養を高める」の数値が上がることと同様の傾向である。これは、経験年数を重ねるに従い、教員として、ある程度心の余裕ができ、豊かな人間性の涵養に意識が向くためであると考えられる。そして、その豊かな人間性は、教員の資質能力として不易なものの中の重要な一つである。

#### (4) 今後身に付けたい(必要と考える) 資質能力

全員に、新教育課程の実施にあたり、教員として今後身に付けたい、あるいは必要と考える資質能力を尋ねた。それが、図14である。23の選択肢から五つ選んだ結果である。

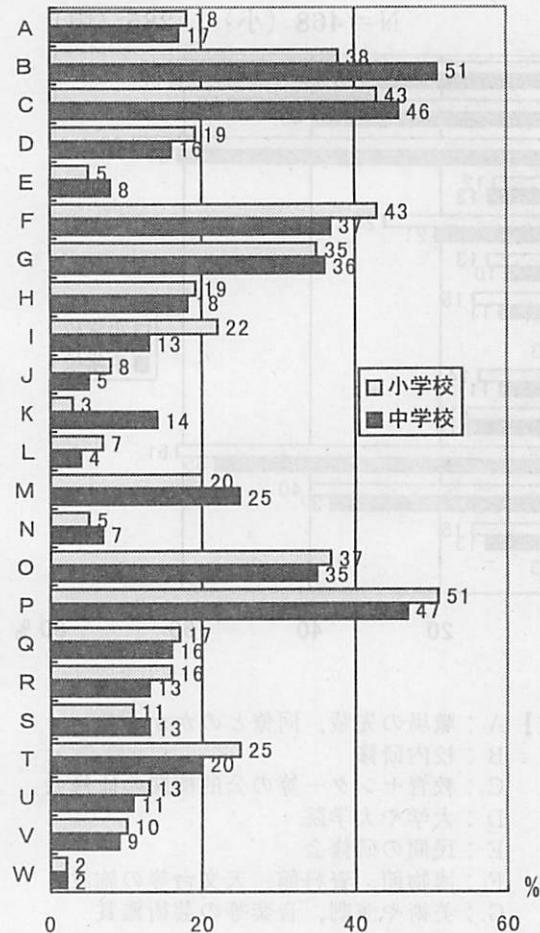
小学校、中学校ともに上位に挙げられているのは、B「企画力」、P「コンピュータ操作・活用能力」、C「実践力や行動力」、F「幅広い人間関係とコミュニケーション能力」、O「教材開発能力・授業の技術」、G「カウンセリング技術」である。

B「企画力」が上位に挙げられているが、今回の学習指導要領の改訂において、特色のある学校づくりが求められ、学校裁量に任される部分が多くなったことが、「企画力」を身に付けたいということに表れているのであろう。

また、P「コンピュータ操作・活用能力」に小学校教員は51%、中学校教員は47%と高い関心を示しているが、コンピュータが小学校や中学校に導入されたことを受けて、コンピュータを使いこなすこと、情報を活用しながらいつそう情報教育を進めていかなければならない現実を反映している。

C「実践力・行動力」は、これまでにも教員に求められてきた資質能力であるが、体験重視のこれからの中の教育の中で、さらに必要な資質ととらえられていると考えられる。

F「幅広い人間関係・コミュニケーション能力」については、開かれた学校づくりを考えた時、保護者、地域やその他の人々との交わりを広げ、人間関係の構築のために必要な資質能力であるととらえていると思われる。



#### 【選択肢 (五つ選択)】

- A : ボランティア・福祉の精神
- B : 企画力
- C : 実践力や行動力
- D : チャレンジ精神と努力
- E : 交渉・折衝の能力
- F : 幅広い人間関係とコミュニケーション能力
- G : カウンセリング技術
- H : 自己表現力
- I : 地域理解の姿勢
- J : 人権尊重・男女平等の精神
- K : 趣味を持ち、それを深める
- L : 社会的常識やモラル
- M : 教養を高める(読書・芸術鑑賞等)
- N : 体力や運動能力の増進を図る
- O : 教材開発能力・授業の技術
- P : コンピュータ操作・活用能力
- Q : 教育全般に対する自己の意識の転換
- R : 外国語によるコミュニケーション能力や諸外国理解
- S : 日本の伝統文化についての理解
- T : 自分の得意分野づくり
- U : 時事問題に対する鋭い感覚
- V : 研究動向の把握の能力
- W : その他

図14 今後身に付けたい(必要と考える)  
資質能力

G「カウンセリング技術」は、これからいっそうむずかしくなるであろう生徒指導において、この技術を身に付け子どもに対応していこうとする意欲の表れであろう。

これらの結果を見ると、仙台市の教員は、これから教員に求められる資質能力をある程度見据えていると考えられる。

図15にこれから身に付けたい資質能力を年代別にそれぞれ5位まで示した。

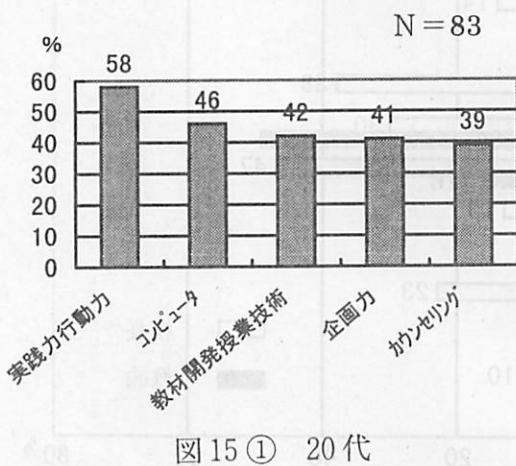


図15① 20代

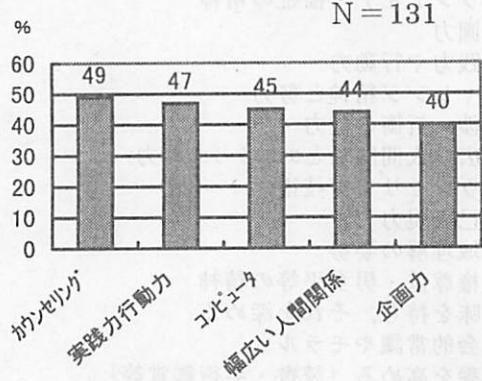


図15② 30代前半

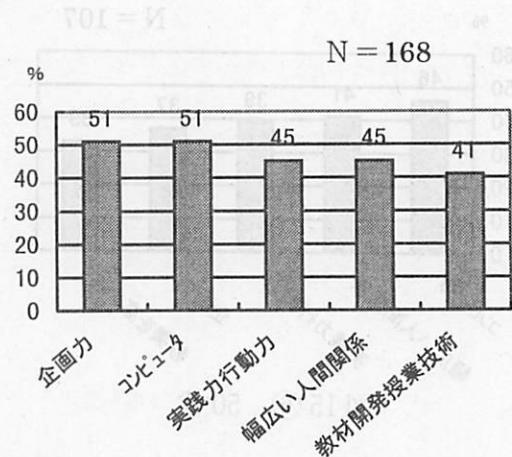


図15③ 30代後半

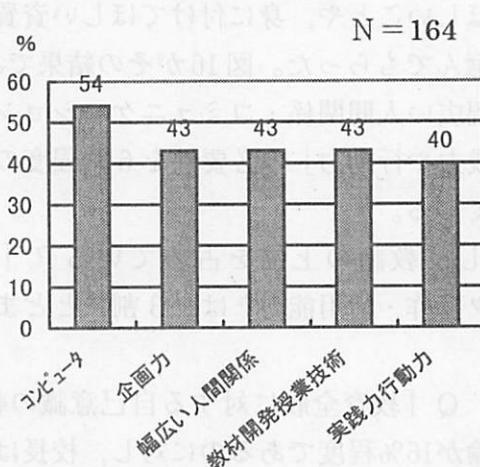


図15④ 40代前半

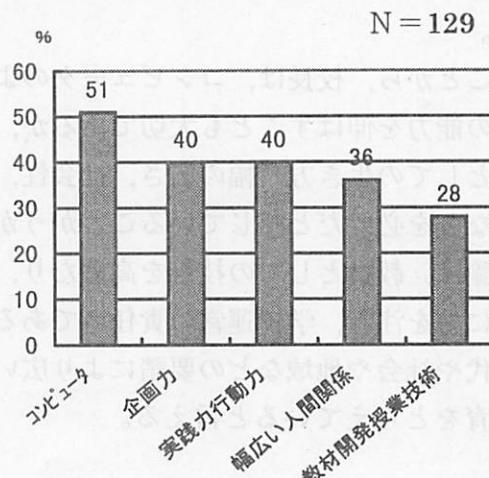


図15⑤ 40代後半

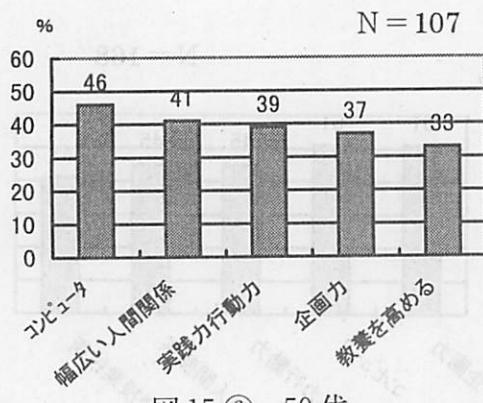


図15⑥ 50代

図15 今後身に付けてほしい（必要と考える）資質能力（年代別）

同じように、校長対象にこれから教員に特に学んでほしいことや、身に付けてほしい資質能力を五つ選んでもらった。図16がその結果である。

F「幅広い人間関係・コミュニケーション」とC「実践力や行動力」の必要性を6割程度の校長が感じている。

しかし、教諭の上位を占めているP「コンピュータ操作・活用能力」は、3割にとどまっている。

また、Q「教育全般に対する自己意識の転換」は、教諭が16%程度であるのに対し、校長は40%を越えている。L「社会常識やモラル」についても、教諭が10%に満たないのに小学校の校長は、33%，中学校の校長は21%とやや高い割合になっている。

のことから、校長は、コンピュータのような個々人の能力を伸ばすことも大切であるが、一人の人間としての生き方、幅の広さ、社会性、見識の高さなどを必要だと感じていることがうかがえる。教諭は、教員としての技量を高めたり、深めることに力を注ぎ、学校運営の責任者である校長は、時代や社会や地域などの要請により広い視野から教育をとらえていると言える。

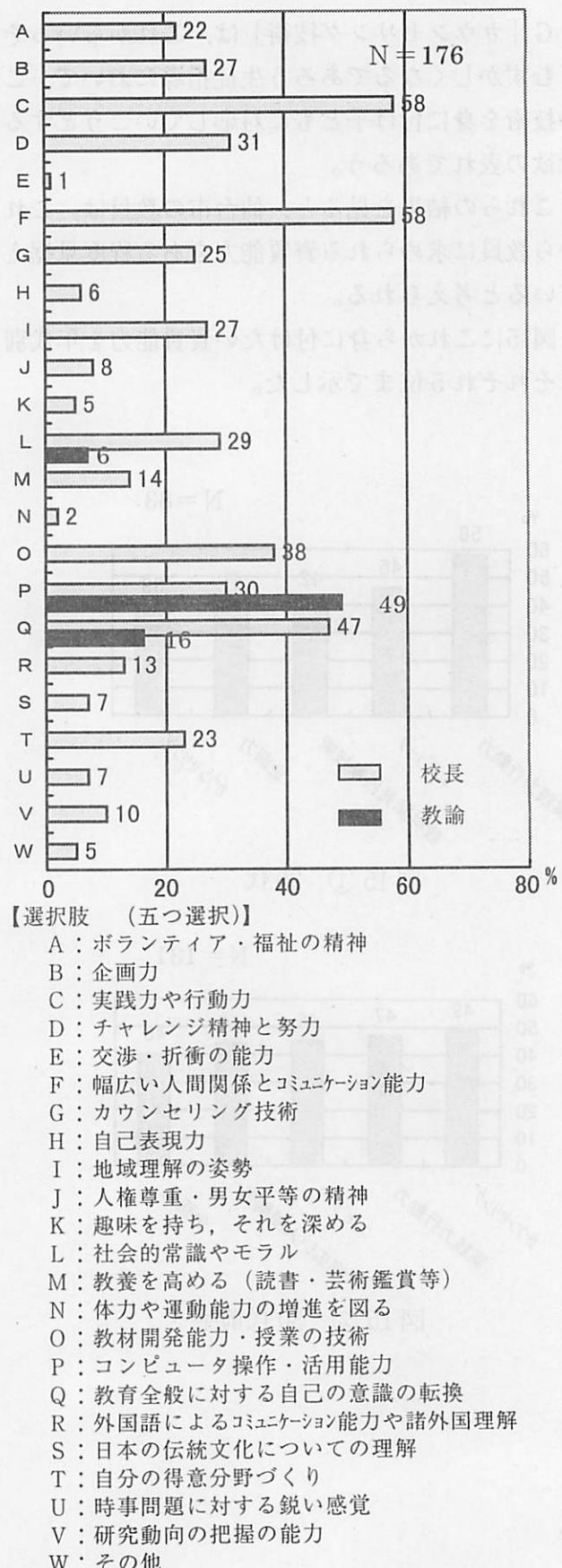


図16 校長がこれからの教員に身に付けてほしい資質能力

## ■ 4 仙台市教育センターの事業について

### (1) 研修会の受講状況

教諭対象に仙台市教育センターでの研修会受講経験について尋ねた。図17がその結果である。

N=480(小), 302(中), 782(全体)

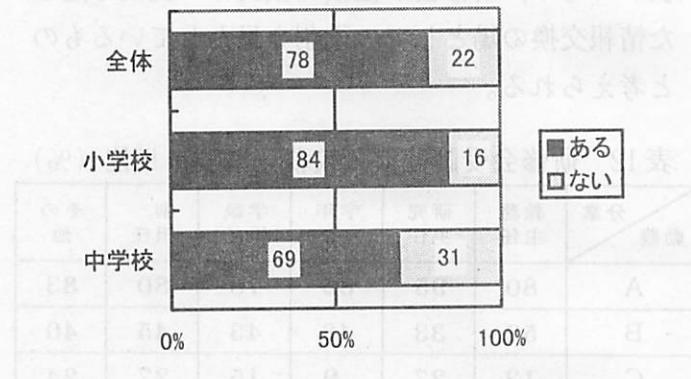


図17 研修会受講経験

悉皆研修以外の受講経験は、小学校84%，中学校69%で、全体では78%であり、その受講率は高い。逆に、受講経験のない教員は、中学校で31%，小学校で16%と、中学校では小学校の2倍となっている。理由として考えられることは、小学校では全教科を指導するのに対し、教科担任制をとる中学校では、教科の研修会に関して見れば、受講する研修会が限られていることが挙げられる。

N=83(20代), 131(30代前半), 168(30代後半)  
129(40代後半), 107(50代)

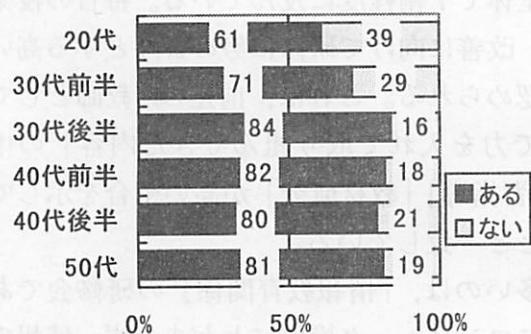


図18 研修会受講経験(年代別)

図18から、受講経験を年代別にみると、30代後

半以降では80%を越えている。20代、30代前半でそれぞれ62%, 71%と、他の年代と比較してやや少ない。これは、初任研、5年研、10年研の悉皆研修を受講しているためと思われる。どの年代においても、教育センターが教員の資質能力を高める場として認められていると考えられる。

N=51(教務主任), 57(研究主任)  
170(学年主任), 419(学級担任)  
26(副担任), 58(その他)

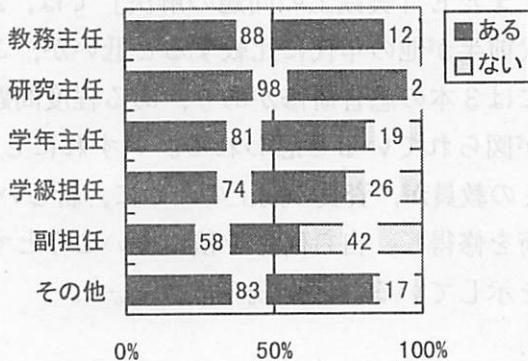


図19 研修会受講経験(校務分掌別)

また、図19は研修会受講経験を校務分掌別で見たものであるが、教務主任、研究主任の受講経験が、88%, 98%と非常に高く、受講回数においても4回以上の割合は60%を越えている。このことは、学校運営や教育の今日的課題に直接関わる立場で、教育課題の解決の糸口を模索し、その場を教育センターに求めている結果と考えられる。

### (2) 研修会の受講動機

研修会の受講経験のある回答者に受講動機を質問した。複数回答により、A「自分から進んで(新しい知識や情報を得たい)」, B「自分から進んで(技術を修得したい)」, C「自分から進んで(他校の情報を得たい)」, D「自分から進んで(自分の考えを整理したい)」, E「自分から進んで(実践上の課題の解決)」, F「自分から進んで(その他)」, G「上司や先輩にすすめられて」, H「友人に誘われて」から答えてもらい、表11にまとめた。

各年代において、その多くが「自分から進んで」のものであり、「上司、先輩の勧めや友人の誘い」によるものを大きく上回っている。

「自分から進んで」の理由をさらに詳しくみると、A「新しい知識や情報を得るために」がどの年代においても高い数値を示し、ついでB「技術の修得」、E「実践上の問題の解決」となっている。その中で、B「技術の修得」については、年代が上がるにつれて、その割合がやや減少傾向にある。またE「実践上の問題の解決」では、20代、30代前半が他の年代に比較すると低いが、この年代には3本の悉皆研修があり、ある程度問題の解決が図られていると思われる。いずれにしても、多くの教員が、資質の向上のために、新しい知識、技術を修得し、自ら研修を積んでいくこうとする姿勢を示していることが読み取れる。

表11 研修会受講動機（年代別）  
複数回答 単位（%）

動機 \ 年代	20代	30代 前半	30代 後半	40代 前半	40代 後半	50代
A	71	77	82	86	85	82
B	51	56	50	47	41	31
C	6	5	10	25	15	17
D	2	10	14	14	21	10
E	24	31	40	43	45	47
F	4	1	0	1	2	1
G	12	17	18	18	14	14
H	0	0	0	1	0	1
I	2	3	0	2	2	8
N = (人)	51	93	141	135	103	82

- A : 自分から進んで（新しい知識や情報を得たい）
- B : 自分から進んで（技術を習得したい）
- C : 自分から進んで（他校の情報を得たい）
- D : 自分から進んで（自分の考えを整理したい）
- E : 自分から進んで（実践上の課題の解決）
- F : 自分から進んで（その他： ）
- G : 上司や先輩にすすめられて
- H : 友人に誘われて
- I : その他

表12では、受講動機を校務分掌別に示した。教務主任と研究主任の受講理由として、「他校の情報を得る」が、高い値を示している。これは、研修会を通して他校の実践について学び、自校の参考にしたり、先進校に学ぼうとしたりする意欲の表れであり、研修会が他校の教員との交流を通した情報交換の場としての役割を果たしているものと考えられる。

表12 研修会受講動機（校務分掌別）単位（%）

分掌 \ 動機	教務主任	研究主任	学年主任	学級担任	副担任	その他
A	80	95	85	78	80	83
B	52	33	48	43	45	40
C	13	27	9	15	27	24
D	19	7	9	18	23	11
E	58	27	33	37	52	64
F	4	0	1	1	2	0
G	10	13	16	16	18	20
H	0	0	0	1	0	0
I	8	0	2	3	2	0
N = (人)	45	56	137	308	15	48

※ A～Iは表11と同じ

### (3) 受講した研修会

次に、これまで受講した研修会の内容について尋ねた。その結果が図20である。

最も割合の高いものは、「教科関係」の研修会であり、全体で7割程度に及んでいる。毎日の授業の充実、改善に向けて研修に努めようとする高い関心が認められる。これは、前述の「教師としてこれまで力を入れて取り組んできた内容」の中で、「学習指導」「教材研究」が高い割合を示していることと一致している。

次に多いのは、「情報教育関係」の研修会である。単にコンピュータ操作にとどまらず、情報の処理・活用の能力を高めるために、積極的に研修に努めようとする姿勢の表れであろう。これまでの研修の手段・方法では、「先輩・同僚」や「校内

研修」に求める傾向が強かったが、コンピュータ研修については、施設や指導者のそろっているセンターの果たす役割が大きい。

「情報教育関係」の研修会においては、他の受講内容ではあまり差のない校種間に差異が認められる。中学校に比べると、小学校の教員にこの研修の受講経験者が多い。小学校では、すべての学級担任がその指導に当たるためと考えられる。

N = 403 (小), 207 (中) 複数回答

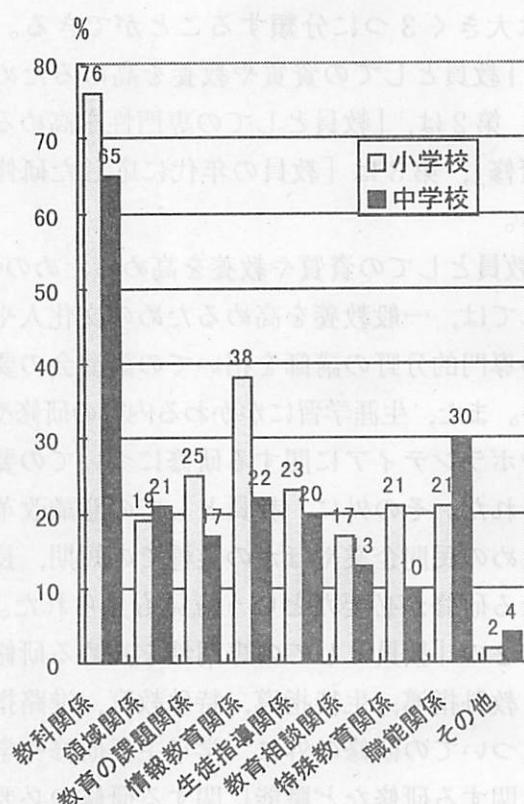


図20 受講内容

また、情報教育関係の研修会について年代別に見ると（表13）、30代後半から40代前半に受講経験者が最も多い反面、20代が少ない。若い世代では、すでにコンピュータを活用できる教員が多いからとも考えられる。

表13 受講内容（年代別）複数回答 単位（%）

年代 内容	20代	30代 前半	30代 後半	40代 前半	40代 後半	50代
教科関係	73	75	74	76	68	66
領域関係	20	22	24	19	15	18
教育の課題関係	8	8	16	32	28	34
情報教育関係	22	28	38	38	31	26
生徒指導関係	6	16	22	27	26	23
教育相談関係	0	10	20	13	22	22
特殊教育関係	10	20	19	14	19	15
職能関係	0	3	21	36	38	31
その他	2	2	1	4	4	2
N = (人)	51	93	141	135	103	87

表14 受講内容（校務分掌別）

複数回答 単位（%）

年代 内容	教務主任	研究主任	学年主任	学級担任	副担任	その他
教科関係	56	77	73	75	67	67
領域関係	16	23	15	23	20	13
教育の課題関係	51	63	20	13	7	19
情報教育関係	40	59	24	31	13	27
生徒指導関係	38	23	23	16	13	40
教育相談関係	18	16	16	14	7	29
特殊教育関係	13	11	12	19	13	33
職能関係	58	64	33	10	7	17
その他	2	2	3	3	13	0
N = (人)	45	56	137	308	15	48

表13, 14により年代別、校務分掌別に見て、受講内容に違いが見られるものが、「教育の課題関係」、「職能関係」である。この二つの項目については、30代後半以降の年代に多く、校務分掌別では学年主任、研究主任、教務主任が多く受講している。これは学校組織の中で教育課題解決に直面し、解決に向けて積極的にかかわらなければならない立場にあるためと思われる。「領域関係」「生徒指導」「教育相談」については、大きな差異は認められない。

#### (4) 研修会の受講経験なしの理由について

これまで当教育センターの研修会の受講経験のない教員にその理由を尋ねた。選択肢は、「自分は経験豊富なので、研修会を必要としない」、「これまで興味関心のある研修会がなかった」、「学校の諸事情で受講できなかった」、「授業を確保したい」、「担任学級や担当している部活動が心配である」、「時間や心のゆとりがない」、「その他」であり、複数回答である。

N = 169

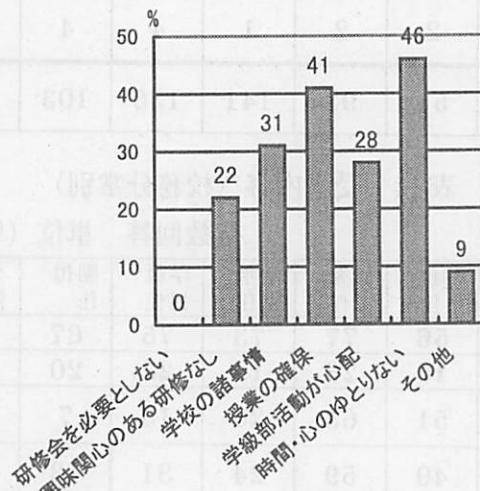


図21 受講経験なし 理由

それによると、「自分は経験豊富なので、研修会を必要としない」という回答ではなく、全員が何らかの研修の必要性を感じている。しかしながら、受講できない理由を分析してみると、「時間や心のゆとりがない」という理由が46%と一番高い割合を示している。これは、前述の「研修への取り組みの障害の理由」の項目で、「時間の確保がむずかしい」という理由を挙げている教員が最も多いことと一致する。各年代別に見ても、大きい割合を示しており、多忙感を抱いていると考えられる。

次に高い値を示しているのが「授業を確保したい」という理由であり、授業の確保を優先したいという気持ちが感じられる。

また、「学校の諸事情で」という理由も全体で31%と高く、各学校の行事、教員数、出張の有無、生徒指導上の問題など、幾つかの理由が考えられるが、研修会を受講したいができないという実態が見えてくる。

さらに、22%の値を示している「興味・関心のある研修がない」という理由についても、見逃すことはできない。今後、教員のニーズに応じた教育センターの研修会の企画が重要となってくる。

#### (5) ライフステージに応じた研修

「教員のライフステージに応じた研修について、どのような研修が必要と思うか」という設問に対しても多くの意見が寄せられた。これらの意見は大きく3つに分類することができる。第1は、「教員としての資質や教養を高めるための研修」、第2は、「教員としての専門性を高めるための研修」、第3は「教員の年代に応じた研修」である。

「教員としての資質や教養を高めるための研修」としては、一般教養を高めるための文化人や、ほかの専門的分野の講師を招いての講演会の要望が多い。また、生涯学習にかかる内容の研修や、趣味やボランティアに関する研修についての要望も見られた。その外に、教員としての意識改革を図るための民間企業やほかの業種での短期、長期にわたる研修が必要だという意見も見られた。

第2の「教員としての専門性を高める研修」では、教科指導、生徒指導、特殊教育、進路指導などについての研修の外に、学年主任研修や学校運営に関する研修など職能に関する研修の必要性を感じている。

第3の「教員の年代別研修」では、5年次研修、10年次研修に加えて、それ以降の経験年数に応じた研修の必要性が挙げられている。また年代に応じて抱える問題が異なることから、年代毎の教員としての心構えや教育の諸問題を考える研修など、年代を限定した研修が必要であるとの考えが示されている。

以下は、寄せられた意見の抜粋である。

「ライフステージに応じた研修意見」(抜粋)

- ① 興味を引く幅広い分野のテーマの研修。
- ② 社会的視野を広げる体験は今後増えていいのではないかと思う。
- ③ 体験的活動が多く入っている研修でゆとりを持った内容のもの。
- ④ 人間性を高めたり、趣味を深めたりする研修。
- ⑤ 研究先進校の視察やその学校で研究に参加したり、異業種での実務研修をしたりする個人の意識改革のための長期の研修。
- ⑥ 新しい学力観を含めて新教育課程の中での学習活動についての研修。
- ⑦ 生徒指導、教育相談についての研修は常に必要だと思う。
- ⑧ 15年経過での学校運営の在り方についての研修。
- ⑨ 教職20年前後の教員を対象にした研修。教員としての悩みや現場での問題等を気軽に話し合える場。
- ⑩ それぞれの年代での研修会が必要。
- ⑪ 30代後半からの学校運営に関する研修会、この年代での学級担任としての研修。

(6) 今後取り入れてほしい研修

仙台市教育センターで今後取り入れてほしい研修として挙げられた意見は、「知識・教養を高めるための研修」と「教育実践に役立つ研修」の二つに大別される。

「知識・教養を高めるための研修」として要望が多いのは、スポーツ、音楽、美術など実技、実習を含んだもの、外国語（英会話など）の研修、ボランティア研修の外に文化講演会などであった。その外、生涯学習、社会情勢を学ぶ研修なども挙げられた。

「教育実践に役立つ研修」として最も要望が多

いのは、コンピュータ研修であった。この研修については操作の能力別研修を始め、インターネット研修、教育ソフトの活用法、Webページ作成の仕方の研修など、教員の関心の高さがうかがえる。

ついで、要望の多いのは、時代を反映した総合的な学習の時間に関する研修であり、総合的な学習の時間の導入に対して、多くの教員が研修の必要性を感じていることがわかる。ほかに、学級経営、学習指導はもとより、教育相談についての研修、生徒や保護者とのコミュニケーション、かかわり方に関する研修の要望があり、教員が現在直面している諸問題を解決していくための研修を必要としていることがわかる。

いずれの研修についても、講義形式の研修だけではなく、実技や実習、演習を含んだ内容の研修を要望していることが共通している点として挙げられる。

(7) 研修会以外の事業への参加について

仙台市教育センターが主催する「講演会」「教育課題研究発表会」「長期研修員研究発表会」「調査研究発表会」への参加状況について、教諭を対象に質問し、その結果を図22で示した。

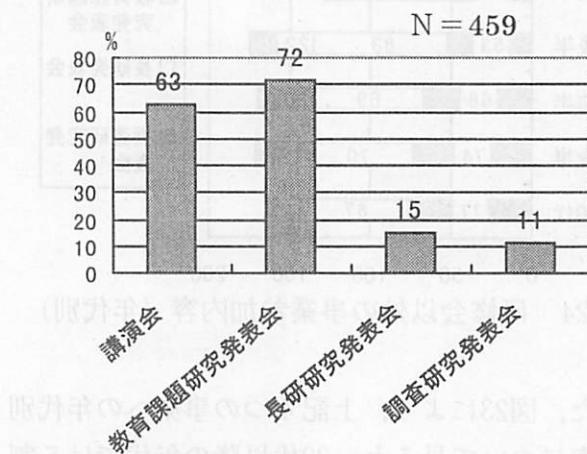


図22 研修会以外の事業参加状況

これらの事業のいずれかに参加した経験のある教員は782人中459人(59%)である。その中最も高い値を示しているものは「教育課題研究発

表会」で、参加経験者の72%に及び、ついで「講演会」の63%となっている。「長期研修員研究発表会」「調査研究発表会」は、それぞれ15%, 11%と低い。これらの参加を年代別にみても、その順位性は同様である。教育の課題解決の糸口を求めて、あるいは情報収集を目的として、教育実践にすぐに生かすことのできるものを求めているためと考えられる。

N = 83 (20代), 131 (30代前半), 168 (30代後半)  
164 (40代前半), 129 (40代後半), 107 (50代)

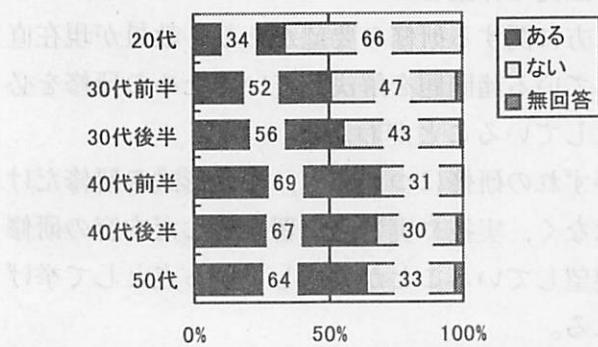


図23 研修会以外の事業参加状況（年代別）

N = 28 (20代), 68 (30代前半), 94 (30代後半)  
113 (40代前半), 87 (40代後半), 87 (50代)

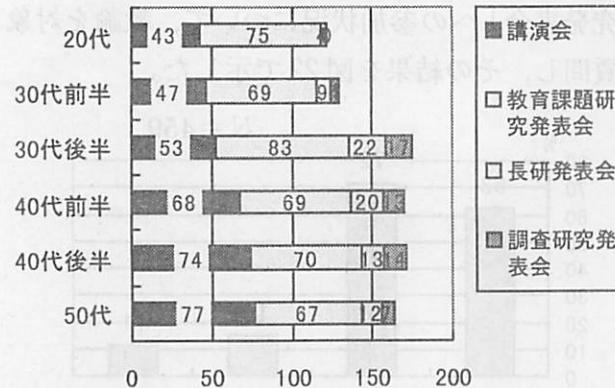


図24 研修会以外の事業参加内容（年代別）

また、図23により、上記4つの事業への年代別参加率について見ると、30代以降の年代では5割を越えているのに対して、20代では3割と低い割合となっている。特に、「長期研修員研究発表会」「調査研究発表会」の参加経験はそれぞれ4%, 0%と低い（図24）。参加経験なしの理由の中で見られるように（表15）、事業の存在を知らないこ

とと密接にかかわっていると思われる。

N = 325

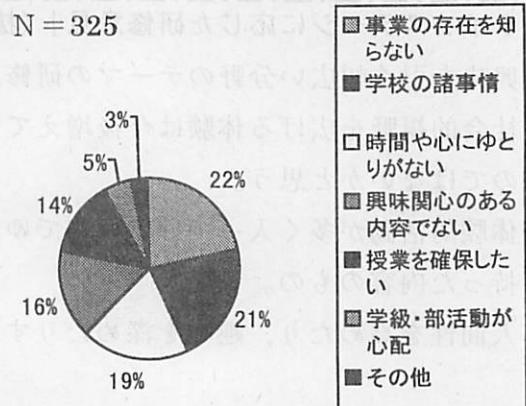


図25 研修会以外の事業参加経験なし理由

表15 研修会以外の事業参加経験なし理由  
(年代別) 単位人

年代\理由	20代	30代前半	30代後半	40代前半	40代後半	50代
事業の存在を知らない	23	17	15	9	3	4
興味関心のある内容でない	6	12	10	9	8	7
学校の諸事情	7	8	13	12	14	14
授業を確保したい	7	7	12	8	8	3
学級・部活動が心配	3	7	4	3	0	0
時間や心のゆとりがない	8	11	18	11	8	7
その他	0	3	2	1	2	1
計	54	65	74	53	43	36

図25に見られるように、これまでに研修会以外の行事に参加したことのない理由は、割合の高い順に「事業の存在を知らない」「学校の諸事情」「時間や心のゆとりがない」「興味・関心のある内容でない」となっている。「学校の諸事情」「時間や心のゆとりがない」は、研修会への参加を妨げる理由に挙げられると同様に、研修会以外の行事への参加を妨げる要因にもなっている。

ここで問題として挙げられるのは、「事業の存在を知らない」という項目を、20代の教員の54人

中23人が、またそれ以降の年代においても比較的高い割合でこれを理由としていることである。また、「興味・関心のある内容でない」の項目においても、各年代で同じように高い数値を示している。今後、当センターの事業の企画において、内容やその広報活動の在り方を検討していくことが求められている。

#### (8) 資料室の利用状況

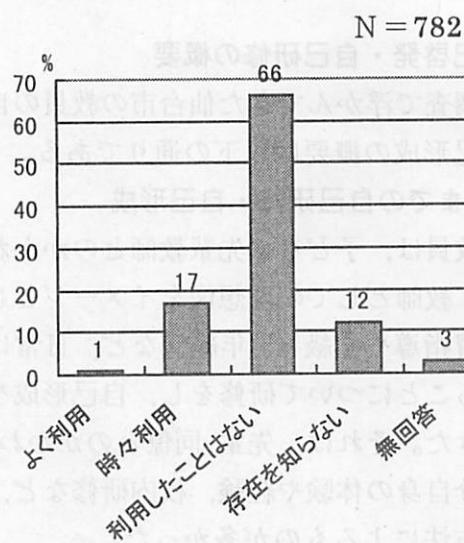


図26 資料室利用状況

資料室の利用についてのアンケートでは、66%の回答者が「利用したことがない」、さらに12%の回答者がその「存在を知らない」と答えており、全体の78%の人が利用経験がないとの結果になっている。その利用率はかなり低いと言える。「時々利用」「よく利用」しているのは研究主任で、情報収集や校内研究を進める上での資料を求める場の一つとなっているようである。

#### (9) 刊行物について

センターが刊行している所報「郭公」、教育研究紀要「教育はいま」、長期研修員研究報告書「わたしたちの研究」についての読まれている状況は表16に示すとおりである。

##### ① 所報「郭公」

所報「郭公」の読まれている状況は、「時々読んでいる」47%、「いつも読んでいる」50%，合計97

%と高い割合を示し、よく読まれている。

表16 センター刊行物 読んでいる状況

N = 782

刊行物 状況	郭公	教育はいま	わたしたち の研究
いつも読ん でいる	50%	11%	5%
時々読ん でいる	47%	60%	51%
読んだこと がない	2%	29%	43%
無回答	1%	0%	1%

##### ② 教育研究紀要「教育はいま」

「教育はいま」の読まれている状況を見てみると、「郭公」と比較して、その数値は低い。「時々読んでいる」は60%，「いつも読んでいる」は11%となっているが、29%が「読んだことがない」と回答している。

表17 センター刊行物 読んだことがない理由  
(複数回答)

刊行物 状況	郭公	教育はいま	わたしたちの 研究
存在を知ら なかった	8人	46%	39%
保管場所が わからない	7人	21%	20%
興味関心が ない	12人	13%	14%
読む時間が ない	10人	25%	28%
心にゆとり がない	4人	16%	16%
その他	0人	1%	1%
総人数	18人	203人	333人

「読んだことがない」理由として高い割合を示しているのは、「存在を知らなかった」であり、46%となっている。また「保管場所がわからない」を理由として挙げている人も21%いる。これは「郭公」が学校を通じて個人に配付されるのに対

して、「教育はいま」は1校に1冊の配付であり、その存在について全職員に行き渡っていないためと考えられる。

### ③ 長期研修員研究報告書「わたしたちの研究」

「わたしたちの研究」については、「時々読んでいる」が51%ともっとも高く、ついで「読んだことがない」が43%となっている。「いつも読んでいる」は5%と低い数値であり、読んでいる状況はあまり芳しくない。

「読んだことがない」理由としては、「教育はいま」と同様の傾向がうかがえる。

### (10) 事業全般についての要望

仙台市教育センターの事業全般についての要望事項として、多くの意見が寄せられた。現在多くの研修会があり、充実していると感じている教員が多いが、それぞれの学校での校務、時間的な理由で参加できない状況から、研修会の時期、時間についての要望が多い。中でも夜間や授業終了後の時間帯の研修会の開催を望む意見が多くかった。

また、資料室の夜間・休日の利用や、年度途中での研修の申し込みができるようにしてほしいとの要望も見られた。

研修の内容については、教育現場のニーズに応えるとともに、新しい教育課題、現場での今日的課題解決に向けて役立つ研修、実践に結びつく研修を求めるものが多かった。また、コンピュータや英会話、手話など実技、体験型の研修を取り入れてほしいとの希望もあった。

さらに、研修会の企画、実施に加えて、教員の相談窓口としての機能を教育センターに果たしてほしいとの要望もあった。校内研究や教材研究の困った時の情報提供、インターネットを利用した情報提供、教育に関するアドバイス、悩みを相談できる体制づくりを望む要望、意見なども多かった。(資料1参照)

教育センターの事業についての要望事項を全体

的に見てみると、教員の資質向上のための研修の場としてだけでなく、教育の諸問題に直面している教員をより一層バックアップする役割を担ってほしいとの要望が挙げられている。今後これらをふまえて、本センターの在り方について考えていかなければならない。

## IV 研究のまとめ

### ■ 1 自己啓発・自己研修の概要

今回の調査で浮かんできた仙台市の教員の自己啓発や自己形成の概要は以下の通りである。

#### (1) これまでの自己研修・自己形成

本市の教員は、子どもや先輩教師とのかかわりから得た、教師としての理想像をイメージとして持ち、学習指導や学級・学年経営など、日常に深くかかわることについて研修をし、自己形成をおこなってきた。それは、先輩・同僚とのかかわり、書籍、自分自身の体験や経験、校内研修など、主に身近な方法によるものが多かった。

#### (2) これからの自己啓発・自己形成

新しい教育の動向に、今まで持っていた資質能力の外に新たな資質能力を身に付けたいと考えている教員は多い。しかし、その動向への対応時期については、約半数は早めに対応していきたいと考えているが、4割強は徐々にと考えている。その新たな資質能力獲得の手段・方法としては、センター等公的機関の研修会や、先輩・同僚とのかかわり、書籍を考えている。これらのこととは、本市の教員は時代の方向性をおおよそとらえていることを示しているが、社会の変化の速度に対応する自己啓発が必要である。

そして、身に付けたいと考えている新しい資質能力は、年代や立場によって多少異なるが、学校という組織の中では、基本的な資質能力を持った上であれば、各教員の資質能力は画一的でなくともよく、学校は、その様々な資質能力の集合体であることが大切であり、その資質能力の獲得を望

るものである。

### (3) 求められる自己啓発・自己形成

教員は、実践から学ぶことが多いが、今、学校外での体験研修の必要性が指摘されている。さらに、個性や特徴を生かした得意分野や幅広い人間関係を持つためにも、学校という枠組みの外に研修の場を求める必要がある。内容としては、「すぐ授業に役立つ」等対策的なことに終始せず、教員としてのライフステージを視野に入れた自分なりの研修ビジョンを持ちたいものである。また、校長対象の調査では、「教育全般に対する自己意識の転換」や「社会的常識やモラル」についても考えていかなければならぬことが指摘された。このことは、これから時代の教員の資質能力としても欠かせない事柄である。その外にも、校長から新しい時代を担う教員に対して、豊富な経験に裏打ちされた自己啓発や自己研修に関わる期待やアドバイスが寄せられている。これからの自己形成の参考にしたいものである。(資料2参照)

## ■2 仙台市教育センターの事業について

### (1) 期待される教育センター

研修会については、8割の教員が受講経験があり、その利用率は高い。また教育の新しい動向に対応するために、新たな資質能力を身に付ける方法の第1位にセンター等公的機関での研修が挙げられている。これは、本センターが新しい情報の提供源になることへの期待の大きさの表れであり、情報発信の基地としても積極的に主体的に研修事業を推進していきたい。

### (2) 開かれた教育センター

今年度から開講された夜間研修は好評であったが、今回の調査からも夜間や授業終了後の研修会を望む声が多かった。研修会に限らず、資料室の時間外開放の要望もあり、それらの実現に向けて、取り組んでいかなければならない。

また調査では、校内研究や教材研究に関する情報提供や悩み事に応じる体制を望む声があり、そ

の対応も考えていかなければならない。

広報活動としては、Webページが充実し、それに伴うアクセス数の増加等インターネットを利用した広報が拡充してきているが、刊行物や掲示物等による広報の一層の充実と工夫が求められている。

### (3) 魅力ある教育センター

今後、本センターでは、教員のニーズに応えるため、選択制の導入等受講システムの柔軟化や、今日的な課題についての研修会を増設、また、体験型研修として、他の教育施設での研修や、異業種での長期社会体験研修等の具体化を進めていく。さらに、今後求められる教員の資質能力の向上を図るために、15年研や20年研を視野に入れた研修体系の再構築を進めていく等、充実、拡大の方向で研修事業を推進していく必要があると考えている。

### ●参考文献

- 教育職員養成審議会第1次答申、第3次答申
- 教員の研修・自己啓発活動に関する報告書  
(文部省 1996)

- 「教員のライフステージに応じた研修」に関する研究  
(山口県教育研修所 1999)

### ●委嘱研究員

仙 台 大 学 教 授	佐藤 幹男
仙台市立通町小学校教諭	河原木美智也
仙台市立八乙女小学校教諭	星野 功雅
仙台市立小松島小学校教諭	原田ゆき子
仙台市立将監西小学校教諭	村田 岳彦
仙台市立岩切中学校教諭	岩渕 敬子
仙台市立長命ヶ丘中学校教諭	大内ゆき江

### ●担当

仙台市教育センター

指 導 主 事	瀧谷代志子
指 導 主 事	桜井 重行
指 導 主 事	堀越 清治

### 資料1 【仙台市教育センターの事業についての要望（抜粋）】

- 資料室が、土、日、祝日等にも活用できるようにしてほしい。
- 市の教育センターができて、研修内容が多く準備されていて、ほとんど希望すると受講できるのがとてもよい。
- 夏季休業中にまとめて研修できる機会があればいい。（パソコン実技など）
- 夕方や午後からや3時頃からの研修を取り入れ、授業に支障をきたさず、気軽に参加できる講座をたくさんつくった方がよい。
- 実技中心の研修を増やしてほしい。
- パソコン、英会話、手話、点字などの夜間開放講座。
- 教育の現状に即時対応できる事業や広い視野に立った研修。
  - （例）教育社会学、学級崩壊、教師のメンタルヘルス、他国の教育事情、保護者の学校への期待
- 一日研修は教室を空けるという精神的負担が大きい。半日や長期休業中の研修を望む。
- 新しい教育課題への研修。
- 資料室のビデオテープを貸し出してほしい。
- 研修そのものにゆとりがほしい。
- 年度途中にも研修の申し込みがあったらいい。
- 4月始めの事業計画の中に、できるだけ詳しく内容や講師名を紹介してほしい。受講して期待通りでないこともある。
- 教育関係者以外の方の講話、講演を聞きたい。教育関係者以外の講師による研修。
- 図書資料室の本を充実してほしい。
- センターの教育研究紀要が求めやすくなり、感謝している。
- 広報活動に力を入れてほしい。
- 研究や教材研究で困った時にすぐ相談できる体制を整えてほしい。
- 教員の意識改革に有効な研修（思いや願いを生かす、生きる力を育てる教師像）。
- 2Fロビーに児童生徒の作品等が掲示されているがとても参考になる。小中高の先生方の目に触れる点、ある意味で小中高の連携の一助になると思う。
- 地域の施設を活用することは今まで以上に大切になる。仙台市等の文化施設について、学校でどんな活用や連携が組めるのかという情報や施設担当者からの情報がほしい。
- PRを上手にして教員がその気になるような企画を工夫してほしい。
- 時期や時間帯を考えて、参加しやすいようにしてほしい。
- 研修申し込み期日にもう少し余裕を。
- 長研制度について。センターだけではなく、大学や他県教員としての長研制度を作れないか。
- 教科情報をインターネットで共有したい。
- パネルディスカッションや集団討議が多く、伝達事項が十分でない。中央研修等で伝達されていることは、「～です。」とはっきり伝えてほしい。
- 教科ごとのコンピュータの活用法。
- 保護者対象の研修や講演会等。
- いつも整理された情報を提供していただき感謝しております。
- 生徒指導に関する研修会で女性もどんどん参加できるものを。
- 教員として資質を高め、自覚を促す企画も大切だと思う。

## 資料2 【校長先生から「自己啓発・自己研修にかかる期待やアドバイス」より抜粋】

- 自分の得意分野だけでなく、他の分野にも柔軟に取り組める姿勢がほしい。
- 自己研鑽できる素地はすべての生活の中にある。まず、それを発見できる職場環境を前向きに模索して欲しい。
- 教師の前に一人の社会人であるとの自覚のもと、安定した勤務条件に甘んじることなく、常に向上心を持ち続け、生涯自らの成長・深まりを念じて努力することを期待する。
- 自ら地域社会や市民活動の中に入って、その活動の中で自分の得意分野を広げ、人間的な幅も広げていってほしい。
- 常に子ども中心に視点を置き、研修を積み重ねてほしい。全五感を通し、子どもと感動を共有できる教師を期待する。
- ○ 教師になろうと決意したことを忘れず、職務上のライフプランをしっかり持って研修を深めてほしい。教師自身が積極的に社会の変化に対応する能力を身につける必要がある。
- いろいろな場に出て、多くの人と接する機会をつくる。人間としての幅、見方、考え方を広げる。職務に関して文献を参考にするのもよいが、先輩の話、教えに素直に耳を傾けることも大切。子どもとの触れ合いを密にし、理解を深める。あふれる情熱が生かされるものにしてほしい。
- 児童一人一人を生かし、児童が分かる喜びを味わい、生き生きと学習に取り組める児童側に立った授業の創造に努めてほしい。ボランティア精神を持ち、地域と共に児童を育てる意識を持ってほしい。
- 本から学ぶ姿勢を大切にし、人の話に耳を傾けられる人間をめざしてほしい。チャレンジ精神と努力を忘れずに。
- 教師としての自覚と夢、自信をもってほしい。
- 今の自分に満足することなく、常に新しい分野(校務分掌等)を積極的に求め、研究し、成し遂げようとする姿勢をもって実践することをすすめる。
- 心豊かな児童生徒の育成は、教員自身が心豊かでなければならない。教員もいろんな体験をし、体験の中から心の豊かさを学んでほしいものと思っている。何にでも挑戦し、体で学ぶ姿勢を持ち続けてほしい。
- 教育機器の普及や授業の形態やスタイルが変わっても、人間が人間を教育するのだということだけは見失ってほしくない。
- 教育界という狭い社会だけに生きず、他分野の人々と交流を深め、外から教育を見つめること。わが子と同様な気持ちで子どもたちを理解する研修を深めてほしい。
- 広い視野を持った教師になるよう、ライフステージの自己研鑽を望む。
- 社会的常識を常に根底に持ち、教育の不易の部分と変化する面を的確にとらえられる教員になってほしい。
- 教育課題は自分の勤務する教育現場にある。従って勇気を持ってそれらの教育課題に挑戦し、小さな改善、新しい実践を継続的に積み上げていってほしい。
- 多様な子どもたちが、各々、より適した人生を歩んでいけるような支援・援助ができるように、幅広い教養や能力を身につけてほしい。
- 心身共に健康であることがまず大前提。常に進取の意気を持って教育活動にあたること。そして、自分の仕事が好きで、子どもが大好きであることが大切。
- 知識習得に偏りがちなこれまでの学校教育から転換し、ゆとりの中で「生きる力」を育む教育活動に積極的に挑戦し実践研究を積み上げていってほしい。

- 生涯学習社会の中の学校教育を考えるとき、子どもに生涯にわたって学び続ける喜びを味わわせるために、教師自身も自ら学ぶ喜びをもって教育にあたってほしい。
- 社会情勢(世界も含めて)にもっと目を向け、今後の教育の在り方を真剣に考えてほしい。それにはもっと本を読むことである。
- 教員は非常識だと言われないよう、礼節に厳しさがほしい。(児童には要求して、自分は勝手にではいけない。)
- 一つの考えにとらわれず、自分自身を振り返ることの謙虚さをもち、まわりの助言を大切に意欲的に自分自身を磨くことに努めてほしい。
- 「人を教育すること」の重大さとその責務を常に念頭におき、自己啓発に心がけること。
- いくら制度や組織が変わっても、教職員の意識が変わらなければ学校も変わっていかない。教育の本質を見つめ、追求していく教職員であってほしい。
- 児童は生まれつき心身ともに自ら成長する力があり、教師はそれを扶げる役目である。まず、児童理解（観察記録）を基本としてほしい。
- 時代の流れによる教育の不易と流行を的確に判断し積極的に実践してほしい。そのためには、先輩教師の教育観、人生観による助言も素直に受け入れる姿勢がほしい。
- 既成概念にとらわれず、現状の学校運営のシステムや授業のあり方、生徒観を常に見直し、これから生きていく生徒にとって、どうかかわるべきかを追究していってほしい。
- 若い教員にはまず自分の得意分野を深めて自信を持ってもらい、徐々にそのレパートリーを広げて研修を深めてもらいたい。
- 教員としてのライフステージをしっかりと見すえ、その時々の教職の課題に対し積極的に取り組む意欲を持つことが大切である。
- 教職にとって最も基本的な課題は子どもへの愛情に根ざした「教職へのやる気」を常に新鮮なものとして保ち、かつ高めることを校長として期待したい。
- 明るい、視野の広い人間性豊かな教員が望まれる。そのためには遊び心を身につけた人間も必要である。(車のハンドル、ブレーキには遊びがある。なかつたら大変である。)
- 豊かな人間性を身につけ、幅広い分野への自己研修を積極的に行ってほしい。多くの授業を見たり、研修会や講習会に主体的に参加してほしい。
- 教育界以外の人々と多くかかわりを持つことが、これから教員に必要になってくると思われる。
- マニュアルに頼らず、自信をもって対応できるような教師としての生きる力を、日々の実践の中で身に付けてほしい。
- 常に研修に励み、高度な知識と技能を磨く努力をすることが大切。先輩、上司に積極的に指導・助言を求める態度も重要である。しかし、豊かな人間性なくしては教師として不適切である。
- 教育は人なり。子どもの人格形成に与える影響は大である。教師になろうとした初心を忘れず、情熱をもって取り組んでほしい。

# 大 目

## 学校における情報通信ネットワークの活用に関する研究 —インターネットを利用した教育に対する意識調査を通して—

### ■要 約

この研究は、現在急速に学校現場へ浸透しつつあるインターネットというメディアを、教育利用という観点からとらえ、その推進のための条件及び問題点について、市内教員の意識調査をもとに探ったものである。

調査の結果から、情報活用能力の育成のためのインターネット利用の条件や、望ましい情報教育の推進に向けて、インターネットをどのように活用していくべきか、それについての提案を行うものである。

### ■キーワード

情報活用能力    情報の光と影    webページによる発信

# 目 次

I	はじめに .....	59
1	情報の進展に対応した教育の必要性 .....	59
2	本市での情報教育の現状 .....	59
3	本研究のねらい .....	59
II	研究の概要 .....	59
1	研究の内容と方法 .....	59
2	調査の内容 .....	59
3	調査結果 .....	60
(1)	授業でのインターネット活用に対する意識 .....	60
(2)	学校におけるwebページの必要性とその内容について .....	63
(3)	総合的な学習の時間におけるインターネットの位置付け .....	64
(4)	インターネットのもつ課題について .....	65
(5)	情報教育推進のための校内体制と研修について .....	65
III	インターネットを利用した教育に対する提案 .....	67
1	情報活用能力の育成とインターネット .....	68
(1)	授業における効果的な情報収集の在り方 .....	68
(2)	インターネットを使った情報発信について .....	69
(3)	webページによる情報発信 .....	69
(4)	総合的な学習の時間におけるインターネットの活用について .....	70
2	望ましい情報教育推進に向けて .....	70
(1)	インターネット活用上の問題 .....	71
(2)	インターネット活用についての校内体制や研修の在り方 .....	71
(3)	推進上の諸問題 .....	72
IV	おわりに .....	73
1	研究の反省 .....	73
2	今後の課題 .....	73
◇	委嘱研究員 .....	73
◇	参考文献 .....	73
◇	資料 実践事例 1 仙台市立将監東中学校 .....	74
	実践事例 2 仙台市立東六番丁小学校 .....	75
	実践事例 3 仙台市立南光台東中学校 .....	77
	実践事例 4 仙台市立連坊小路小学校 .....	78
	インターネットを利用した教育に対する意識調査質問内容 .....	80

## I はじめに

### ■ 1 情報化の進展に対応した教育の必要性

さまざまなメディアのデジタル化や情報通信ネットワークの進展などにより、今日の社会はめまぐるしく変化している。このような状況の中で学校教育も情報化に対応した変革が求められている。

第15期中教審第一次答申(1996)や、バーチャルエージェンシー「教育の情報化プロジェクト」報告(1999)では、情報化に対応した教育の充実や、高度情報通信社会に生きるすべての子供たちが備えておかなければならぬ資質や能力、コンピュータをどのように教育に生かしていくなど、重要な提言がなされている。特に、急速に整備がされつつあるインターネットというメディアを、情報の光と影の部分を踏まえつつ、教育的な立場から学習活動の中に位置付けていくことは、これからの大きな課題である。

### ■ 2 本市での情報教育の現状

仙台市では、平成9年度から市立学校のインターネット接続を開始して、平成11年度中に全ての学校が接続を完了することとなった。

すでにwebページを開設して、情報発信を行い、学習活動に成果を上げている学校も少なくはないが、多くの場合、導入に伴うコンピュータの操作研修を行ったり、インターネットの教育利用の可能性を模索したりしているのが現状である。

そのような中で、本センターが開催しているインターネット関連研修会には、ここ数年来300名を越える受講者があり、また多くの学校が情報教育関連の要請研修を希望している。このことから、インターネットに対する教職員の関心は非常に高まっているといえる。

一方、インターネット接続校が増加するとともに、有害情報や利用の際のモラルなどについて早急に対策を講じる必要が生じてきている。

### ■ 3 本研究のねらい

本研究は、教育におけるインターネット利用の可能性に着目しながら、その推進のための条件及び問題点を、市内教職員の意識調査をもとに探り、それらを踏まえて、望ましいインターネット活用の在り方について提案を行う。

## II 研究の概要

### ■ 1 研究の内容と方法

- (1) 理論研究
- (2) 意識調査による現状の把握

抽出した仙台市内の小中学校へ質問紙法による意識調査を実施する。

- (3) 実践に向けた提案

インターネットのもつ教育的効果と課題を検討し、学校教育における情報通信ネットワークへの望ましい対応の在り方を提案する。

### ■ 2 調査の内容

表1 調査対象校

区	場所	小学校			中学校		
		A	B	C	A	B	C
青葉	中心	1	2	2	0	1	1
	周辺	1	1	2	2	1	2
泉	中心	2	1	1	0	1	1
	周辺	1	1	2	2	1	2
太白	中心	2	2	1	1	0	0
	周辺	2	1	2	1	1	1
宮城野	中心	1	2	1	1	1	0
	周辺	1	2	2	0	1	0
若林	中心	2	1	1	0	0	0
	周辺	2	1	1	1	1	1
学校数合計		15	14	15	8	8	8

A : インターネット導入済み

B : 今年度新規導入校

C : インターネット未導入

## (1) 調査期間

平成11年10月5日～10月20日

## (2) 調査対象

仙台市立小学校抽出44校

中学校抽出24校

- ・意識調査 抽出校全職員

- ・実態調査 抽出校研究主任

標本の抽出にあたっては、インターネット導入の有無(時期)、地域、校種等を配慮した(表1)。

## (3) 調査方法

- ・質問紙法(選択肢式、自由記述式)

## (4) 回収率 98.6%

## (5) 調査内容(卷末資料参照)

- ①「授業でのインターネット活用」に関する意識調査(全5項目)
- ②「学校におけるwebページの開設」に関する意識調査(全3項目)
- ③「総合的な学習の時間におけるインターネットの活用」に関する意識調査(全2項目)
- ④「インターネットのもつ課題」に関する意識調査(全7項目)
- ⑤「校内におけるインターネットの推進」に関する実態調査(全1項目)

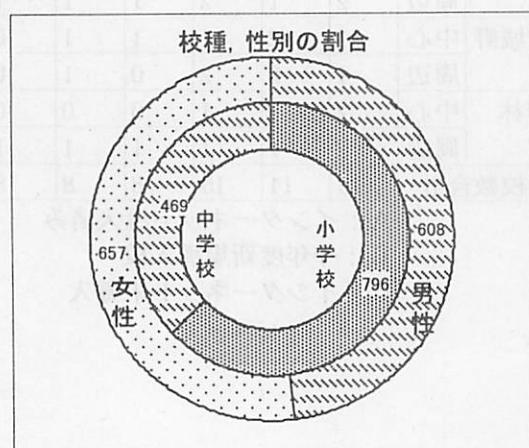
## (6) 回答者の属性(全サンプル数1265件)

## ①インターネット導入の有無

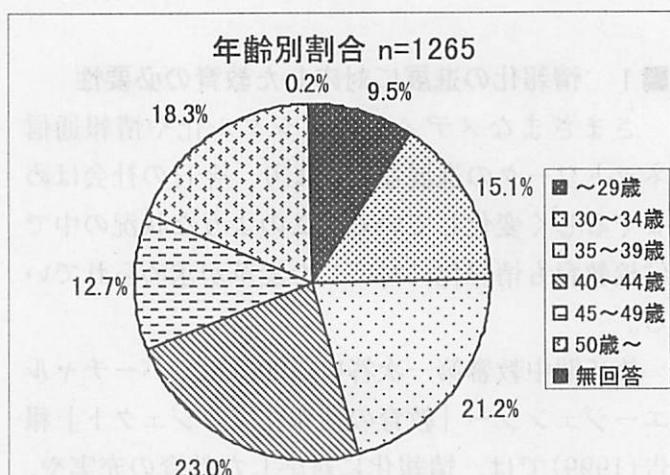
導入校: 小学校29校、中学校16校

未導入校: 小学校15校、中学校8校

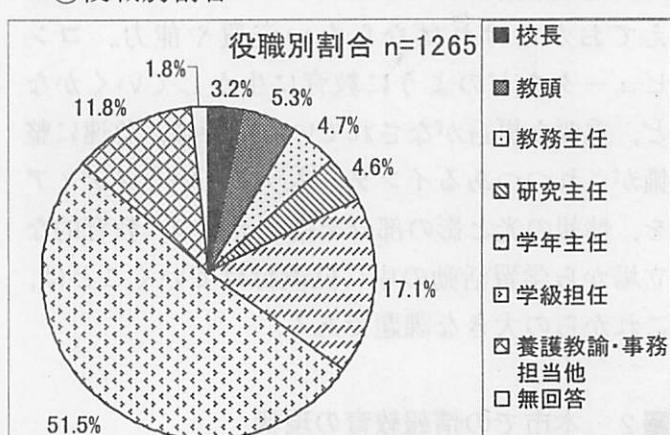
## ②校種別、性別の割合



## (3) 年齢別割合



## (4) 役職別割合



## ■ 3 調査結果

## (1) 授業でのインターネット活用に対する意識

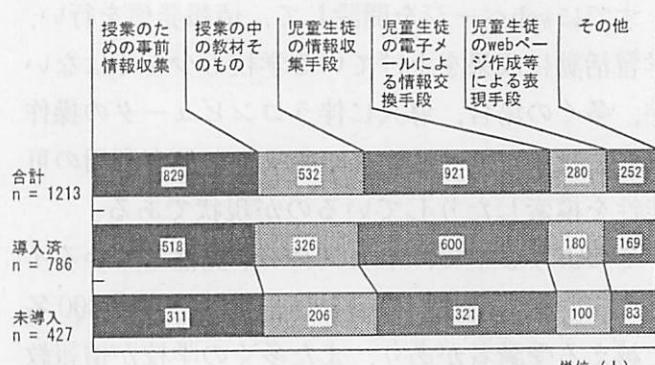


図1 インターネットを授業でどのように利用したいか(複数選択)

質問1は、『インターネットをどのように活用していくたいか』を質問したものであるが、「児童生徒の情報収集手段」や「授業のための事前情報

収集」としての回答が多い。また、「電子メールやwebページ等での情報の発信」で利用したいという回答も見られる。なお、インターネットの導入校と未導入校での差異は見られない(図1)。

Q1で児童生徒の情報収集手段と回答した中から抽出

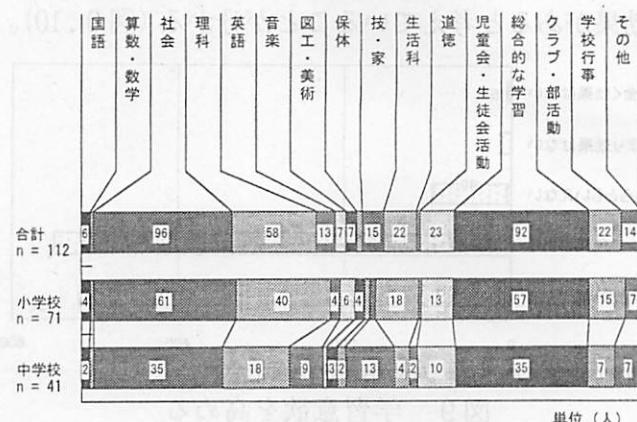


図2 どの教科・領域で利用すると効果があるか(5つ以内で選択)

質問2では『学習に取り入れやすい教科・領域』を質問した。「社会科」「総合的な学習」「理科」などの教科で、利用の効果を期待する回答が多い。小・中の校種による差異は特に認められない(図2)。また、個人で既にインターネットを利用していいる教師から抽出したデータでも、同様の結果が得られている。

それらの教科を選択した理由(質問3)としては、「学習をまとめる上で多くの情報を収集できる」「調べ学習などで図書館にない情報も得ることができる」といった、主に情報収集の手軽さ、情報量の多さを挙げている回答が目立つ。また「子

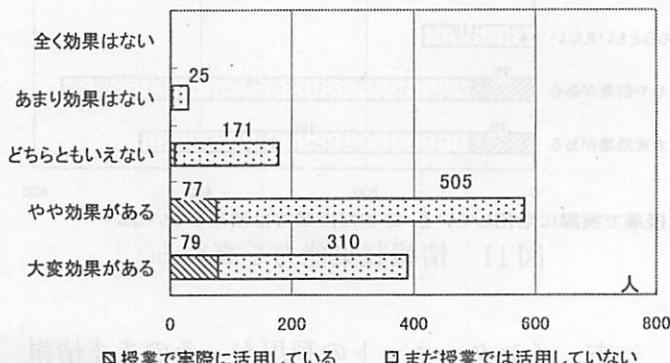


図3 webページ検索による教育的効果

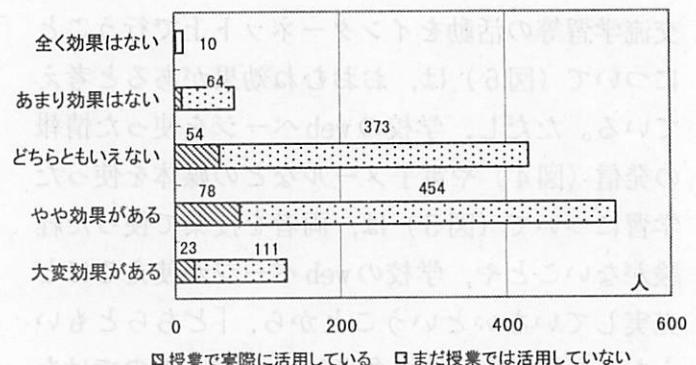


図4 情報発信による教育的効果

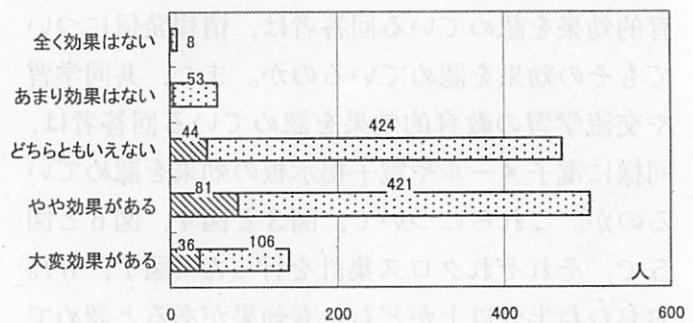


図5 電子メールや掲示板による教育的効果

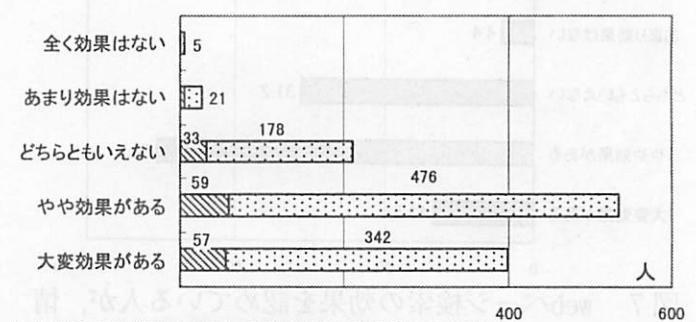


図6 共同学習や交流学習による教育的効果

どもたちが主体的に情報を収集・判断し、活用する機会が増す」といった、情意面での意欲の向上を話題にしている意見も見られた。

質問4は『インターネットを利用することにより、どのような教育的効果が期待できるか』を質問したものである。webページの検索を取り入れた学習(図3)や、同一の課題について取り組む共同学習、複数の学校がネット上でかかわり合う

交流学習等の活動をインターネット上で行うことについて(図6)は、おおむね効果があると考えている。ただし、学校のwebページを使った情報の発信(図4)や電子メールなどの媒体を使った学習について(図5)は、両者を授業で使った経験がないことや、学校のwebページが使えるほど充実していないということから、「どちらともいえない」という回答の多さにつながったのではないかと予想される。

同じ質問において、webページの検索による教育的効果を認めている回答者は、情報発信についてもその効果を認めているのか。また、共同学習や交流学習の教育的効果を認めている回答者は、同様に電子メールや電子掲示板の効果を認めているのか。これらについて、図3と図4、図6と図5で、それぞれクロス集計を行った(図7、8)。おおむね半分以上がどちらも効果があると認めているものの、どちらともいえない回答した割合が3割ほど見られた。

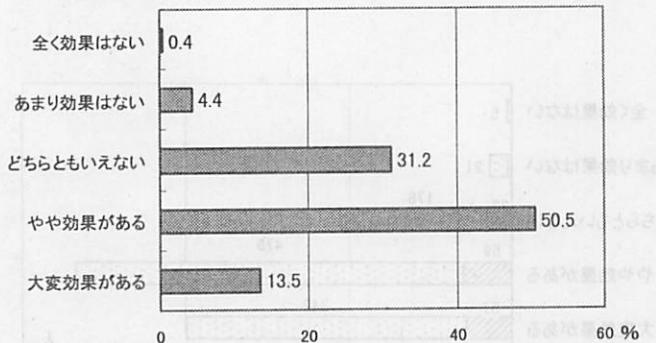


図7 webページ検索の効果を認めている人が、情報発信による教育的効果をどう見ているか。

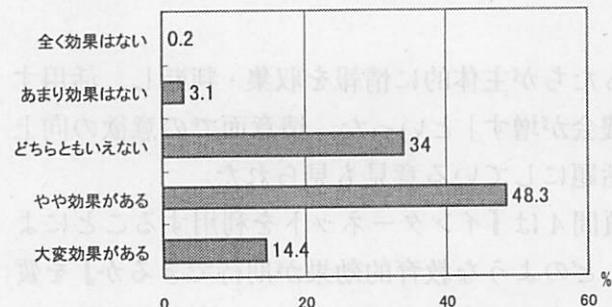


図8 共同学習や交流学習の効果を認めている人が、電子メールや電子掲示板の教育的効果をどう見ているか

質問5は『インターネットが児童生徒の能力向上に効果があるか』について質問したものである。学習意欲の向上については、目新しいメディアであるインターネットを取り入れることについて、ほとんどがその効果を認め、主体的な学習を促す効果があると考えていることが分かる(図9、10)。

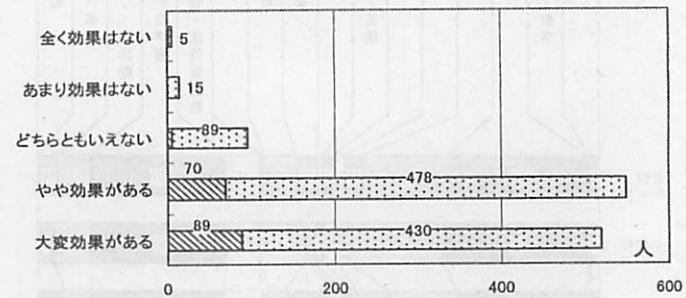


図9 学習意欲を高める

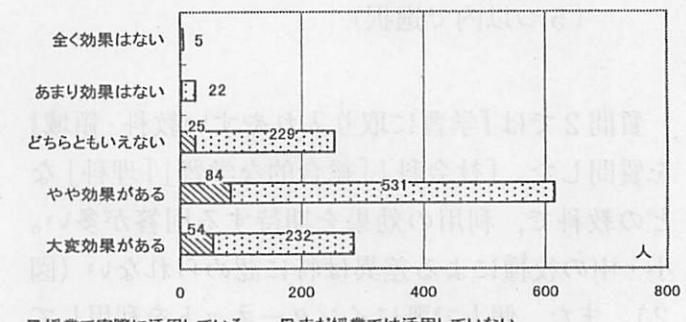


図10 主題的な学習を促す

次に情報活用能力の育成という観点(図11～16)からは、情報の収集能力を高めるのに大変効果があるという回答が多い(図11)。

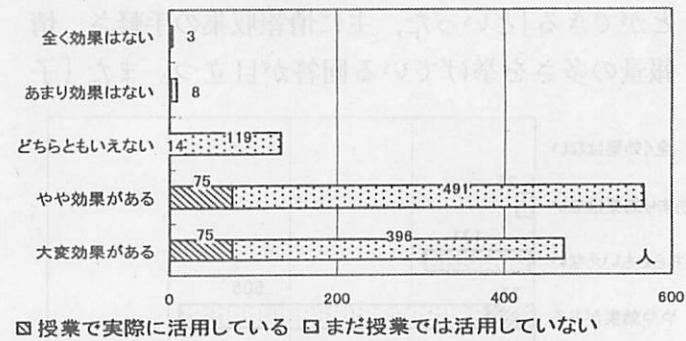
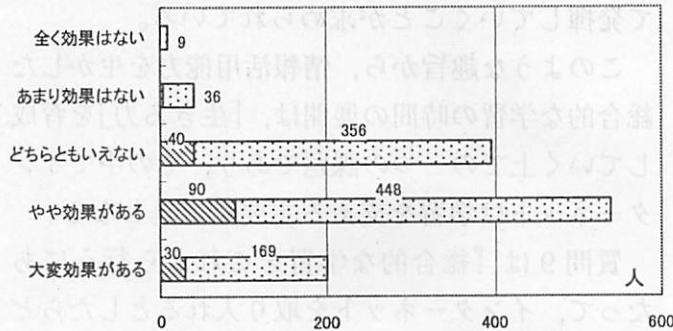


図11 情報収集能力を高める

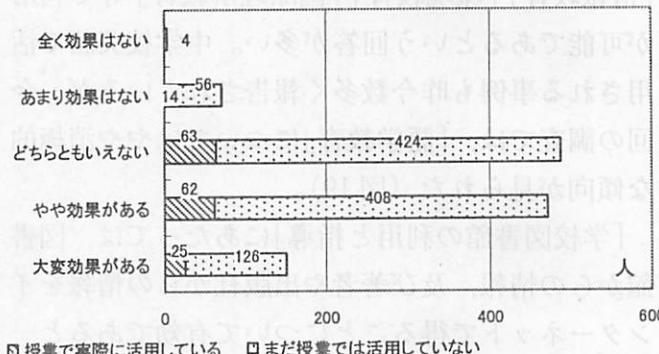
一方、インターネットの利用が、そのまま情報処理・分析能力を高めたり(図13)、コミュニケーション

ション能力の向上にはつながったりはしない(図16)と考えている回答も見られる。



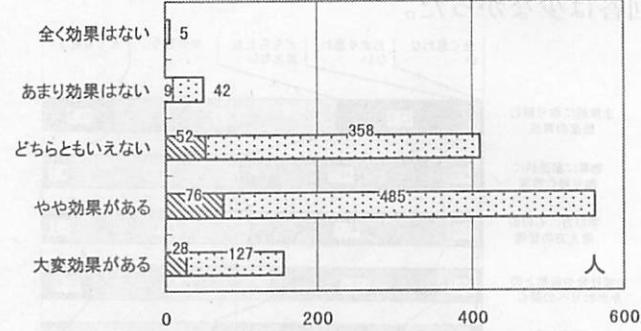
□授業で実際に活用している □まだ授業では活用していない

図12 情報選択能力を高める



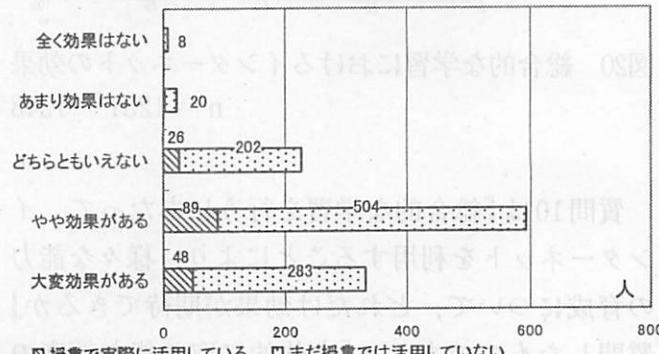
□授業で実際に活用している □まだ授業では活用していない

図13 情報処理・分析能力を高める



□授業で実際に活用している □まだ授業では活用していない

図14 表現能力を高める



□授業で実際に活用している □まだ授業では活用していない

図15 社会的な視野を広める

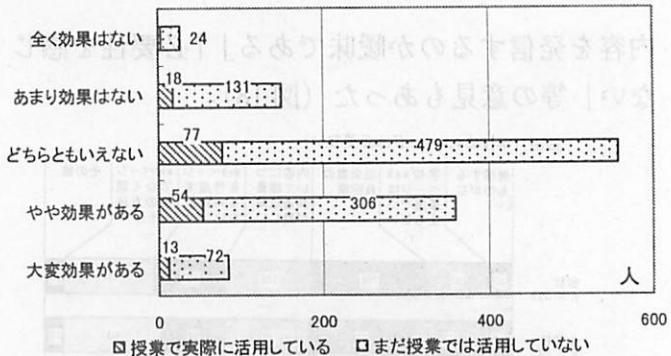


図16 コミュニケーション能力を高める

## (2) 学校におけるwebページの必要性とその内容について

質問6～8は、『学校におけるwebページの開設に対する意識』を聞いたものである。webページの必要性を認めているのは、全回答数の約60%にあたる。webページに掲載したい内容の内訳としては、「学校紹介」や「児童生徒の学習活動の様子」「児童会・生徒会の活動内容」などが主なものである。「学校便りや学年便りの内容」や「地域への連絡」を掲載する必要性を感じている割合はまだ低い(図17)。

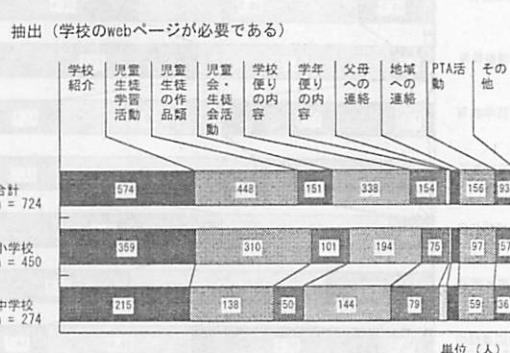


図17 webページに乗せたい内容について(3つ以内で選択)

一方、webページの必要性を認めていない回答者の中では「担当者の負担増や職員間の共通理解の難しさ」を挙げている回答が多く、特に中学校では回答者の48%が選択している。現状ではwebページによらず、従来の方法でも十分対応できていることを理由とする回答も見られた。その他、「児童のプライバシーの問題」「誰に対してどんな

内容を発信するのか曖昧である」「必要性を感じない」等の意見もあった(図18)。

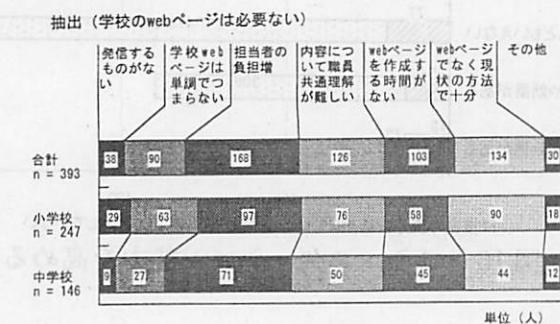


図18 webページ不必要理由 (2つ選択)

### (3) 総合的な学習の時間におけるインターネットの位置付け

今期教育改革の重点事項である「生きる力」は、社会生活を通して人が主体的に物事に参加・行動し、目的を遂行したり、課題の解決に取り組んだりしているときに発揮される力であるとされる。

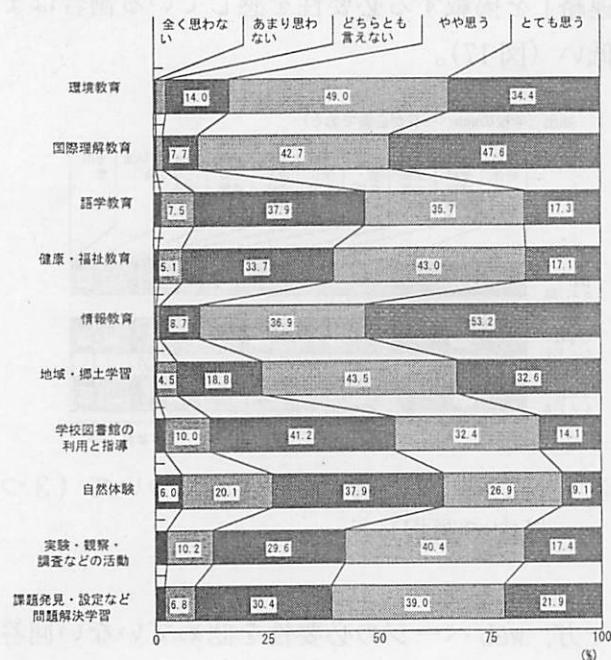


図19 総合的な学習で取り入れたい内容  
n = 1240 ~ 1244

子どもたちが課題解決にあたる場面では、情報を収集・選択したり、自分なりに表現・発信でき

る能力が重視されてくる。様々な場面で、子どもたちは自らの学びで得た知力を総合的な力として発揮していくことが求められている。

このような趣旨から、情報活用能力を生かした総合的な学習の時間の展開は、「生きる力」を育成していく上での一つの課題であり、その中でインターネットは学習を支える主要な道具となる。

質問9は『総合的な学習をこれから行うにあたって、インターネットを取り入れるとしたらどんな内容が適切か』について質問したものである。小・中学校で全く同じような傾向が見られ、「情報教育」「環境教育」「国際理解教育」等で利用が可能であるという回答が多い。中学校英語で活用される事例も昨今数多く報告されているが、今回の調査では、「語学教育」についてはやや消極的な傾向が見られた(図19)。

「学校図書館の利用と指導」にあたっては、図書館からの情報、及び著者や出版社からの情報をインターネットで得ることについて有効であると一般的に言われているが、活用したいと考えている回答は少なかった。

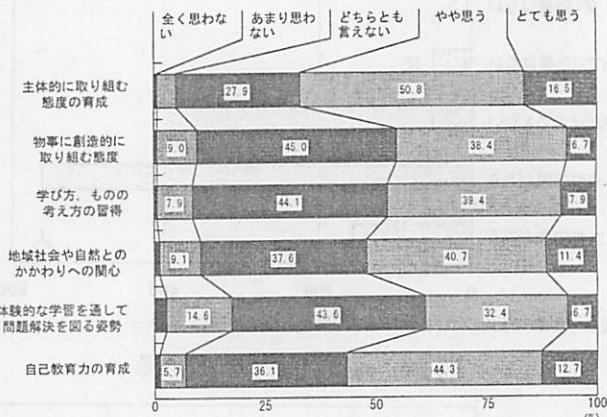


図20 総合的な学習におけるインターネットの効果  
n = 1231 ~ 1243

質問10は『総合的な学習を行うにあたって、インターネットを利用することにより、様々な能力の育成について、どれだけ効果が期待できるか』質問したものである。「主体的に取り組む態度の育成」においては、インターネットの効果が期待

できるという回答が約67%を占めている。しかし、それ以外の項目ではインターネットが効果的であると考えている回答は、おおむね50%を割っている(図20)。総合的な学習の時間の実施にあたっては、自然体験や社会体験、問題解決的な活動などを取り入れていくよう配慮することが重要である。しかし、インターネットそのものが仮想のものであり、総合的な学習の時間の趣旨と合致しないと考えていることが推測できる。

#### (4) インターネットのもつ課題について

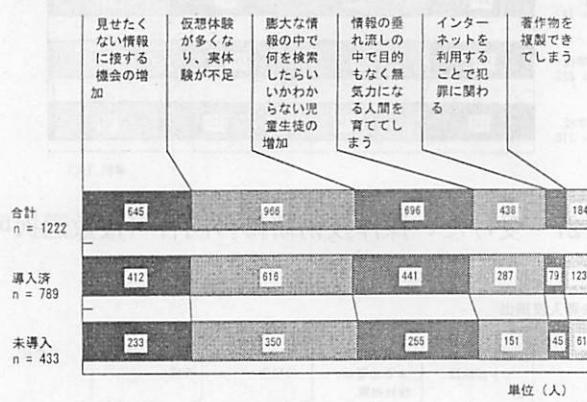


図21 指導者として不安に思うこと(3つ以内で選択)

質問11は、『インターネットを利用していくにあたり、教師が不安に思っていること』を質問したものである(図21)。マスコミ等でも毎日のように情報の光と影ということが話題にあがっているが、回答の結果は、校種並びに導入校、未導入校による差異は認められず、インターネット利用に当たっての不安については、おおむね同じような結果となっている。なお、不安については、「仮想体験が増え、実体験が不足」し、また「膨大な情報の渦の中で何を見つけたらいいのか分からなくなってしまう」を挙げられている教師が多い。

「見せたくない画像などに触れてしまう機会が増える」ことについて憂慮はしているものの、「インターネットを利用することで犯罪などに巻き込まれてしまう」ことについては、不安に思っているという回答は少ない。

#### (5) 情報教育推進のための校内体制と研修について

質問13～14は、『職員会議や授業などでインターネットが話題にあがっているかどうか』について質問したものである。導入済みの学校では、小・中ともに「授業に取り入れていくこと」や、「校内で研修を企画していくこと」が話題になっていることが分かる(図22)。これに対して未導入校では、特に小学校で「校外での研修会参加」を選択している割合が、導入校よりも増加している(図23)。

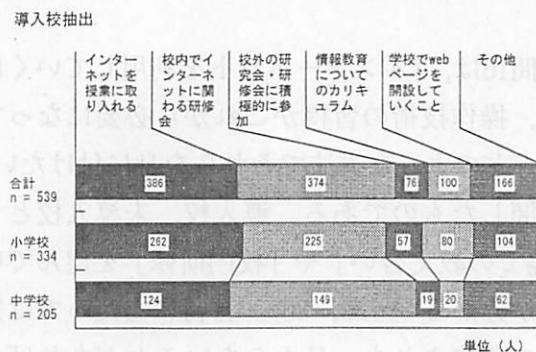


図22 インターネットについての話題(複数回答可)

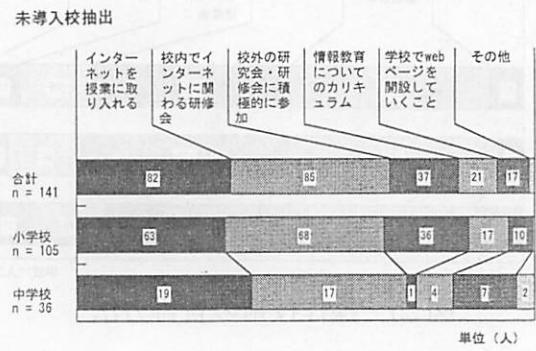


図23 インターネットについての話題(複数回答可)

質問15では、『これからインターネットを活用するに当たって、校内で計画して欲しいこと』を質問したものである。小・中学校ともに「インターネットを活用するための研修会の企画」「実践事例の紹介」「利用状況や問題点の説明」の研修を希望する回答が多い。実際にインターネットを活用をした授業研究を行ったり、積極的に授業設計の

中に取り入れたりしているという学校はまだ少ない(図24)。

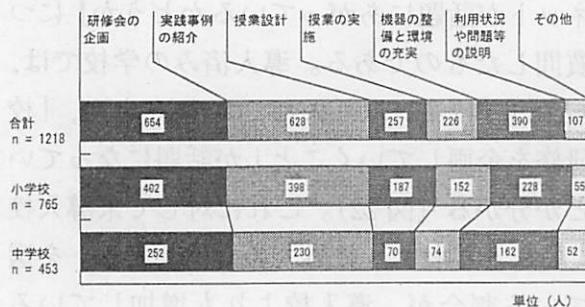


図24 校内で計画して欲しいこと(2つ選択)

質問16は、『インターネットを利用していくにあたり、操作技術の習得がこれから必要になってくるが、どのような方法でそれらを身に付けたいか』を質問したものである。導入校、未導入校ともに「職場での教え合い」や「校内研修」を望んでいることが分かる(図25, 26)。習得にあたっては短期間での研修よりも、分からぬことがあればその

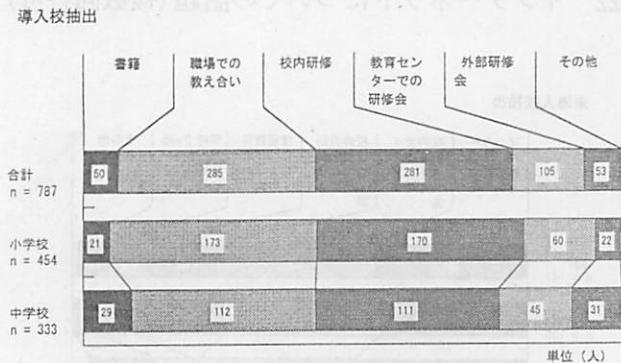


図25 操作技術の習得方法

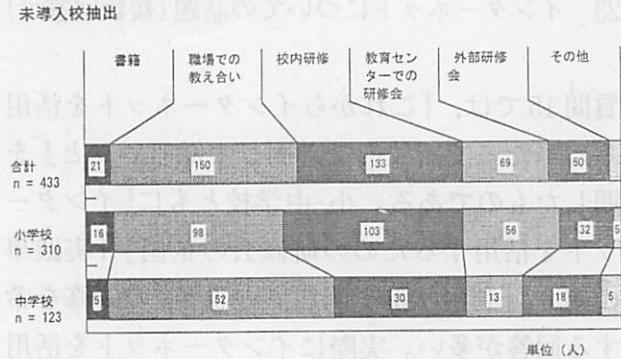


図26 操作技術の習得方法

都度聞いて覚えられる研修の方を望んでいる。

質問17は、『操作技術の研修では、具体的にどのような内容を望んでいるか』について質問したものである。特に「webページによる必要な情報の検索」「電子メールの使い方」を望む回答が多い(図27, 28)。導入の有無、校種の違いでは、特に顕著な差異は認められない。

導入校抽出

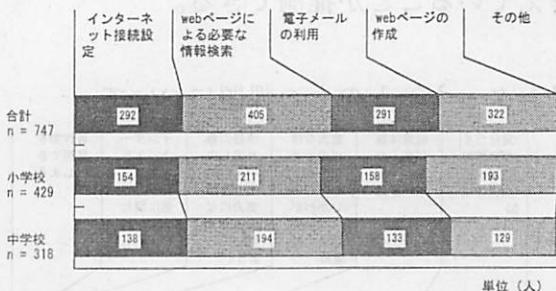


図27 受けたい操作技術研修の内容(複数選択可)

未導入校抽出

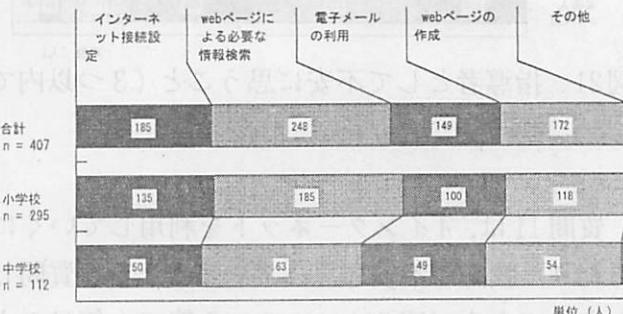


図28 受けたい操作技術研修の内容(複数選択可)

抽出(授業で活用している教師)

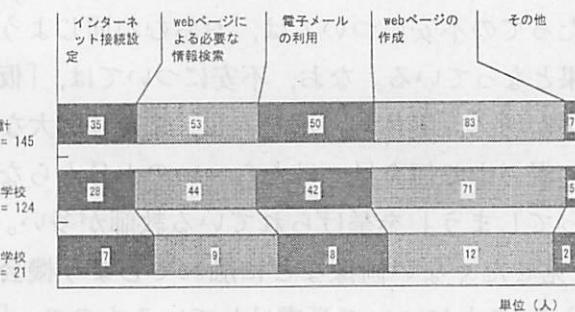


図29 授業で活用している教師が望む操作技術研修の内容(複数選択可)

これに対して、既に授業で活用している教師のみを抽出してみると、情報検索の技術にとどまらず、小・中ともに「webページの作成の研修」を望んでいる割合が増えていることが分かる（図29）。

質問18は、『校内でインターネットを推進していくときに障害になることは何か』を、研究主任に質問したものである。研究主任が推進上の障害になっていると感じている内訳は、「インターネットを利用することに疑問視する教師が多く共通理解が得られない」ことや、「その必要性を感じていない教師が多い」ことを挙げている。現在コンピュータ整備後4年目を迎える学校では、「機種の古さやシステムの不整備」を挙げているものが多い。

ただ、「指導できる教師が少ない」「学習指導の計画ができていない」ことは、インターネットの活用を推進していく上での障害になるとはとらえていないことが分かる（図30）。

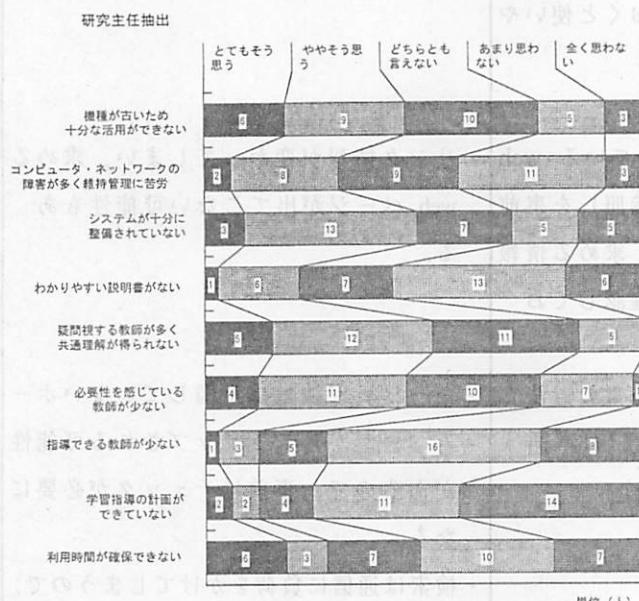


図30 校内におけるインターネット推進上の問題  
n = 33

質問4において『webページによる情報の発信』について質問した内容を、役職別にクロス集計して分析してみると（図31）、管理職や教務主任、研

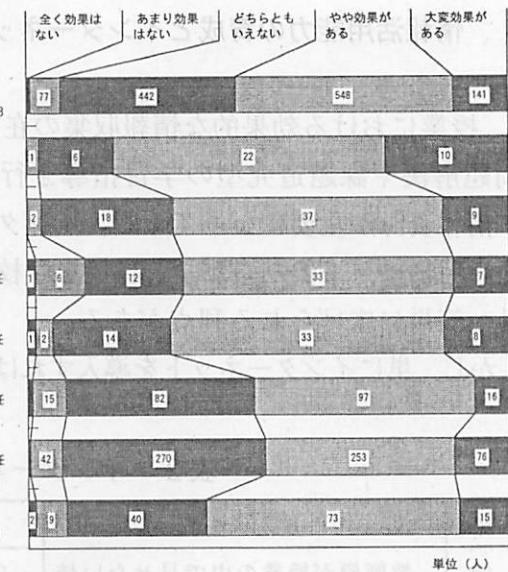


図31 webページ発進についての役職別の考え方

究主任についてはその効果を認めている割合が高いものの、学年主任や学級担任になると、その効果についてよく分からないと回答している割合が増えている。

このようにwebページに対する考え方は、役職別で多少異なっている傾向が表れているが、それでも全く効果がないと意識しているものは少なかった。

### III インターネットを利用した教育に対する提案

これまでに見てきたアンケート調査の結果から、インターネット活用に対する教師の意識は高く、様々な教科・領域において利用効果に対する期待感が大きいということが明らかになった。しかし一方で、授業で実際に利用される割合はまだ低く、その必要性を感じていない教師も多いのである。

そこで、今後インターネットを授業で活用していくにあたって、配慮していくべき点について述べ、既に実践により効果を上げている学校の例を示しながら、提案したい。

## ■1 情報活用能力の育成とインターネット

### (1) 授業における効果的な情報収集の在り方

問題解決や課題追究型の学習指導を行う場合は、情報資源が重要になってくる。インターネットの活用には、子供たちが学習環境を学校から学校外へ簡単に広げられる利点がある。

しかし、単にインターネットを導入すれば学習が

変わるものではない。学習を変えていくためには、子供の学びを変えていくという明確な視点が必要である。インターネットはとかく情報収集能力の拡大だけが強調されるが、収集した情報を分析しながら読み進めていく力が身に付いてなければ、入手した情報は生きてはたらく情報とは成り得ない。

調査の結果からも、多くの教師はインターネットにより児童生徒の情報収集能力は高められるが、

表2 インターネットによる情報収集の方法と支援

段階	方法	支援	備考
低 中 小 学 校	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師側が授業の中で見せたい情報をあらかじめサーバー機に保存しておき、インターネットに接続しないで情報閲覧をさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>必要な web ページにあるデータを自動で保存できるソフトを使用し、分類しておく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童が閲覧する web ページをあらかじめ決めておくことにより、見せたくない情報が出てくることを最小限に抑えることができる。</li> <li>データの量が多くなっていくので、定期的に入れ替えが必要になる。</li> </ul>
高	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師の用意した授業で使いたいリンク情報を、事前に子機の web ページ閲覧ソフトのブックマーク等に保存しておき、その範囲内で情報を閲覧させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ブックマークは複数作成できるので、学年や教科に分けて登録しておくと使いやすい。</li> </ul>	
中 学 校	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の学習用に作成された授業に役立つ web ページ集から情報を選択して調べ学習をさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リンク集をもっている web ページ（下記参照）を事前に探しておき、求める情報が得られるか確認しておく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リンク情報が変わってしまい、求める web ページが出てこない可能性もある。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>検索サーチエンジン（下記参照）を使ってグループもしくは個人で情報検索をさせる。</li> <li>検索でヒットした情報の質について、しっかり判断できるようにさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>事前に正しい検索の方法を指導しておく。（日本語入力の方法を含む）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>キーワード検索は意図していないホームページがリストアップされる可能性があるので、事前にチェックが必要になる。</li> <li>検索は通信に負荷をかけてしまうので、なるべく少ない台数で行うのが望ましい。</li> </ul>

#### ※子ども用検索エンジンの主なもの

こねっと goo [http://www.goo.wnn.or.jp/index\\_k.html](http://www.goo.wnn.or.jp/index_k.html)  
yahoo キッズ <http://kids.yahoo.co.jp/index.html>

#### ※授業に役立つリンク集を持っている web ページ

日本教育工学振興会 <http://www.japet.or.jp/urldb/urldb.htm>  
(財) 高度映像情報センター <http://www.avcc.or.jp/papyrus/index.html>  
こねっとワールド <http://www.wnn.or.jp/wnn-s/tosyokan/index.html>

それがそのまま情報の選択能力や情報を整理・分析する能力にはつながっていないと考えている。

そこで、得られた情報に対して、それらの信ぴょう性、有効性を判断して活用していくような、段階的指導が必要になってくる。

#### ○提案「情報収集・検索について」

小学校段階では、情報収集について基本的に教師の用意した範囲内で収集させるのが望ましいといえる。教師によってある程度精選された情報を与えることにより、見せたくない情報などに触れてしまう機会を大幅に減らすことができる。

一方中学校の段階では、正しい検索の仕方を教え、自分が求める正しい情報をきちんと探し出して、その中から選択できるような指導が必要になる(P.68表2)。

主体的な学習を促しつつ、情報収集能力の育成を目指した事例として、将監東中学校の実践事例を紹介する(卷末資料1)。ここでは実際に検索エンジンを使用させているが、日本語入力の不得手な生徒のために、情報源にリンクできるwebページを前もって教師の方で準備して授業に臨んでいる。

#### (2) インターネットを使った情報発信について

調査結果から、webページ検索の効果や共同学習・交流学習がもたらす効果については多くの教師が認めているが、実際に児童生徒が電子メールや電子掲示板を使うことから得られる教育的効果については、消極的な考え方であることが分かった。

インターネットに代表される情報通信ネットワークの活用は、学校という一つの枠を超えて、さまざまな学校や地域との情報交流を可能にし、学校がそれらとの連携のもとで教育活動を展開することを可能にする。児童生徒は、インターネットによって自分たちと異なる社会や文化に触れながら、自分自身の学びを広げていくことができるようになる。

このように、情報化時代に求められる能力と

は、自分自身で問題を解決していく力だけではなく、他者とともに「学びあう」共同の関係を開拓できる力である。

共同学習によるコミュニケーション能力の育成は、教育の今日的課題であり、あくまでもその一つの手段として、インターネットを利用した教育活動を行うことで、これらの能力向上に迫ることができると言える。

他校と交流を行いながら総合的な学習の時間を展開した事例として、東六番丁小学校の実践を紹介する(卷末資料2)。

東六番丁小学校では、ビオトープや環境について調べたことをwebページにまとめ、環境に対する思いや願いを音楽で表現し、他校との交流を通して、コミュニケーション能力の伸長を図っている。

#### (3) webページによる情報発信

学校のwebページは必要であるという回答からその内訳を見ると、学校外や地域の人々に向けての情報発信の有効性を感じている割合は、まだ少なかった。

開かれた学校づくりを考えるときに、一人一人の子どもの要求に応えることができるようになると同様、家庭や地域社会に対しても、学校は開かれた存在として柔軟に対応できるものでなければならない。そのためには、一方通行ではなく、双方向で情報の共有と交換が行える環境づくりが大切な課題となってくる。webページはあくまでもその一つの方法として、校内だけでなく、地域やたくさんの人々に向けて学校の情報を発信する際の有効な手段となりうるのである。

地域に開かれた学校を目指し、学校のwebページで情報発信をしている事例として、南光台東小学校の実践例を紹介する(卷末資料3)。

南光台東小学校では、学校の「今」をリアルタイムでwebページから発信し、地域の方々に学校の活動を知ってもらうと同時に、「おたよりコー

ナー」により、地域の方々からの様々なご意見を吸い上げられる双方向のコミュニケーションの場を構築している。webページは児童の学習と結びつけるものであるという考え方から、学習の成果を継続的にwebページ上に掲載し、いつでも児童が開き、振り返り活動ができるように工夫している。

#### (4) 総合的な学習の時間におけるインターネットの活用について

総合的な学習の時間の実施にあたり、多くの教師がインターネットの有効性に期待していることが分かった。

中教審第一次答申では、「生きる力」を支える一つの柱として、「自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力」を挙げている。これはまさに情報教育で養成できる能力であり、その展開の際には、インターネットなどの情報通信ネットワークが、子どもの学習を支え、「生きる力」を育む上で大きな力となることが予想される。

総合的な学習の時間で効果的にインターネットを活用していくためには、体験重視のカリキュラムを構成し、自然や社会等の生活に密着した場の中から必要な情報を入手したり、自分たちの学習の成果を発信したりしていくような活動を考慮していくべきである。

## ■2 望ましい情報教育推進に向けて

### (1) インターネット活用上の問題

調査結果(質問11)から、以下の①～③に対する不安が情報教育推進の障害となっていることが分かる。そこで次のような対応を考えたい。

#### ① 仮想体験の増加による実体験の不足

コンピュータはあくまでも仮想体験である。学習活動のはじめに具体的な作業をしたり、実際に体験させたりすることが必要になる。その過程で、コンピュータを補充・深化・発展のための道具として利用することが望ましい。また、実体験

との比較対象の素材として差異を考えたり、実体験につなげるために利用したりするなど、インターネットのメディアとしての特性と必要性を、教師があらかじめ授業設計の段階で十分検討し実践する。

#### ② 好ましくない情報への配慮

管理者による、児童生徒の発達段階に応じた情報のフィルタリングは必要である。小学校の段階では、情報の影の部分について、極力教師の方で排除するような設定が必要であり、影の影響やそれらへの対処法を明示的に指導していく中で、徐々に児童生徒の主体性に委ねていくことが望ましい。一方で学校でのメディアリテラシー教育を推進し、情報及び危機管理の必要性を保護者へ啓発していくことも肝要である。また、調査結果では不安として挙げられることの少なかった「著作権の意識」や「犯罪との関わり」についても、今後新たな問題となる可能性も大きいので、児童生徒が被害者のみならず加害者になってしまうことのないよう、十分考慮していただきたい。

情報の真偽にかかわることや、情報モラル・マナーについては、具体的な場面が発生した時には、それらを見過ごすことなく、繰り返し触れていくことが重要である。

#### ③ 問題解決的な学習における情報教育支援

意識調査全体から、インターネットのもつ潜在的な教育的効果は、多くが認めるところである。そこで、問題解決的な学習を踏まえたインターネット活用の在り方を、P.71表3のように提案したい。

### (2) インターネット活用についての校内体制や研修の在り方

調査結果(質問13, 15)から、校内でインターネットの話題を取り上げたり、インターネットに関する研修に参加したりすることについては、意欲的であることが分かる。これは、当センターのインターネット入門研修会や夜間研修への受講者数の多さにも表れている。

表3 インターネットを活用した問題解決的な学習の展開例

過程	学習活動	メディア利用 ※インターネット	支援
つかむ	<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な事実や体験に基づいて、学習問題をつくる。</li> <li>学習問題に対して予想する。</li> <li>学習問題解決のための計画を立てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>TV, VTR</li> <li>資料集</li> <li>※ web ページからの情報の提示</li> <li>KJ 法、イメージマップ等の利用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>調べる目的をより具体化し、明確に活動へ意識づけられるようにする。</li> <li>どこを調査（検索）すれば、最良の情報が得られるか、その分類や保存法も含めて十分に事前指導する。</li> </ul>
調べる	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習問題に対して様々な方法や手段で調べる</li> <li>調べた内容について話し合い、考えを深める。</li> <li>わかったことをまとめ、表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>見学、観察、図書資料、聞き取り、体験的活動、作業的活動</li> <li>※ web ページ検索による情報収集</li> <li>※電子メールによる聞き取り</li> <li>図表、新聞、紙芝居、絵、劇化、ペーパーサート、視聴覚機器を使ったまとめ</li> <li>※コンピュータによる表現</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>得られた情報から最も有効なものを見出し、分析や統合できる能力を日常的に育てる。</li> <li>課題・問題解決学習の全体を見通し、さらに調査（検索）が必要か、それらを追究できる判断力を養わせる。</li> <li>データを web ページ形式に変換する。</li> </ul>
まとめる	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題解決の成果を発表し合う。</li> <li>分かったことや疑問に思ったことをまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>OHP 等の視聴覚機器</li> <li>模造紙等による表現</li> <li>※コンピュータ（web ページ）による発表</li> <li>※インターネットによる情報発信、他校との交流活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査結果の報告を通じ、効果的な発表の項目と内容、方法等を学ばせる。</li> </ul>

しかし、どのような研修を望んでいるかについては、「研修会の企画」そのものや「実践事例の紹介」が多い。その原因としては、授業でのインターネットの活用が進んでいないことが挙げられる。そこには、インターネットで何ができるのか模索している教師の姿が見えてくる。そこで、校内研修の方向づけとして次のような提案をしたい。

- ①インターネットの教育的効果を啓発し、積極的に活用しようとする校内の雰囲気をつくる。
- ②単なる機器操作だけではなく、教育活動と結びつく内容のある研修会を開催する。
- ③インターネットの活用を推進している教師が積極的に授業を行い、輪を広げる努力をする。
- ④誰でもが授業に活用できる支援体制（授業設

計を中心に機器利用の環境整備も含めたもの)をつくる。

⑤技術的な担当者を校務分掌に位置付ける。  
(複数が望ましい)

⑥インターネットの有効利用には時間がかかることを十分に認識し、共通理解を図る。

⑦保護者や地域の方への理解を求める努力をする。(学校webページの公開や社会学級でのインターネット開設講座など)

インターネットの活用を推進する研修内容を実践した連坊小路小学校の事例を紹介する(巻末資料4)。

連坊小路小学校では、コンピュータ利用の際の手引き書を全職員に配布し、その中で学年に応じた授業設計の紹介を行っている。さらに新しい情報については、隨時「コンピュータ室通信」として伝えていくなど、校内でインターネットを利用した学習を推進していくために、様々な試みを行っている。

### (3) 推進上の諸問題

研究主任への調査結果では、下の①～④が推進上の主な問題になっていると考えられる。

①「インターネットの利用を疑問視し、共通理解が得られない」ことについて

インターネットは多種多様な情報(マルチメディア)の双方向性をもち、共同・交流学習や遠隔学習も可能にする。しかし、その媒体であるコンピュータは扱いにくい機器である。またインターネットには情報の影の部分が内在し、教育上多くの不安もかかえている。

以上のことからインターネットが決して安易に利用できる教育メディアでないことを踏まえると同時に、授業設計が最も重要であることを、校内研修等の場で再認識する必要がある。

②「インターネットの必要性を感じていないと」ことについて

多く教師は、これまで学習指導(活動)において

多様なメディアを様々な方法で扱ってきた。インターネットを利用するには、インターネットの特性を知り、コンピュータ(ソフトを含む)を使いこなさなければならない。そのため、新たな負担を負うことやインターネットへの理解不足から活用する切実感がないと思われる。

しかし、どのようなメディアを使う場合でも、その準備や教材研究には労力を要する。インターネットを正しく使うことにより、児童生徒の学習効果が上がり、教材としての広がりが出てくることをアピールしていくことが大切である。

#### ③「機器やシステムの未整備」について

現段階では、インターネットを利用する教育環境の整備は、通信速度の遅さなどから十分であるとは言い難い。しかし、インターネットの活用で最も重要なことは、与えられた環境での有効な活用法を試みることであろう。インターネットを使うための授業(目的として利用する)ではなく、授業のためのインターネット活用法(手段として利用する)を模索したい。

#### ④「webページでの情報発信への疑問視」について

調査結果では、学年主任や学級担任では効果がよく分からぬという傾向が見られ、逆に年齢的に高い役職ほどその教育的効果を認めているという結果が表れた。これは質問6～8に見られるように、webページ担当者の負担やwebページそのものの必要性、児童生徒の個人情報やそのセキュリティを考慮した結果だと考えられる。

しかし、国際化・情報化社会への対応、情報公開への整備、保護者や地域との連携が必要となってきた昨今の状況から、学校・学年・学級での児童生徒の様々な活動をリアルタイムに公開することは、今後ますます要求されてくるに違いない。webページでの情報公開はそう長い時間を経ずして、不可欠なものになるであろう。今後各学校でのwebページによる情報発信が望まれるところである。

## IV おわりに

### ■1 研究の反省

今年度は、本市におけるコンピュータ導入及びインターネット接続実施の最終年度に当たるが、アンケート調査を実施してみると、予想以上に授業におけるインターネットの利用率が低いことが分かった。各調査の結果から、まだ実際に授業では活用していないが、その効果は期待できるのではないかという予想のもとで回答されたと判断できる。

授業で活用していくためのハードルとなる部分は、今回の調査で明らかになったので、具体的な事例を示しながら、今後も一層の利用促進を図つていかなければならぬであろう。

### ■2 今後の課題

#### (1) 総合的な学習の時間におけるインターネットの展開について

総合的な学習の時間におけるインターネットや情報教育の扱いについては、各調査項目からの関連を多面的な視点から分析し、深く追究するまでには至らなかった。

今後、情報活用能力を生かした展開という観点から、どのように学習内容を構成していくのか、それについて具体的に検討していく必要を感じる。

#### (2) 系統的・体系的なカリキュラム作成について

授業でwebページの検索により情報収集をさせるケースが増えてきているが、検索一つを取り上げてみても、実は検索の方法を教え、その中から正しい情報の選択の仕方を指導していかなければ、児童生徒の情報活用能力が身に付いたとはいえないだろう。

情報活用能力の育成にあたっては、「生きる力」との関連性、発達段階や各教科との連携に留意しながら、指導していく必要がある。そのためにも情報教育の系統的・体系的なカリキュラム編成が急がれるところである。

### (3) 情報のモラルについて

インターネットの利用がこれからも進む中で、子どもたちの人権や情報のモラルにかかる留意事項を定めておく必要性が出てきている。具体的にはwebページを作成する場合や電子メール等を利用する際のガイドラインを作成していく必要がある。また、今までどちらかというと情報の影の部分を排除していくという傾向であったが、これからはむしろ子どもが知らず知らずのうちに加害者になってしまうケースも出てくることが予想される。そのためにも学校教育全般において、情報モラルの育成ということが課題になってくるだろう。

### ●参考文献

- 山極 隆 編『情報教育の考え方・進め方』  
教育開発研究所 1997
- 文部省 編『情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて（調査研究協力者会議最終報告）』  
1998
- 内閣バーチャル・エージェンシー『教育の情報化プロジェクト』  
1999

### ●委嘱研究委員

東北大学教授	静谷 啓樹
仙台市立東六番丁小学校教諭	青木 茂
仙台市立連坊小路小学校教諭	菅原 一栄
仙台市立黒松小学校教諭	清野いずみ
仙台市立第一中学校教諭	岩槻 淳
仙台市立将監東中学校教諭	大谷 徹
仙台市立寺岡中学校教諭	佐藤 修子

### ●担当

#### 仙台市教育センター

主任指導主事	梶川 藤雄
指導主事	成田 忠雄
指導主事	水池 立彦
指導主事	相澤 成信

### 【実践事例 1】インターネットによる情報収集活動を授業に位置付けた試み

#### インターネットを活用した情報収集活動

仙台市立将監東中学校

##### 1 はじめに

本校は、平成10年度に教育用コンピュータの更新がなされ、インターネットへの接続が可能となった。

しかし、インターネット利用に関する校内体制づくりがまだ不十分であることや、インターネット活用学習の経験を持つ教職員が少ないなどの実態から、整備された機器を学習活動に有効利用するには至っていなかった。

本年度はこのような実情を踏まえて、仙台市教育センターより講師を派遣していただき、職員を対象にした実技研修会を実施するとともに、インターネット活用授業への関心を深めることをねらいとして授業研究を行った。

##### 2 授業研究について

###### (1) 授業のねらいと配慮したこと

この授業は、進路学習の一環として実施する「職場見学」の事前学習として「職業調べ」を行つたものである。従来の副読本や図書資料の活用に加えて、インターネットによる情報収集活動を取り入れることで、生徒の学習意欲を喚起するとともに、学習をより深めることができるのでないか、というねらいで実践した。

授業にあたっては、システムの起動や終了方法、検索文字の入力、ブラウザの操作方法などでつまずく生徒も予想されたので、基本操作を習得するための事前学習の時間を設けた。また、各々の生徒には、学習カードを事前に配布し、自分の目当てとする職業、ならびにその職業について特に調べてみたい事柄を記入させることで、学習目標の意識化を図った。

###### (2) 授業を実践してみて

生徒を対象に実施した授業後のアンケート結果からは、

- ・「とても集中して積極的に取り組めた」
- ・「自分で調べるのはとてもおもしろい」
- ・「写真や絵があり、調べた職業に対する興味が深まった」

など、全般的にインターネット活用学習を歓迎する感想が多く得られた。

また、授業を参観した先生方からは「図書を利用するより早く調べることのできる利便性を実感した」「調査活動に発展性が見込まれる」「情報に喜んで向かう姿に主体性が感じられた」などの好評を得た反面、「様々な情報の中から課題意識を失わずに必要な情報を探し出すことは難しいと感じた」「効果的に活用させるためには機器操作などの訓練が必要」との指摘も受けた。

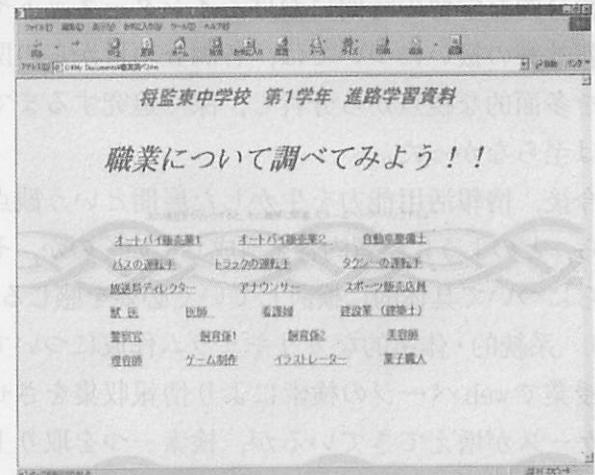
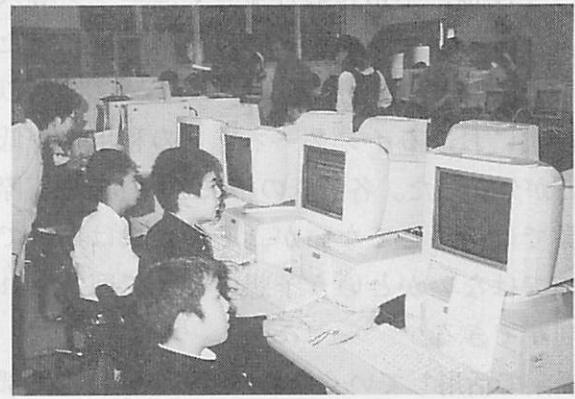
なお、今回の授業では、情報検索の際に日本語入力がうまく行えない生徒への配慮として、マウス操作のみで情報源にリンクするページを前もって準備してみた。これは、特にコンピュータの使用経験が浅い生徒を対象にする授業では有効な方法ではないかと感じている。

1時間という限られた時間の中では、必要な情報源にうまくたどり着くことができなかつた生徒も見られたが、ほとんどの生徒が最後まで集中しながら課題に取り組むなど、意欲的な面が目立つた。

##### 3 今後に向けて

本校においては従来、技術・家庭科のみで使われていたコンピュータ室であったが、この授業研究の後には社会科の授業での積極的な活用が見られるようになり、資料収集・調べ学習などでインターネットは威力を發揮している。活用していく上での課題も多いが、現段階では「とにかく使ってみる」ことが大切と考える。

今年の実践を足がかりに、総合的な学習も視野に入れながら、更に活用の機会を広めていきたい。



## 【実践事例 2】音楽をもとに交流学習し、メディア活用を図る試み

## メディアを生かした総合的な学習の時間 仙台市立東六番丁小学校

## 1 はじめに

本校のコンピュータ活用で大切にしているのは「心と心をむすぶ」ということである。LAN やネットワークを使って物理的につなぎ合うことはもちろんあるが、活動している児童同士が、その意識を互いに高め合えるような活動を目当てに授業構成し、全体の計画を具現化し、学年毎の実践を進めてきている。

## 2 総合的な学習の時間を構成するにあたって（6学年の実践を例に）

ビオトープを通じた環境学習を音楽活動と関連させ、総合的な学習とした試みである。ビオトープや環境について調べたことをwebページでまとめたり、環境に対する願いや思いを作曲ソフトで表現したり、電子メールやテレビ電話会議システムで別の学校の仲間と交流したりする実践を行った。

## (1) アプローチ型学習の導入

本校では、活動の目標（ゴール）に向けて多様な迫り方を行うことを「アプローチ型学習」として、児童と教師集団で内容の設定を行っている。自分なりの学習活動を十分に行いながら、別のアプローチをする仲間とも協調して学習の共有を行うことで、目標に向かっていく姿が見られ、意欲向上や活動の継続において成果を期待できる。教師が教えるのではなく新しい手法を取り入れることで、環境学習と音楽学習を縦糸と横糸に、新しい総合的な学習の時間を創造できることを期待する。

## ○単元全体構想

1 h	<合唱アプローチ>	<合奏アプローチ>	<メディアアプローチ>	<土笛アプローチ>
共生・太陽・水木・土古代 オリエンテーション「ビオトープへの思いを語り合おう」				
2 h	詩を味わい感じたことを 発表しよう 「語りかけよう」	太陽のイメージを話し合 い体でリズムを感じよう。	木や水をイメージしてふ しを楽しく味わおう 「この木何の木」	古代時代の楽器を想像し 土笛の仕組みを知ろう。
3 h	楽曲のイメージから演奏 譜を作ろう。	リズムにのって楽器の音 色を考えて演奏しよう。	木や水をイメージして ふしを楽しく味わおう 「川はだれのもの」	土器でいろいろな音色を 出してみよう。
4 h ようこそプラスワールドへ ・管楽器の音色に親しもう（体験コーナー） ・心に伝わる音の原理を知ろう。（校長先生のお話と実験）				
5 h	色々な楽器に触れイメー ジに合った楽器を選び演 奏しよう。	表現したい太陽のイメー ジをつかもう。	楽器の組み合わせを工夫 しイメージをふくらませ よう。	2拍子のリズムに合わせ て音をつなごう。
6 h	イメージに合った演奏に 近づけ音色やテンポを工 夫しよう。	自分たちの表現を作ろう。	伴奏のパターンを工夫し リズムにのって演奏しよ う。	ビオトープで自分の土笛 と合う友達の音を探し演 奏しよう。
7 h	お互いの響きや音色を聴 き合い合奏を楽しもう。	管楽器等を使って太陽の イメージに近づくよう工 夫し演奏しよう。	水に思いを寄せ表現や演 奏を工夫しコンピュータ を使い発信しよう	土笛の音程を調べ、きれ いに音を重ねよう。
8 h	お互いが響きを聴き合い よりよい演奏のために工 夫しよう。	自分たちの表現を見つめ, 心をむすんで演奏しよう。	心をむすび合って仲間と 楽しく表現し聴き合おう。	自分の思いを土笛を使っ て表現し聴き合い良さを 話し合おう
9 h	アプローチの目標 心を結び合う音楽「ビオトープの詩」を発表しよう。			

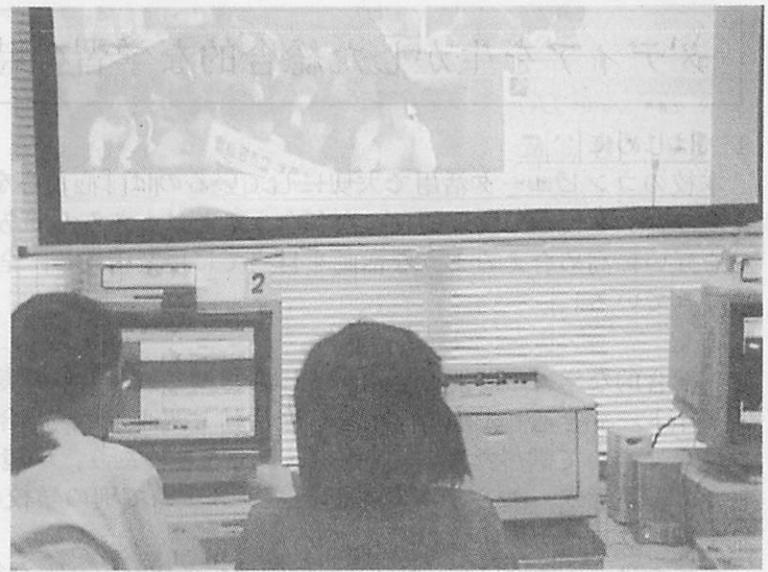
## (2) コミュニケーション能力の伸長とメディアの活用

学年毎に体系化されたメディア活用方法の習得を図ることにより、自分が活動していることを相手に伝える手段として、webページや電子メールを用い、共同学習を進めることができた。MIDIデータを相互に加工し合ったり、作曲ソフトを使うことで、楽器だけでなく効果音も含め、これまでになかった創造的な活動を行う児童も出てきた。

ある児童は、ビオトープに差し込む太陽の木漏れ日を、デジタルカメラにおさめ言葉とともにまとめたり、木の葉がこすれ合う音を「がさがさ」などといった擬音表現を用いて表現したりした。

それぞれ異なる地域にある学校間で、「私たちの愛する環境」について作曲し合ったり、互いに発表し合い、必要に応じて編曲するなど、協同で作品を仕上げていくような活動が可能になった。

インターネットやテレビ電話会議システムの導入により、このようにリアルタイムでの情報のやりとりができるようになり、互いのコミュニケーション能力を伸ばすことができた。



<TV電話会議システムによるリアルタイム交流>

<http://www2.sendai-c.ed.jp/~touroku/>

TEL 022-222-4216 FAX 022-714-6609

\*下のタイトルにマウスを近づけてください。11月2日の授業公開は2番目。交流予習は4番目

introduction 開校125年を迎えた  
私たちの学校の紹介です

event

hometown

collaboration

environmental education

information education

<学校の web ページにより発信>

東六小 ビオトープソング  
作詞・作曲 近藤健志  
編曲 萩原太郎

みんなどり ビオトープ とうろく

ビオトープ ときめき しづか

ビオトープ プー

<児童がつくったビオトープの歌>

### 3 今後の課題

- ・年間を通じた交流学習を進めるためのパートナー（交流相手の学校）と共にするテーマの設定を、調整していく必要がある
- ・活動の発端から経緯についてを、webページ上で児童の手により発信していくことを、さらに充実させていきたい。
- ・総合的な学習の成果（メディア活用能力・コミュニケーション能力等）を学校全体の活動に還元し、さらに発展させていく一連の取り組みとして位置づけていきたい。

### 【実践事例3】子どもたちのためのwebページを目指した試み

#### 地域の人々へ、webページによる情報発信 仙台市立南光台東小学校

##### 1 はじめに

本校にコンピュータが導入され授業に使用できるようになったのは平成10年4月からであるが、webページが開設されたのが、平成11年5月である。開設当初から、誰に向けての情報発信かということを職員で論議してきたが、地域の人々（児童を中心にして保護者や卒業生、学区内の人々）に向けて情報を発信していくことを決め、現在に至っている。

##### 2 本校のwebページの特色

###### (1) 開かれた学校づくりを目指して

学校のwebページは不特定多数の相手に向けて発信していく場合が多く、そのためともすると学校紹介に終始しがちで、その内容も単調でつまらなくなってしまうおそれがある。本校では「誰に向けて」ということを吟味し、「子どもたちのためのwebページ」を目指して情報発信を行っている。

学校は地域を育み、また地域が学校を支えると言われているが、開かれた学校づくりを考えるときに、それは双方で情報の共有と交換が行える環境づくりが大きな前提となってくる。本校のwebページは、地域の人々に学校の「今」を知ってもらうことが目的であり、保護者の方々や地域の方々のご意見をメールを通してwebページに反映させていくことで、みんなが参加できる学校づくりを目指している。

###### (2) 同時性、継続性と教材性

今、子どもたちは何をしているのか、今、学校ではどんなことをしているのか。これらのこと伝えいくためには、webページからリアルタイム（同時性）で情報発信していくなければならない。さらに時間を追った継続性を加味していくことを考えた。「今日学校でこんなことがあったから、見てみようかな」「あの時はどうだったかな」と思ったとき、そこに掲載されており、ふれられることは、本校のwebページのようなケースの場合、大きな意義がある。

また、子どもたちにとって、webページは学習と結びつくものであると考える。webページを見ることにより、これはどうなるのだろうかといったように、興味を喚起し、



5年生野外活動の様子をリアルタイムで掲載した例

#### 秋の草むらを探せ！！

子どもたちこの夏に育ってしまった畠の草取りをしました。  
「先生！！カマキリ！！」「どこ？！」  
いつの間にか、草取りは虫取りにかわっていました。  
そうだ！南光台東小学校にはどんな秋の虫(秋にだけいるわけではありませんが)がいるのだろう？  
子どもたちいっしょに探してみます！！

というわけで始まったこの企画ですが  
子どもたちは次々と虫を捕まえてはくるのですが  
種類の方は9月27日でばったりと…。  
まだだいぶいるとは思いますが、一応25種類でとまりそうです。  
今度は、名前調べが始まりました。  
これでもない、あれでもない、一生懸命調べる子どもたち！  
調べがついたものから、名前を掲載しますが、もしかしたら間違っているかもしれません。  
そのときは、ご一報を！！

001	002	003	004
カントク	オオカマキリ	イナゴ	グリキリギス(緑型)

学習の成果を掲載(振り返り活動にも利用可)

新しい発見に出会える場所になればと考える。

### (3) 製作の体制づくり

当初担当者1名で始めたものであったが、学習活動や行事のたびに各学年の先生方にも写真の撮影を協力してもらうことにより、製作に参加しているという意識付けができるようになってきている。今後は複数の担当で進められるようにしていきたい。

また、子どもたちがデジタルカメラにより撮影したものをwebページに掲載するという試みも行っているが、自分の撮影したものが掲載されることは、活動に対する大きな励みとなった。

### (4) 内容の吟味について

基本的に製作者に任せられているが、職員室のコンピュータでいつでも見られるようになっており、随時校長をはじめ、職員から意見をもらいながら、内容を吟味し、場合によっては手直しするようしている。

### (5) 地域との相互交流の場

webページに寄せられた保護者や地域の方々からの電子メールを、「おたよりコーナー」に掲載するようにしている。メールについては了解をもらった上で掲載しているが、掲載に当たっては個人が特定できないよう配慮している。

学校側に寄せられるこのようなメールは、お互いのつながりや一体感を深め、信頼関係を結んでいく上でも重要な意味を持っていると考える。

## 3 今後の課題

- ・すでにいくつか公開しているが、子どもたちの学習の成果の発表をさらに取り入れていきたい。
- ・子どもたちがより参加できるwebページを目指して、写真撮影を始め、簡単なツールの使い方を教え、子どもたちが製作できる部分を計画し、拡大していきたい。
- ・既に一部の地域から交流の申し込みなども届いているが、他地域との信頼関係に基づいた連携・交流（子どもたちだけではなく地域同士も含め）をwebページ上で展開していく、地域に向けた発信交流の輪を広げていきたいと考える。

※本校のwebページのアドレス <http://www2.sendai-c.ed.jp/~nts>

件名 もうすぐ学芸会ですね(1999. 10. 7) SMさんのお母さん

いつもお世話になっています。

今日 学芸会の衣装のプリントを持ってきました。

着物か浴衣かじんべい…

七五三の時の着物を引っ張り出してみると…

当然のこと小さく1年生の時に作ったゆかたなら大丈夫?と思い着せてみると胸のところがパンパンでやっぱり無理でした。

「子どもの成長は はやいなあ」と改めて感じました。

件名 サッカー新人戦の結果(1999. 10. 10) 5年 DNさん

本日 ACクレック5年生の新人戦がありまして ASKに6-1 中山に1-0で勝てました。

東小から5人出て みんな がんばりました。

こんど 23日と24日に3試合あり それに勝てば県大会に行けます。また連絡します。(がんばれ!!応援してるぞ!!)

件名 ザリガニを探ってきました(1999. 10. 13) 3年 SMさんのお母さん

連休に岩沼でザリガニを探ってきました。

図鑑を見て「あさりを食べるって」と言うのであさりを入れてみましたが まだ食べていまいようです。

「柔らかい野菜でもいいみたいだよ」と言うので 入れてみましたが 食べていません…

子どもは「警戒しているのかも…」と言っています。

「ザリガニのえさ」というのを 買ってきたので 子どもが帰ってきたら 与えるかどうか相談しようと思っています。

それにしても 力マキリ 力エル バッタ…

次から次へとつかまえてきます。

子どもって こういう生き物が好きですよね。

おたよりコーナーに寄せられたメールの一部

【実践事例 4】インターネット活用を推進するための校内研修の試み

インターネット活用を推進するために

仙台市立連坊小路小学校

1 本校のコンピュータ利用の方向

○主体的な学習の道具として

- ・自己表現（文字、画像、音などで）の道具として活用する。
- ・情報検索の道具として活用する。（インターネットの利用）
- ・情報発信の道具として活用する。（学校の web ページや校内 LAN の活用）

○学習指導の道具として

- ・教材データ提示の道具として活用する。・CAI 的授業の実践
- ・教師と児童の情報伝達、児童相互の情報交換の道具として活用する。

2 研修の指針となる各学年の目標と学習活動例

段階	めあて	学習活動例
低学年	コンピュータに触れる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マウスを使って絵や文字を書く</li> <li>・絵本や絵日記作り</li> <li>・学区内の絵地図作り</li> </ul>
中学年	コンピュータに慣れ、親しむ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キーボードを使って文字を入力する</li> <li>・調べたことをグループでまとめ発表しあう</li> <li>・音遊びや作曲をする</li> </ul>
高学年	コンピュータを主体的に操作し、利用する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵や文字、写真などを組み合わせて作品にする</li> <li>・データを表やグラフにして利用する</li> <li>・ネットワークを利用して、意見や情報の交換をする</li> </ul>
全学年	発達段階やコンピュータ操作の習熟度に応じて利用の幅を広げる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターネットを利用しての情報の収集や発信</li> <li>・CAI ソフトを活用しての学習活動</li> </ul>

3 インターネットの活用を推進する研修内容

(1) 「コンピュータの利用に当たって」を配布

コンピュータ利用の基礎になる情報を年度当初に冊子にして全職員に配布した。導入済のソフトの紹介や、学年の目標に即した授業設計の例の紹介、過去の研修会での情報などを全職員で共有することをねらった。各種のソフトの活用は、インターネット活用のための教師と児童の技能研修にもなった。

(2) 「コンピュータ室通信」の発行

最新のコンピュータに係わる情報を紹介するために「コンピュータ室通信」を活用している。

(3) 研修の成果をサポートする環境

サーバー機のハードディスクの容量を増やし、各学年の年間を見通したインターネットのリンク集の基盤を整備している。また、コンピュータ室の 20 台の児童用コンピュータが一斉に利用できる環境を整える努力を続けている。

(4) パイロットソフトの活用

毎日更新され、複雑にもなるインターネット上での情報を短時間で取り込み、リンク集を作ることによって、授業での必要感を失わず、インターネットでの「情報の影の部分」を切り取り、誰でも容易に授業に活用できるようになった。

(5) 入口は狭く

インターネットでの情報を得る入口を「連坊小路小の web ページ」にしている。入口は狭く、そこから利用が推進されればインターネットの世界は限りなく広がる。リンク集の活用によって簡単な操作だけで、児童たちは授業での活用が実現できるようになった。

4 今後の課題

- ・今後も継続して各学年のねらいが達成できるようサポートしていく必要がある。
- ・学年のリンク集の活用だけではなく、リンク集の作り方や保存の仕方の研修を通して「連坊小路小の web ページ」の活用をより一層推進していきたい。

## 資料 インターネットを利用した教育に対する意識調査質問内容

ご回答される全員の方にお聞きします。

①校種	1 小学校	2 中学校			
②性別	1 男	2 女			
③年齢	1 ~29歳	2 30~34歳	3 35~39歳	4 40~44歳	
④教職経験年数	5 5年以下	6 6~10年	7 11~20年	8 21年~	
⑤校内での役職	1 校長	2 教頭	3 教務主任	4 研究主任	
⑥学年主任	5 学年主任	6 学級担任	7 その他( )		
⑦担当教科(中学校のみお答えください)	1 国語	2 社会	3 数学	4 理科	5 英語
6 音楽	7 美術	8 技術・家庭	9 体育		
⑧あなたは個人でインターネットを利用していませんか?	1 利用している	2 利用していない			
⑨で1とお答えの方にお聞きします。	1 お聞きします。	2 お聞きしません。			
⑩個人利用の頻度は次のうちどれくらいですか。	1 ほぼ毎日	2 週に3~4回程度			
3 週に1回程度	4 月に数回程度				
・もっとも利用されるサービスは次のうちどれですか。	1 webページから情報収集	2 電子メールによる情報交換			
3 ネットニュース等による情報交換	4 その他( )				
⑪あなたは授業でインターネットを活用していますか?	1 活用している	2 活用していない			
⑫⑬で1とお答えの方にお聞きします。	1 お聞きします。	2 お聞きしません。			
⑭⑮で1とお答えの方にお聞きします。	1 活用の頻度はどの程度ですか。	2 週に1回程度			
3 月に1回程度	4 年に数回程度				
・もっとも利用されるサービスは次のうちどれですか。	1 webページから情報収集	2 電子メールによる情報交換			
3 ネットニュース等による情報交換	4 その他( )				
⑯仙台市教育委員会で作成した「インターネット利用に関する要領」をご存じですか。	1 聞んだことがある	2 知っているが読んでいない	3 知らない		

コンピュータが導入され、インターネットを利用している学校の研究主任の先生にお聞きします。

⑰あなたの学校ではwebページを開設していますか。	1 ある	2 備考中である	3 なづれ	4 いけてどうぞ	5 らい	6 れていますか。
⑱あなたの学校ではインターネットを活用しているのがありますか。	1 いる	2 これが	3 位	4 なづれ	5 らい	6 れていますか。
⑲インターネットを利用ししている人について、校内にトーナメントがある場合、その他の規約などにどうぞ	1 いる	2 これが	3 位	4 なづれ	5 らい	6 れていますか。
⑳あなたの学校では、インターネットを利用する場合、何を規定していますか。	1 ある	2 これが	3 位	4 なづれ	5 らい	6 れていますか。

【授業でのインターネットの活用】

質問1 あなたはインターネットの活用についてどのように利用したいとお考えですか。(複数回答可)

1 事前の教材を収集する	2 授業でして	3 どして	4 のように利用したいとお考えですか。
2 授業の教科書や電子書籍などを購入する	3 行う	4 とし	5 て
3 授業で情報を交換する	4 うとく	5 とし	6 て
4 授業で表現活動を行う	5 うとく	6 とし	7 て
5 授業で課題提出する	6 うとく	7 とし	8 て
6 その他( )	7 うとく	8 とし	9 て

質問2 あなたはどの教科・領域の学習にインターネットを利用すると効果があるとお考えですか。(5つ以内で選択してください)

1 国語	2 算数(数学)	3 社会	4 理科	5 英語
6 音楽	7 絵画(美術)	8 保育	9 技術	10 生活科
11 道徳	12 児童生徒会活動	13 総合的な学習	14 クラブ・部活動	
15 学校行事	16 その他( )			

質問3 質問2で回答した主な理由をお書きください。

質問4 下記の項目について、インターネットがどの程度教育的効果をもっているとお考えですか。

1 ~5の数字をお書きください	2	3
5 大変効果がある	4 やや効果がある	3 どちらともいえない
2 あまり効果はない	1 全く効果はない	

- ① webページの検索による情報収集について
- ② 学校のwebページを使つた情報収集について
- ③ 電子メールや電子掲示板を使った情報交換について
- ④ 共同学習や遠隔学習について

質問5 インターネットは、次に述べるような児童生徒の能力の向上に効果があると思われますか。

1 ~5の数字をお書きください	2	3
5 大変効果がある	4 やや効果がある	3 どちらともいえない
2 あまり効果はない	1 全く効果はない	

- ① 学習への興味を高める
- ② 学習体験を豊富にする
- ③ 情報収集を容易にする
- ④ 情報交換を容易にする
- ⑤ 情報交換を効率化する
- ⑥ 情報交換をより効率化する
- ⑦ コミュニケーション能力を高める
- ⑧ 他の、どのような児童生徒の意識や能力を育成できると考えますか。自由に記述してください。

【学校のwebページについて】

質問6 学校でwebページを開設し、広く情報発信していく必要があると思いますか。

1 必要がある	2 必要はない
---------	---------

質問7 質問6で1とお答えの方にお聞きします。学校のwebページを作る場合、どんな内容を載せたいですか。(3つ以内で選択してください)

1 学校紹介	2 児童生徒の学習活動	3 児童生徒の作品類
4 児童生徒会の活動	5 学校だよりの内容	6 学年だよりの内容
7 父母への連絡	8 地域への連絡	9 PTA活動
10 その他( )		

質問8 質問6で2と答えた方にお聞きします。その理由として近いものを2つ選んでください。

1 発信するものがない 2 校内のwebページはどれも単調でつまらない  
3 担当者の負担が増える 4 内容に対し職員の共通理解を図るものが難しい  
4 webページを作成する時間がない 6 webページではなく現状の方法で十分  
5 その他の )

【質 細 間 合 的 な 総 学 習 的 の な 時 間 入 に て お け る イ ン タ ー ネ ッ プ の 活 用 に つ い て】  
【問 題 お い て 次 の 内 容 を 実 施 す る 場 合、あ な た は 活 動 の 中 で イ ン タ ー ネ ッ プ を お 使 い ま すか。1 ～ 5 の 数 字 を お 答 び く だ さ い。】

5 どちらともいえない  
2 どちらともいえない

質問10、「総合的な学習の時間」を今後実施して行くに当たり、インターネットを活用していくことは、次のねらいを達成する上で効果があると思いますか。1~5の数字をお書きください。

5 とてもそう思う 4 ややそう思う 3 どちらともいえない

る れき け成 らで 向育 をが る 心効 育つを 成な 国 ききる関係 でがてる 事実 事を決 度度り解る 症状わ題が むむの問な 組組かてつ りりえのしに 取取考と通成 にの然を充 わ的の自習の 物物学地体自 あ成事び成駿

質問12 その他インターネットを利用する際に、不審に思うことがあれば自由にお書きください。

## 【情報教育推進のための校内体制や研修について】

質問する 13 あなたの学校では、職員会議や授業研究の際に、インターネットの活用について話題になることがありますか。 2 ない

質問 16 今後ますますインターネットを利用するためのコンピュータ操作の技能・技術の習得が必  
要になつてくるものと予想されますが、あなたは次のうちどのような方法を考えますか。下  
記の中から1つ選んでください。  
1. 中長期的な視点で学ぶ  
2. 職場での教え合い

質問17 下記の操作・技術の研修を行なう場合、あなたが参加してみたいものはどれですか。  
1 インターネット接続のための設定をする  
2 ワイペーパージルの利用  
3 メールの利用

5 その他の ( ) を作成する

質問19 その他、インターネットを活用した授業を行って、困ったことや問題になったことがあれば、自由に記述してください。

# 大 目

## 子どもの“学び”と“育ち”から見た理解の視点と支援の在り方を探る

——通常の学級で特に個別的な配慮を要する児童生徒の調査と事例を通して——

### ■要 約

本研究は、通常の学級において担任が特に「個別的な配慮を要する」ととらえている児童生徒の課題やそのかかわりについての現状を把握し、その対応についての具体的な視点・方策を探ろうとしたものである。その結果、これまでの育ちを振り返り、学びの特性を把握することの重要性が明らかになった。そして、課題の要因の理解やその学びの特性に合わせた個別の配慮をすることにより、子どもの自立を支援できることを提言としてまとめた。

### ■キーワード

学びと育ち    通常の学級での理解    個別的な配慮

自立への支援

論文等参考 ◇  
員会取組委 ◇

目次開設資料請求 ◇

## 目 次

I	はじめに .....	85
1	本研究で対象とする児童生徒 .....	85
2	子どもをとりまく現状 .....	85
3	理解と支援のための視点 .....	85
II	研究の目的 .....	85
III	研究の方法 .....	85
1	実態調査 .....	85
2	事例研究 .....	86
IV	研究の結果及び考察 .....	86
1	実態調査の結果及び考察 .....	86
2	事例研究の結果及び考察 .....	90
V	研究のまとめ .....	101
1	子どもの実態の把握 .....	101
2	課題の整理と見通し .....	102
3	今後の支援の具体策 .....	102
VI	本研究を踏まえた提言 .....	104
VII	おわりに（反省と今後の課題） .....	104
◇	参考文献	
◇	委嘱研究員	
◇	資料 実態調査質問項目 .....	105～106

## I はじめに

### ■ 1 本研究で対象とする児童生徒

子どもの成長過程には、学習、友達づくり、安心できる家庭環境、体や心の健康など、様々に変化するたくさんのハードルが待ち構えている。本来、子どもたちはそれらのハードルを自らの力で乗り越えたり回避したりしながら、学び育っていく。もちろん、そこにはそれぞれの子どもに合った個別の支援が必要であることは言うまでもない。

本研究では、こうした学びや育ちの中で、個に応じた特別の対応を、特に必要としている行動上の問題を抱えた子どもたちを取り上げる。

### ■ 2 子どもをとりまく現状

本センターの教育相談室を訪れる子どもの相談内容は、不登校、いじめ、友人とうまくかかわらない、学習についていけないなど、様々である。こうした子どもの中には、集団にうまく適応できずにパニックを起こしたり、友人とうまくコミュニケーションがとれずにトラブルを起こしたりするなどの行動上の問題を抱えている子どもが増えつつあり、社会的にも話題になってきている。

これらの子どもの担任は、休み時間や放課後を含めた多くの時間の中で、様々な個別的配慮や指導を試みている。また、指導法に関する研修を深めたり同僚に相談したりして、解決策を探ろうとしている。しかし、これまでの経験や研修を通して得た方策だけでは思うように改善できず、「十分に配慮することが難しい」と戸惑いを感じている教師も少なくない。

いじめや不登校、その他様々な学校生活への不適応の原因としては、なんらかの要因による精神面のアンバランスや自己有能感の欠如、軽度の障害等が考えられるが、担任がその原因を特定することは難しい。軽度の障害の中には、最近注目されるようになった、いわゆる学習障害 (LD) や注意欠陥・多動性障害 (ADHD) など、通常の学級で

対応を求められている子どもたちが含まれる。こうした障害に関する情報は非常に多く、教師は、今自分が担任している個別的な配慮を要する子どもの指導にとってどれが必要な情報なのか、その選択が難しくなってきていている。

### ■ 3 理解と支援のための視点

これまで学校では、こうした学校生活の課題を「問題行動」としてとらえ、表面に表れた問題に応じて「特殊教育」「生徒指導」「教育相談」等の担当者が、それぞれの視点や方法で対応してきた。しかし、表面上に表れた問題に直接的にアプローチするだけでは解決困難な事例が、確実に増えている。

こうした子どもたちに対する個別的配慮をしていく際には、ともすると表面上の問題行動の対応に追われがちになるが、問題行動の要因を探ることが大切である。その時の視点として重要視したいのが、現在の“学び”的性と、過去から現在までに至る“育ち”的性である。これらを把握し整理していくことが、行動上の問題を抱えた子どもに対する理解と支援には不可欠と考える。

## II 研究の目的

仙台市立小中学校の通常の学級における個別的な配慮を要する子どもの現状と指導上の課題を、教師へのアンケートを手掛かりに把握する。さらに、事例を通して、その理解の視点と支援の方策を、学びと育ちの特性の面から探る。

## III 研究の方法

### ■ 1 実態調査

通常の学級で担任が「個別的な配慮を要する」ととらえている子どもとその教育的対応の現状について、仙台市立小中学校全校に対し、質問紙法による実態調査を実施する。調査は課題や障害を

限定せずに行うものとし、通常の学級の担任がどのような子どもの状態を「個別的な配慮を要する」ととらえているかを把握する。

- (1) 対象 小学校低、中、高学年、中学校1、2学年 各校それぞれの担任1名ずつ
- (2) 内容 ①個別の配慮が必要と考える課題  
②課題の要因  
③個別の配慮の仕方  
④学級作りと校内配慮

## ■ 2 事例研究

調査結果や委嘱研究員からの情報等を基に事例を集め、個に応じた学びと育ちの視点からとらえ直して、その配慮や支援の在り方を探る。

## IV 研究の結果及び考察

### ■ 1 実態調査の結果及び考察

調査は平成11年8月に実施し、小学校は、低学年118名、中学年114名、高学年117名、中学校は1学年59名、2学年58名からの回答が得られた。

#### (1) 個別の配慮が必要と考える課題

図1～3(問4、6、7)は個別に配慮すべき課題についての質問である。それぞれ実態調査項目を下記のように大項目に分類し、図にまとめた。

表1 実態調査項目の分類(問4、問6、問7)

学習	・授業についていけない ・授業の妨害をする ・授業中立ち歩く ・課題にとりかかるのに時間がかかる
集中力	・集中できない
感情	・感情を爆発させる ・暴力をふるう ・気持ちの切り替えがうまくできない
友達	・いじめられている・他の子をいじめる ・友達ができない
基本的生活	・時間にルーズである ・動きがぎこちない ・机の中等整頓が苦手 ・忘れ物が多い ・喫煙等の問題
不登校等	・不登校・欠席が多い ・授業時間中に保健室等にいることが多い

図1は一般的に考えた場合、図2は自分の学級の特定の1名に限った場合の配慮すべき課題である。共通して多かったのは「授業についていけな

い」を始めとする学習に関するものであった。当初の予想としては、学年が上がるにつれて学力の差が開き、より多くの教師が学習に関するものを課題として選択するだろうと考えたが、実際にはむしろ減少傾向にあった。これは、加齢と共に学習以外の様々な面での期待が増え、それに対応させることに教師の目が向いてしまうためと考える。

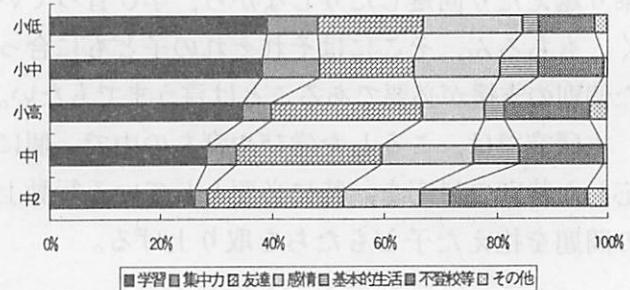


図1 一般的に配慮すべき課題(問4)

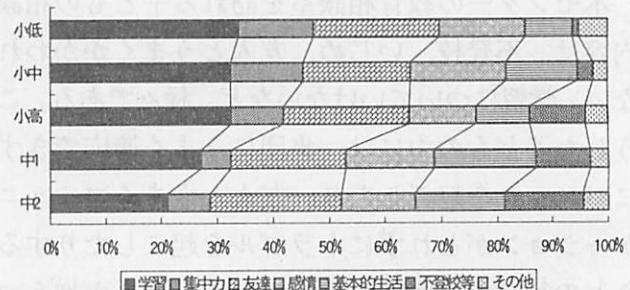


図2 個を特定した配慮課題4つ以内(問6)

図3は個を特定した場合の最も配慮すべき課題である。学年別に見ていくと、図1、図2と同様に、学習の課題が加齢と共に少くなり、不登校等が増えていく。担任としては、不登校等のように学校生活全体に参加しないことを、学力よりも大きな課題ととらえているようである。

集中力や感情に関しては、最も配慮する課題としてのとらえは小学校中学年が一番多く、その後少しづつ減少している。図1、2と合わせて考えると、これらは課題としては残るもの、より大きな課題が生じてくる結果であると推測できる。

思春期前期といわれる小学校高学年からは、友達関係の課題が増えてきている。中学校1年の配慮事項の割合は小学校高学年と比較的似た状態であるのに対し、中学校2年になると基本的生活や

不登校等が増えているのが特徴的である。これらのこととは、子どもの年齢に応じて表れる課題の変化と関連しているものと考える。

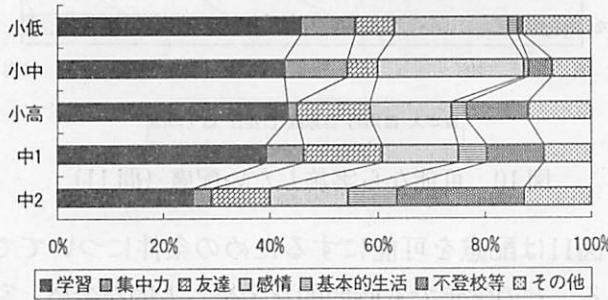


図3 最も配慮すべき課題（問7）

## (2) 個別に配慮すべき課題の要因

図4は配慮すべき課題の要因を挙げたものである。家庭、育ちの経緯、性格等、障害等の割合が多い。低学年の担任は障害等を意識しているが、その割合は学年が上がるにつれ少しづつ減少している。これは、成長とともに表面上の子どもの姿が変化し、障害といった要素が担任から見えにくくなるためと考える。

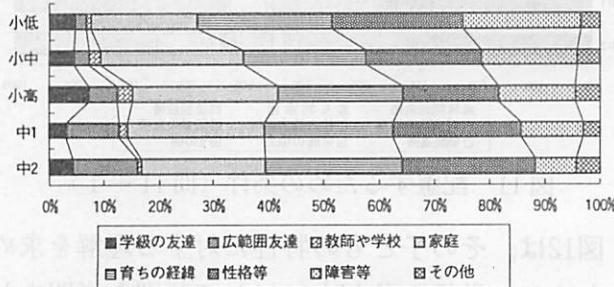


図4 課題の要因と考えるもの（問8）

図5は、図3で最も配慮すべき課題として「授業についていけない」を選択した担任が、何を要因としてとらえているかを示したものである。小学校低学年では「性格等」や「障害等」の本人の要因が半数以上であるが、小学校中学年から中学1年は「家庭」が増える。この時期は、学習への自立を目指して、家庭学習などの家庭での協力が求められるものと推測する。中学校2年になると、特定できない多様な要因が挙げられている。「授業」で求められる力が多様化するにつれ、本人以外の要因も影響してくるためと推測できる。

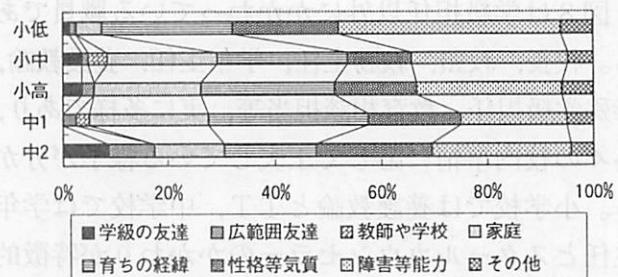


図5 学習に関する課題の要因（問7、8）

## (3) 個別の配慮の仕方

図6は担任として個別に配慮していることである。どの学年でも本人に対する直接的な対応が多かった。小学校低学年では「個別の声掛け」「座席の位置」「個別の学習」など、本人に対して多様なかかわりを行っている。学年が上がるにつれて、本人への直接的な対応が減り、周囲や家族に対する働き掛けが増えている。中学校になると、個別学習が減り、家庭との連携が増えてくる。これは要因の把握（図4、5）と連動しているように見える。

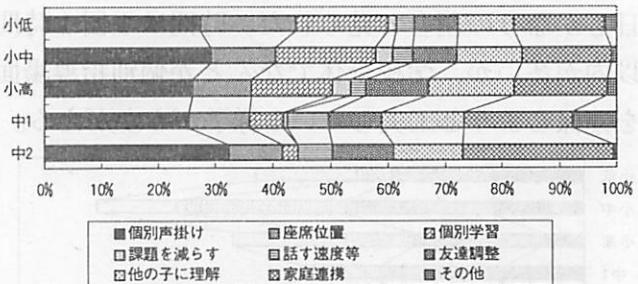


図6 担任としての個別の配慮（問9）

図7は学校として配慮していることである。校内での話合い（担任、学年会、職員会議）がどの学年でも多いが、様々な工夫により他の職員が直接かかわっている学校も見られた。

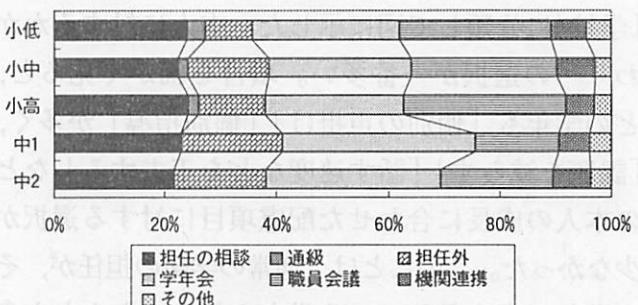


図7 学校としての配慮（問10）

図8は学級担任以外にかかわっている職員である。校長、教頭、教務主任、学年主任、養護教諭、特殊学級担任、教育相談担当等、実に多様であり、各々の校内事情に応じて工夫している様子が分かる。小学校では養護教諭とTT、中学校では学年主任とスクールカウンセラーのかかわりが特徴的であった。また、こうした教育職員だけではなく、事務職員、技師、給食調理師など、様々な職員がこの子どもたちを支えている様子も推察できる。

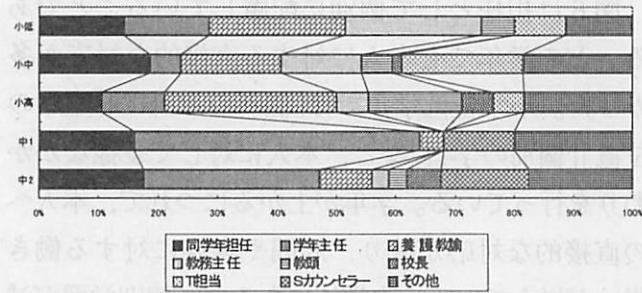


図8 個別指導の担当者（問10-1）

図9の個別指導回数は、週に2～5回が多く、毎日もかなりの割合で見られた。時間は1回1時間以内が多いが、学校全体でなんとか個別指導場面を確保しようと工夫している様子がうかがえる。

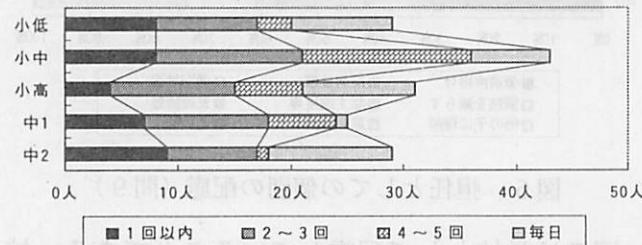


図9 週あたり個別指導回数（問10-2）

図10は、担任が可能ならしたい配慮についてである。実態調査の15項目を「本人」「周囲」「家族」「学校」に分類して図に示した。本人に対するかかわりへの選択が一番多い。項目を細かく見ると、どの学年も「個別の声掛け」「個別指導」が多く、「課題を減らす」「話す速度などを工夫する」などの本人の成長に合わせた配慮項目に対する選択が少なかった。このことは、通常の学級の担任が、その学年で求められている学力や能力をなんとか身につけさせたいと願う結果と考えられる。

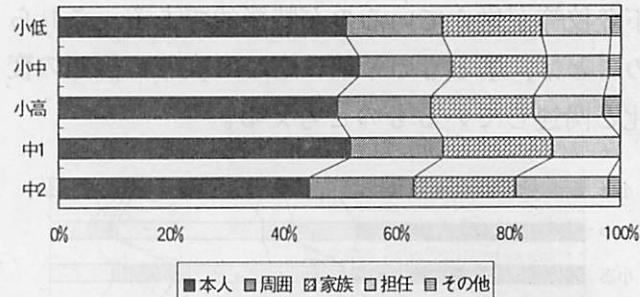


図10 可能なら実施したい配慮（問11）

図11は配慮を可能にするための条件についてである。どの学年でも時間的な余裕、人的な余裕、家庭の協力の選択が多かった。学級担任は、時間的な余裕や人的余裕があれば、個別の声掛けや個別指導などの個人の学びに合わせた指導を行っていきたいと考えているようである。さらに、適切な指導をするために、家庭の協力をより多く得たいと考えていることも分かる。

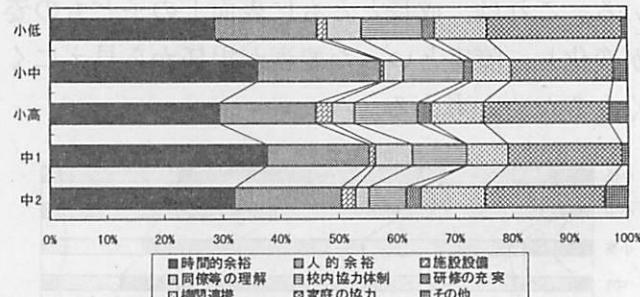


図11 配慮するための条件（問11-1）

図12は、その子どもの特性に対する理解を求めるために、学級の子どもに対して特別な説明をしたかどうかの実態を示している。説明をしたことがある担任は、全般的には半数に満たない。理解を求めることが必要だと感じながらも、「どのように説明すればよいのか」とか「説明することで差別感が生まれるのではないか」という、迷いや不安があるものと推察できる。一方、自由記述で求めた「説明の内容」を見ると、「パニック時の対応」等の具体策とともに、「人は皆違った性格なのが当たり前」「個々の違いをきちんと理解し、相手を認めることが大切」といった、個性の尊重につながる内容が目立った。また、個を特定せずに、「みんな違ってみんないい」とか「よいところ探

し」という学級づくりを意識している担任も、数は少ないが見られた。

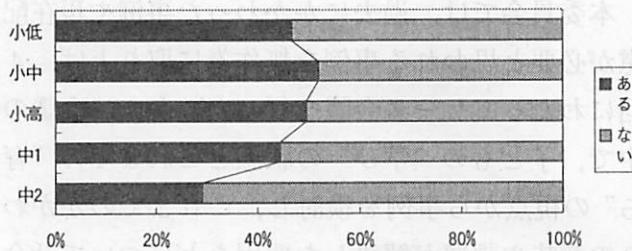


図12 理解のための特別な説明 (問12)

個別の配慮が最も必要と考える子ども (図13) は、どの学年も男子が多かった。

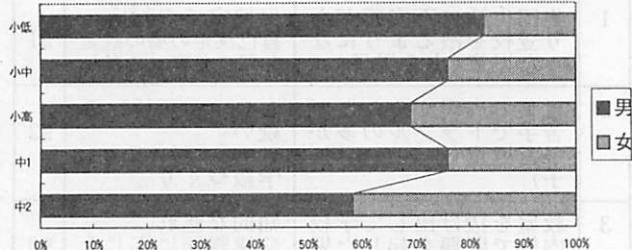


図13 最も配慮を要する子どもの性別 (問13)

図14では、個を特定せず一般的に、子どもへの配慮事項として意識している点を聞いた。個を特定した図4と比較すると、友達関係や担任との関係等、周囲に対する働きかけが増えている。一般論としては環境や周囲の調整が大切と考えていても、目の前に様々な配慮課題のある子どもがいると、具体的にはまず本人やその家庭に働き掛けているものと推察できる。

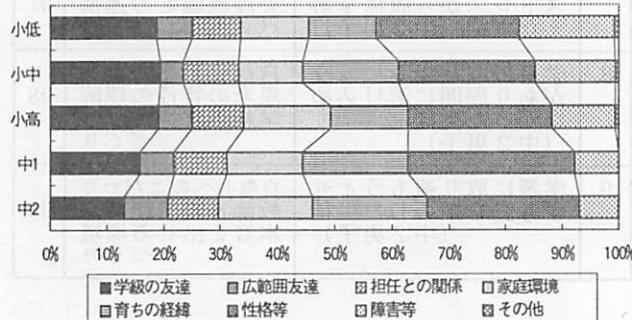


図14 意識している配慮事項 (問14)

#### (4) 学級づくりと校内配慮

図15は、担任が学級づくりに関して配慮している点を示している。小中学校のどの学年でも「ど

の子も活躍」「個々のよさを認める」「なんでも話せる雰囲気を作る」が多い。小学校では「分かりやすい授業」も多かった。これは、小学校では学級担任がほとんどの教科を教えており、「分かる授業」を学級づくりの柱と考えている担任が多いからと考えられる。

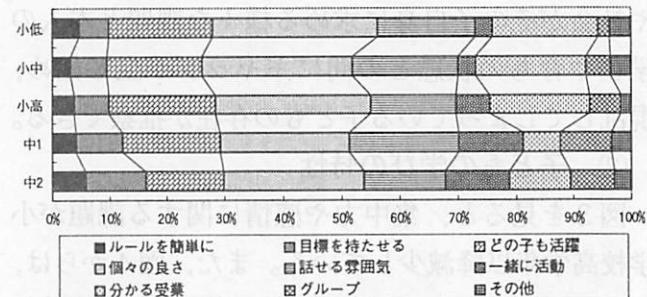


図15 学級づくりに関する配慮 (問15)

図16では、配慮を要する子に対する学校としての配慮の方法を聞いた。「職員会議や学年会で話題にすること」や「同僚や上司が担任の相談にのること」など、担任を中心として学校全体で支えていく方向の選択が多かった。図7と比較すると、特殊学級等への通級や関係機関連携など、担任以外がかかわる項目がやや増え、みんなで配慮して育てていきたいという思いが感じられる。

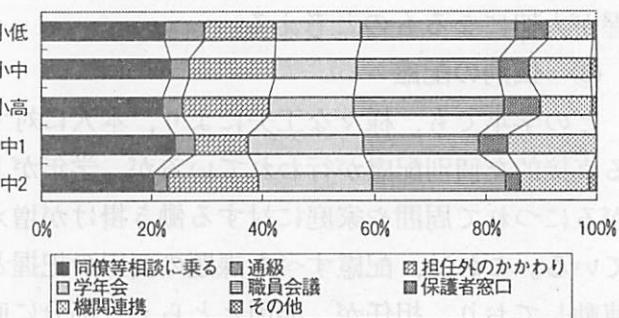


図16 学校としての一般的な配慮 (問16)

#### (5) 実態調査の考察

##### ① 成長に応じて求められるもの

当初、小学校と中学校では学級担任制と教科担任制という違いがあり、このことが「個別配慮が必要と考える課題の把握とその対応のあり方」に様々な影響を与えているだろうと考えた。しかし、図3の「最も配慮を要する課題」を見ると、小

学校高学年と中学1年の間ではなく、中学1年と中学2年との間で、学習に関する課題の割合が減り、様々な生活課題の割合が増えるという差異が表れた。このことから、求められる学習や集団生活の質が、この辺りで変化していくことが推察される。さらに、この急激な変化に対応できずに、学校や社会がその子自身に求める様々な課題と本人の学びや育ちの状態との間にギャップが生じ始め、混乱している子どもの存在が推察できる。

### ② 子どもの学びの特性

図3を見ると、集中力や感情に関する課題が小学校高学年以降減少している。また、図4からは、小学校低学年では「障害等」が要因として比較的多く意識されているが、徐々に意識されなくなっていく様子が分かる。このことから、年齢が低い段階では「配慮すべき課題の要因」ととらえていた軽度の障害や認知のアンバランスなどといった子どもの学びの特性が、成長と共に生じる様々な他の要因の影に隠れ、徐々に見えなくなっていくことが予想される。育ちの中で解消されるものもあるが、隠れてしまうものもある。学年が進むにつれてより一層、このような視点からの実態の把握が大切になるものと考える。

### ③ 個別の配慮

どの学年でも、様々な工夫により、本人に対する直接的な個別配慮が行われているが、学年が上がるにつれて周囲や家庭に対する働き掛けが増えている。これは、配慮すべき課題の要因の把握と連動しており、担任が、要因ととらえた部分に直接的に対応しようとしていることが分かる。したがって、配慮を有効に生かす上でも、的確に実態を把握することが求められる。

今後、具体的な配慮を考える時には、以上のように成長に応じた課題の変化と子どもの学びの特性を意識した、実態の把握がまず大切と考える。

## ■ 2 事例研究の結果及び考察

### (1) 事例について

本委員会では、過去にかかわった事例や現在配慮が必要と思われる事例を無作為に取り上げ、4回にわたってケース会議を行った。ケース会議の中で、子どもの“学び”的状態とこれまでの“育ち”的視点から事例を検討し、これまでのかかわりの意味や課題が解決した要因などについて話し合いを重ねた。

表2 事例の一覧

番	事例タイトル	キーワード	頁
1	集団生活に不安感があり登校を渋るようになった児童(小2男子)	保健室での対応 自己決定の場の設定 父親の養育への参加	91
2	言葉で表現することが苦手でトラブルの多かった児童(小3~4男子)	L D (言語性) の 疑い 学びの支援の見直し 学級づくり	92
3	教室を抜け出して学校内外で問題を起した児童(小3~4男子)	知的な遅れ 発達課題に応じた 個別指導 継続的な就学指導	93
4	遅刻や忘れ物が多く、興奮しやすかった児童(小5男子)	情緒不安定 基本的生活習慣の確立 機関連携による 自立支援	94
5	ルールが分からず落ち着きがなかった児童(小5男子)	A D H D 特性に合った個別の 配慮 学級の雰囲気づくり	95
6	教師や友達とのかかわりを避けている児童(小5~6男子)	不登校 母親への継続的な 支援 専門機関との連携	96
7	自分に自信が持てず、ストレスから腹痛を訴えた生徒(中2男子)	集団への不適応 癒護教諭との連携 パソコンによる支援	97
8	学習の取り組みにムラがあり周囲に溶け込めなかつた生徒(中2男子)	自己充足感の欠如 思考の特性的理解 学級の雰囲気づくり	98
9	学習に取り組もうとせず考査を拒否した生徒(中2男子)	自尊心へのこだわり 教師との信頼関係 本音を出せる環境づくり	99

### (2) 事例の実際

以下の視点から、事例を検討した。

「キーワード」「配慮課題」「これまでの育ち」「学びの特性」「理解」「望ましい育ち」「学びへの支援」「結果」「考察」

## 事例1・小2 男子

## 集団生活に不安感があり登校を渋るようになった児童

〈キーワード：保健室での対応、自己決定の場の設定、父親の養育への参加〉

## 【配慮課題】

- 初めてのことや失敗に対する不安感を自分なりに処理することが難しい。
- 自分の気持ちや考えを言葉や態度で表現することが苦手である。
- 友達とのかかわりが少なく硬い表情で、教室に入れずに保健室登校をしている。

## 【これまでの育ち】

- 母と祖母が教育の主導権を握り、娘に厳しかった。
- 幼児期は人見知りが激しかった。
- 緊張感が強くて母子分離ができず、幼稚園に慣れるまでに時間がかかった。
- 食べ物の好き嫌いが多かった。
- 1年生では数日の欠席だったが、2年生の始業式から登校を渋るようになった。

## 【学びの特性】

- 計算は得意だが、発表や漢字の書き取りは苦手など学習面にアンバランスが見られる。
- 決められた学習課題は、苦手なことでも最後までやろうとする。
- 自己規制が強く、他人の目を気にする。
- 約束は守ろうとし、係や当番の仕事も喜んで行う。
- 思いやりがあり友達から好かれ、本児も友達と遊びたい気持ちはあるが、それを表現できないこともある。

## 【理 解】

- 家庭環境が不安定で、安心して家を離れる（登校する）ことができなかつたことと、初めてのことや新しいことに対して極端に緊張する本人自身の性格等の問題から、漠然とした不安をコントロールすることができず、保健室登校という形になったのではないか。
- 親や学校の要求に一生懸命応えようとしていたが、自分の持つ能力と、要求との間にギャップがあることに気づき、そこから自己に対する不全感が生まれていたのではないか。

## 【望ましい育ち】

- 自分の良さを知り、自己充足感を持つ。
- 初めてのことでも、思い切って挑戦しようしたり、失敗しても気持ちを切り替えたりできる。
- 自分の思いを素直に表現できる。
- 他人の良さを知り、周囲と協調できる。

## 【学びへの支援】

- 
- 保健室での対応
    - ・初めは養護教諭がかかわり、担任と連絡を取りながら、徐々に担任がかかわれるようになる。
    - ・補欠体制を組むなどして、担任が保健室で本児とゆったりかかわるようになる。
    - ・技師や給食パートが本児に声を掛け、一緒に仕事をするなど、保健室から校地内の様々な場所や人へのかかわりが拡大できるようになる。
  - 自己決定の場の設定
    - ・新しいことや初めてのことは、選択肢を用意したり、本児でも可能な目標を決めたりするなどスモールステップにより自己の思いなどを表現できるようになる。
    - ・本児がいつでも入れる学級づくり
      - ・交友関係に気を配り、誰もが話しやすく安心できる学級をつくる。
      - ・係活動や同じ班の児童について本児の希望をできるだけ取り入れる。
    - 父親の養育への参加
      - ・家庭環境の改善のため、父親の積極的な養育の参加を促す。
      - ・良い点を認め励ますための連絡帳のやり取りをする。（担任と家庭）
    - 校内及び専門機関との連携
      - ・不登校対策委員会や生徒指導部会での経過の報告で共通理解を図る。
      - ・校長や教頭も保護者の相談に乗る。
      - ・専門機関やスクールカウンセラーとの連携により、保護者の気持ちの安定と、本児への接し方などの助言を受ける。

## 【結 果】

- 2学期になり、保健室に行かなくてもほとんど教室で授業を受けられるようになった。
- 自分の予定通りにならないと表情が硬くなることもあるが、気持ちの切り替えができるようになってきており、明るい表情で過ごすことが多くなった。
- 作文では少しずつ自分の気持ちを表現できるようになってきた。

## 【考 察】

- 教室に入ることや教科学習を急がず、自己決定による自己充足感を味わえるよう配慮したり、安心して自己表現できる関係づくりをしたことで、本児が「楽な自分」でいられるようになった。それが、他者を受け入れる素地となり、友達とのかかわりが改善していったのではないか。
- 自己決定の場を多く持ったことで、「自分はどうしたいのか」が考えられるようになった。
- 父親が家庭において積極的にかかわるようになり、家庭の中の雰囲気が落ち着いたことが、本児に安心感を与えたのではないか。
- 多くの教職員が共通理解のもとで本児と学級担任のバックアップをし、担任が学級内の友人関係や雰囲気作りに配慮したり、専門機関に相談したりできたことが、早めの解決につながったと考えられる。

## 事例 2・小3～4 男子

## 言葉で表現することが苦手でトラブルの多かった児童

〈キーワード：LD（言語性）の疑い、学びへの支援の見直し、学級づくり〉

## 【配慮課題】

- 興奮しやすく、言葉で表現する前に行動してしまうので、友達とのトラブルが多い。
- その場の雰囲気をすぐに理解することが苦手で、とり残されたり仲間外れにされたりしやすい。
- 自分の思い通りにならないと力で押さえようとし、友達を泣かすことも多い。
- 国語の読み取りなどの学習に遅れが目立つ。

## 【これまでの育ち】

- 小さいころは落ち着きがなく、迷子になったり、けがをしたりした。
- 言葉の話しが遅く、専門機関で相談した。
- 好き嫌いが激しく、頑固であった。
- 入学後、仲間外れにされたり、からかわれたりすることが目立った。

## 【学びの特性】

- 個別知能検査のIQは正常範囲だが、言語性IQが低くLDの疑いがある。
- 依頼心が強く、やってもらうことや声をかけてもらうことを待っている様子が見られる。
- 自分の思いを言葉で伝えることが難しい。
- 1対1で担任が受容的に話を聞くと、トラブルの理由をなんとか話すことができる。

## 【理 解】

- 言語の発達が遅れ気味という特性から、自分の考えや行動をうまく説明できないので、乱暴な行動を起こしたり、説明するのを諦めて投げやりな態度になってしまったりするのではないか。
- 自分の行動や判断に自信がないために、不安感が強く、主体的に動くことができないのではないか。

## 【望ましい育ち】

- 自分の行動に自信を持って主体的に行動できる。
- 諦めずに、言葉で自分の思いを伝える。
- 相手の立場も理解しようとする。

## 【学びへの支援】

- トラブルがあったら、1対1で話を聞き、本児が自分の気持ちを「分かってもらえた」と思える体験をさせる。
- 自分のとった行動を言葉で振り返らせ、今後どのように行動すれば良いかを考えさせる。
- 学習面では、説明をできるだけ短めにし、板書や図示等、視覚に訴える教材教具の工夫をする。
- 周囲の児童に、本児も頑張っていることを理解させる。

## 【結 果 1】 (4年1学期)

- 1対1なら、担任に自分の思いやトラブルの理由を話すようになった。
- 体が大きくなるにつれて自信がつき、自分から行動するようになった。反面、興奮すると押さえがきかず、相手を傷つけたり、相手がいじめられたと感じるような行動が増えた。
- ※ 担任が本児の話を聞いていた間、他の児童は自習をしていたが、だんだん学級が落ち着かなくなり、本児もまた、不安定になった。

## 【学びへの支援の見直し】

- 学級づくりに配慮して集団を安定させ、本児を受け入れやすい環境を作る。
- トラブルがあったら、学級全体で話し合い、互いの思いを理解させる。

## 【結 果 2】 (4年2学期)

- 互いに認め合う雰囲気を作ることで、学級集団が安定した。
- トラブルの原因をみんなで話し合う中で、本児も自分を客観的に見るようになり、「だからあの子はこうしたのか」と納得するようになった。
- 本児が自分の行動を言葉でとらえるようになり、客観的に反省できるようになった。

## 【考 察】

- 3年生から個別に配慮したことで、4年生になって1対1で自分の気持ちを話せるようになった。
- 学級づくりに配慮し、互いに認め合える雰囲気作りをしたことで、学級集団が落ち着き、同時に、本児もなぜうまくかかわないのであるのかを理解するようになった。
- 本児の学びの支援を途中で見直すことにより、より個別の配慮が必要な時期から集団の中で育てた方がよい時期への見極めができた。

## 事例3・小3～4 男子

## 教室を抜け出して学校内外で問題を起こした児童

〈キーワード：知的発達の遅れ、発達課題に応じた個別指導、継続的な就学相談〉

## 【配慮課題】

- 授業中に教室や学校の敷地内から抜け出してしまうことが多い。
- いたずらや危険な遊びをすることが目立つ。
- 学習内容を理解することが困難になってきた。

## 【これまでの育ち】

- 仮死状態で生まれる。
- 小学校入学前に「肥満」で、入院治療を受ける。
- 入学後は気持ちにムラがあり、集団行動から逸脱することも多かった。
- 両親ともに教育に关心が高く、学校にも協力的大だが、本児の実態の理解が不十分で、「がんばれ」と叱咤激励することが多かった。
- 担任は、家庭でのしつけが不十分なことと児童本人の努力と忍耐が足りないことが要因と考えていた。(生徒指導上の課題ととらえていた。)

## 【学びの特性】

- 小学校入学当初から個別指導を必要とした。
- 国語の音読や文字練習には取り組むが、外の教科にはほとんど手をつけない。
- 個別知能検査では、軽度の知的発達の遅れと能力のバランスの悪さが認められた。
- コンピュータに関心があり操作を覚えるのが早い。

## 【理 解】

- 知的発達の遅れがあるために、該当学年の学習内容が理解できずに、自己充足する場がなく、不適応状態にあるのではないか。
- 保護者に本人の状態を理解してもらうためには、時間をかける必要があるだろう。
- 家庭でも学校でも存在が認められてプラスの評価が多くなければ、自己充足し、気持ちが安定するだろう。

## 【望ましい育ち】

- 個別の指導を受け、学習に対する興味を持つ。
- 自分の得意な面を見つけ、自己充足感を持つ。

## 【学びへの支援】

- 就学指導を行いながら次のように校内体制を工夫して、発達課題に応じた個別指導の時間を確保する。
  - ・教育相談担当者が土曜日の放課後を使ってコンピュータ利用も含めた個別指導を行う。(小3～小4)
  - ・午前中でも授業内容によって、担任外教員による個別指導を行う。(小4)
- 隔週の土曜日の個別指導の後に、教育相談担当者が保護者の継続的な教育相談を行う。内容は個別指導による児童の伸びを中心にし、個別指導の効果とその必要を知らせていく。(小3～小4)
- 校内就学指導委員会を定期的に開き、適切な学習の場を検討する。
  - ・担任に対しては、特殊学級設置を急がずに、まずは学校全体での対応を続けていくことを理解してもらう。

## 【結 果】

- 気持ちが安定することが多くなり、教室から抜け出すことが少なくなった。
- 5年生からは保護者の理解も得て、特殊学級へ入級することになった。

## 【考 察】

- 児童が自己充足できる学習の場を整えることが必要であると考え、継続的な就学相談や特殊学級設置を含めた校内体制の中で学習の場を整えることにより、児童の気持ちが安定し、生活が落ち着いた。
- 個別指導と同時に保護者との教育相談を2年間継続した。児童の実態を理解してもらうために、時間をかけ、個別指導での具体的な伸びを確かめながら就学相談を行ったことで、スムーズに特殊学級入級を実現することができた。通常の学級で学ぶ障害児への対応は、児童とかかわりながら、児童の変容をもとに保護者と話し合い、時間をかけてよりよい就学相談を行うことが大切であるということが分かった。

## 事例 4・小5 男子

## 遅刻や忘れ物が多く、興奮しやすかった児童

《キーワード：情緒不安定、基本的生活習慣の確立、機関連携による自立支援》

## 【配慮課題】

- 遅刻や無断欠席、忘れ物が多く、学習用具や身なりが整わない等の基本的生活に課題がある。
- 授業中に分からなくなるとトイレに逃げ込み、学習意欲に欠ける。
- 言葉遣いが乱暴で、気に入らないことがあるとかつとまって、よくけんかをする。
- いつもいろいろしていることが多く情緒が安定していない。

## 【これまでの育ち】

- 家庭の事情により、4年生で転校してきた。
- 放任されて育ったために基本的生活習慣が身に付かず、部屋の中が乱雑で学習環境が整っていない。
- 言うことを聞かないなどたたかれたり怒鳴られたりして育ち、咎められたり、認められたりする経験が不足していた。
- 兄弟げんかが多かった。
- 食事が不規則で、風呂にも入らず、衛生上の問題が気になった。

## 【学びの特性】

- 学習環境が整っていないので学習習慣が身に付いていない。
- 大人の会話やテレビなどから情報を得る力はあり、コミュニケーション能力は高いが、一般的な常識には弱い面がある。
- 学力は、年齢より低く、一部の発音と文字表記が不明瞭である。
- 心理検査の結果を見ると、知的発達の遅れはないが、個人内の能力のアンバランスが顕著である。

## 【理 解】

- 学校生活に適応できない原因として、幼少時の愛情不足やしつけの欠如により、年齢に応じた能力を獲得してこなかったことが推察できる。
- 知能的には低くないのに、その能力が發揮できないのは、学習環境が整っていないことと、学習習慣が身に付いていなかったためと思われる。
- 基本的な生活のリズムが整っていないため情緒が安定せずに、すぐ興奮したり、乱暴になったりするのではないかと思われる。

## 【望ましい育ち】

- できるという自信を持ち、学習意欲を持続できる。
- 感情をコントロールし、対人関係をスムーズにできる。
- 家庭の中で自分でできることは自分でやり、規則正しい生活をする。

## 【学びへの支援】

- 
- 校内体制の確立と自立支援
    - ・月1回の定例会：全職員で共通理解を図りながら声掛けをし、存在を認めてあげる。（父親的、母親的愛情を補う）
    - ・1日2時間の個別指導
      - 算数：つまずいている段階に戻って教頭が指導し、目標（時間や課題数）を決め取り組ませる。できたら大いに誉めて、達成感を積み重ねさせる。
      - 国語：さわやか相談室で相談員と一緒に本を読んだり話をしたり作文を書いたりして、自分を表現する方法を身に付けさせて、情緒の安定を図る。
    - ・基本的生活習慣の確立：「食事」「睡眠」「衛生」などの大切さを担任と養護教諭が協力して指導する。
  - 集団所属感の高揚 学級の中で活躍の場を与え、互いを認め合つて学級の一員であることを自覚させる。
  - 機関連携による自立支援 児童相談所、民生委員、主任児童委員、区福祉課などの専門機関と連携を図り、家庭生活を支援する。

## 【結 果】

- 個別指導の継続をしたことで、かけ算九九でつまずいていた本児の学力のレベルが、「数の計算」領域では5年生レベルに到達した。また、話し方や表情が穏やかになり、自分の気持ちや人の気持ちを考えて作文に表現するようになった。
- 学級の友達と同じように勉強ができるようになったことで、「やればできる」という自信が付いた上に、みんなに認められる喜びを味わえたことにより、暴力に訴えることが減った。
- 一人で起きて登校するようになり、遅刻や無断欠席が少なくなった。

## 【考 察】

- 本児を学校に適応させるためには、まず情緒の安定を図り本児の存在を認めてあげることから始めようという全職員の共通理解の基で、校内体制を確立させて学びを支援したことが、本児のやる気を育て、自信を培うことにつながり、自立支援に有効だったと思われる。
- 専門機関との連携を図りながら福祉面でケアしたことが本児の家庭生活の安定につながり、基本的生活習慣も少しずつ身に付き、自分でできることは自分でやろうとするようになってきた。情緒の安定や生活の安定が基盤にあると子どもは自ら学ぼうとし、よりよく成長していくものであることが分かった。
- 今まで発達段階に応じて獲得しておくべきものが獲得できなかった本児は、学校や地域の人たちに見守られる中で、今まで身に付いていなかった部分を補い、成長しつつある。

## 事例 5・5年 男子

## ルールが分からず落ち着きがなかった児童

〈キーワード：ADHD、特性に即した個別の配慮、学級の雰囲気づくり〉

## 【配慮課題】

- 注意散漫で気になることがあるとすぐ立ち歩く。
- 遊びのルールや集団生活のきまりが理解しにくく、勉強が分からなくなると大声を出す。
- 図工や運動が苦手であり、身の回りのことが一人でできないことが多い。
- プライドが高く、「できない」ことを友達に指摘されるとかっことなって暴れ出す。

## 【これまでの育ち】

- 3歳のころよく迷子になった。
- 3歳児検診で運動のぎこちなさを指摘された。
- 父親は厳格でできないことを厳しく叱り、母親は学習の遅れを補おうと毎日家庭や塾で勉強をさせている。
- 勉強さえできればいいという環境で育ち、身の回りのことはほとんどできない。
- 以前に「ADHD」という診断を受け、服薬している。服薬中は、落ち着きが見られる。

## 【学びの特性】

- 注意散漫で指示されたことの理解が困難である。
- 周囲の動きにつられて行動をする。
- 順序よく物事を考えたり、進めたりすることが苦手である。
- 記憶することが苦手で学習内容が覚えられない。
- 視覚に訴える学習やゲーム的学習を好む。
- 繰り上がりや繰り下がりのある計算で指を使おうとする。
- ひらがなの書き順をまちがえて覚えている。

## 【理 解】

- 本児の課題は「ADHD」に起因しているものであり、落ち着いて取り組む等の実状にそぐわない努力を本児に求めていたのではないだろうか。
- 特性に合わせた配慮をしていなかったため、苦手なことがうまく克服できず、本児のプライドを傷つけたり意欲を失わせたりしていたのではないか。

## 【望ましい育ち】

- 人の話を注意して聞く。
- 集団のきまりや遊びのルールを守り、集団行動がとれる。
- 自分のことは自分でやり自分に自信を持つことができる。

## 【学びへの支援】

- 
- 特性に即した個別の配慮
    - ・机の配置：気が散りやすい窓側を避け、トラブルの少ない友達の側に机を配置し授業に集中させる。
    - ・個別課題：学力に合わせた課題と5年生の課題を少しづつ与え、達成したらさわやか相談員と好きな本読みやパソコン学習をさせる。
    - ・指示の出し方：指示は、混乱しないように一つずつ目を見て与え、聞き返して確かめる。
    - ・運動機能の改善：ボディイメージを高める運動（マット運動や身体表現）を多くさせ、危険に対応できる動きを遊びの中で経験させる。
  - 集団への配慮
    - ・友達関係への配慮：一斉指導の中で活動ができるように、教え合い、励まし合える友達を増やす。
    - ・学級の雰囲気づくり：それぞれの良さを評価し合う場の設定をし、互いを認め合う。（帰りの会や学級活動）
  - 家庭や病院との連携：実態について情報交換し、協力し合える体制づくりをする。（定期的な教育相談）

## 【結 果】

- つまずいている段階に戻って課題を少しづつ与えることによって集中力がつき、最後まで取り組めるようになった。
- 指示を与えるときに目を見てゆっくり簡潔に与えたことにより、指示されたことへの理解力が高まって、衝動的な行動や不注意な行動が減り、周囲の動きに応じた行動が取れるようになってきた。

## 【考 察】

- 特性を理解した上で、特性に即した個別の配慮をしたことが集中力を高めることにつながり、落ち着いて学習や生活に取り組めるようになった。
- 学級の友達に理解を求め、協力し合い互いを認め合う学級づくりをしたこと、「自分も友達に認められる」「やればできる」という自信につながり、友達とのトラブルも減って有効だった。
- 障害の程度や特徴をよく把握し、実態に合わせて学びの支援をしたことによって問題行動が減り、学校生活に適応することができるようになった。今後、家庭だけではなく医療機関との連絡も定期的に取り合って、個別の指導を含めた適正な就学指導をしていくことが課題である。

## 事例 6・小5～6 男子

## 教師や友達とのかかわりを避けていた児童

〈キーワード：不登校、母親への継続的な支援、専門機関との連携〉

## 【配慮課題】

- 自主性を失い、先々の出来事に関して不安を持っている。
- 不登校になり、家の中への引きこもりが見られ、教師や級友とのかかわりを避けている。
- 本児には直接的にかかわらず、母親を通した間接的な働き掛けのみである。
- 家庭では情緒不安定な状態が見られ、母親もまた様々な不安や悩みを抱え込んでいる。

## 【これまでの育ち】

- 小学校低学年までは核家族だったが、その後、家庭の事情により父方の祖父母と同居。
- 小学校中学年は、地域性の強い生活環境で過ごす。祖父母と母親との間で、本児の教育に対する意見の食い違いが多く見られた。
- 高学年になり両親は本児のことを考え、祖父母との別居を決意し、再び核家族の生活を始める。

## 【学びの特性】

- 家庭学習が習慣化されており、特に得意な教科に対し意欲的である。
- 几帳面でまじめ、そして完全主義的傾向があり、自分自身への要求水準が高い。
- 自分の考えをはっきり持っているが、人とのコミュニケーションについては、非常に繊細で感受性が鋭いため周囲との協調が難しい。

## 【理 解】

- 繊細で鋭い感受性などの本児自身の問題と、家族関係、生活環境などの問題が複合されて不登校になったのではないか。
- 養育に対し几帳面で熱心な家庭に育ったが、成長過程において育てられるべき相応の自立性が育ってきていないかったのではないか。

## 【望ましい育ち】

- 自分に対する肯定的な理解をする。
- 自己充足感を取り戻す。
- 家庭内に安心できる居場所を持ち、自主性や自立心を育成できるようにする。
- 家族関係や養育方針の見直しによる「育ち直し」をする。

## 【学びへの支援】

- 
- 学級担任と養護教諭の連携により、可能な課題への取り組みを行う。
    - ・母親の不安や悩みを十分に理解し受容的、支持的态度で継続的な相談活動を積み重ね、母親が抱えている家庭や養育の問題についての自己整理を支援する。
    - ・無理に本児に接触せず、母親を介し、家庭で行った学習プリントで学級担任が間接的指導を行い、家庭学習に対する不安を取り除く。
    - ・「教育相談委員会」を中心に支援のあり方を検討しながら進める。
  - 専門機関との連携を図り、適切な対応を行う。
  - ・本児に対して直接的支援を行っている専門機関と、学校との支援がつながるように定期的な連携を図る。

## 【結 果】

- 毎週1回約1年6か月にわたり母親、学級担任、養護教諭の三者による継続的な相談活動を積み重ね、母親を支えることにより、信頼関係や協力関係が築かれた。その中で、母親自身の不安や負担が軽減され、本児に対するかかわりにゆとりが持てるようになり、養育に対する自信を取り戻した。
- 母親の養育に対する方針が変わったことにより、本児も家庭の中で新たな居場所を確保でき、安心して専門機関に通い、意欲的に指導を受けるようになった。
- 専門機関での個別の学習や教育相談などの直接的な指導を受けながら、不安を乗り越え、自らの課題を整理するとともに学習意欲も示すようになり、中学校から登校できるようになった。

## 【考 察】

- 学校ができるかかわりと、専門機関との連携で進めるかかわりとを明確にしながら、総合的な視点で取り組むことで、あせらずにじっくり対応することができた。
- 学級担任と養護教諭が協力し合い、母親との継続的な話し合いを積み重ねることにより、間接的ではあるが、子供が乗り越えるべき課題に向けての支援が可能となり、本児の自己肯定感や自主性を育てることにつながった。

## 事例7・中2 男子

自分に自信がもてず、ストレスから腹痛を訴えた生徒

〈キーワード：集団への不適応、養護教諭との連携、パソコンによる支援〉

## 【配慮課題】

- 特定の友人のみと過ごしていることが多い、にこやかな表情をすることが少ない。
- 自分から話しかけることが少ない。受け答えの言葉も短く、即座に答えることができない。発表が苦手である。
- 提出物の未提出や忘れ物が多い。学習の達成度もあまり高くない。
- ストレスから腹痛を訴えることがある。

## 【これまでの育ち】

- 低学年の時に交通事故にあり、その後脳波に異常が見られた。中学校入学後、1度だけ頭痛を訴えた。
- 小学校から集団の中に入っていくのが苦手で幼く、健康面、性格行動面で配慮を要した。
- 中学校入学時は、ストレスからくる抜毛の痕跡が見られたが、現在は見られない。

## 【学びの特性】

- 係の仕事など、自分の役割はきちんと果たす。仕事はコツコツとする。
- 文章表現は短文が多く、漢字も少なめである。筆圧も弱い。
- パソコン部に所属しており、技能も優れている。家庭でもパソコンを長時間活用しており、インターネットで情報を得たり、ホームページを作成して情報を発信したりしている。

## 【理解】

- 自分の考えをスムーズに表現することが苦手であり、集団の中にいると自分に自信がもてず、常に劣等感を感じているのではないか。
- 学習への苦手意識がストレスとなり、腹痛を引き起こす場合があるのではないか。
- パソコン操作には自信を持っているため、部活動ではとても明るく振る舞う。パソコンの活用を手がかりとして、支援していくことができるのではないか。

## 【望ましい育ち】

- 対人関係や学習、健康面への不安を感じないで生活する。
- 考え方を率直に述べようとする。
- 個性を生かせる場や活躍の場を広げ、自信をもって生活する。
- 学習の習慣を確立する。
- 集団のために働くことの喜びや充実感を感じて生活する。
- 本音を話せる交友関係を築く。

## 【学びへの支援】

- 
- 個別の声掛けを多くする。
    - ・担任が積極的に声掛けをするように努める。Eメールによるコミュニケーションも試みる。その中で、学級の一員として心配していることや学級全体での成長を願っていることを伝える。
  - 学級担任以外の職員がかかわる。
    - ・養護教諭や学年主任、部活動顧問が面談などを通して、生活や学習についての助言をする。
    - ・担任は養護教諭などとの情報交換により、新たな良さの発見に努めるとともに、指導に生かす。
  - 学校及び家庭での状況を相互に理解するように、家庭との連携に努める。

## 【結果】

- 声は小さいものの、自分の考えを発表しようとする姿勢が見られるようになった。
- 夏季休業後、一時遅刻や早退が目立ち不登校が懸念されたが、現在はほぼ心配がなくなった。
- 提出物でも少しずつ努力している。力を發揮する教科も出てきた。
- にこやかに会話をするなど、周囲とのかかわりをもつようになった。
- 自分を変えたい、向上したいという意識が出てきた。
- 担任に対してEメールによる返信があった。

## 【考察】

- 担任や養護教諭などとの面談により、生徒は多面的な評価を受けるとともに様々な助言を得ることができ自分らしさを出すようになってきた。まだ、週に1時間程度は腹痛により保健室に顔を出しているが、欠席や早退はほとんどなくなっている。周囲との協力や積極的な活動も少しずつ増えてきている。
- 養護教諭と連携することにより、担任は新しい情報を得ることができ、生徒のより深い理解につなげるとともに支援や指導の参考になった。その結果、他の生徒と同様に早急な反応（発言や行動）を期待せず、ゆとりを持って接したり声掛けしたりしていくことができるようになった。
- パソコンを話題にしたり、パソコンを活用したかかわりをしたりすることにより、声掛けをする機会が増え、信頼関係が作られてきた。
- 自分の生活を振り返り、改善していこうとする意識が出てきて、周りの生徒ともかかわりを持とうとする姿勢が見られるようになった。

## 事例 8・中2 男子

学習の取り組みにムラがあり、周囲に溶け込めなかった生徒

〈キーワード：自己充足感の欠如、思考の特性の理解、学級の雰囲気づくり〉

【配慮課題】

- 興味のない教科では無気力な態度になり、手遊び、居眠りが多い。
- クラスの中では孤立しがちで友人できない。

【これまでの育ち】

- 両親が共働きで忙しく、弟や妹が小さいので親とのかかわりがあまりなかった。
- 理科、自然の学習、図工等には意欲があり、知識も豊富であるが、興味のない話題はきちんと聞いていないので、担任が声掛けや促しをする必要があった。
- 不平や不満を外に表し、周囲と協調できなくなることがあった。
- 指しやぶりは長年続き、注意を受けてもなかなか止められなかった。

【学びの特性】

- 性格は穏やかで優しく、学力は標準以上である。
- 型にはまらない発想力という思考の特性があり、興味ある教科や分野では、人の思いつかないような考えを持つことができる。
- 自分の関心だけに結びついた意見であったり、次々に考えが連鎖してまとまりがつかなくなったりすることもある。
- 提出物などについてはルーズである。
- 不満がたまると爪かみが見られた。
- 母親に対し暴力的になることもある。

【理 解】

- 学習能力が高く、それは興味あることには遺憾なく發揮されるが、興味のない学習には意欲がわからず、教師から叱責されたりすることで、さらに意欲を消失しているのではないか。
- ユニークな発想をするが、思いついてもすぐに考えがまとまらなかったり、うまく表現できなかったりして周囲から受け入れられず、自己充足感を持てないで成長してきたのではないか。
- こういった自分の思考の特性をうまく受け入れることができず、不満をぶつけたいのだが、それはけ口がないのではないか。受けとめる友人もいないし、家庭にあっては自立を期待される立場にあり、甘えられないと感じているのではないか。

【望ましい育ち】

- 自分の良さを理解し、充足感を持つことができる。
- 不安定な気持ちを処理する適切な方法をとることができる。
- 周囲との協調について、自分で判断し対応することができ

【学びへの支援】

- ○学級の雰囲気づくり
  - ・交友関係を十分配慮し、本人をよく知る担任が2年間持ち上がりで担任する。
  - ・個性を認め合う学級の雰囲気づくりを心がける。
  - ・授業の中で発言したことは、極力取り上げて評価し、発言がまとまらないときは、うまく手助けを行う。
- 学年部会での共通理解と担任外の教師の声かけ
  - ・授業の中でも、互いを認め合う雰囲気を意識して作る。
  - ・部活動などあらゆる場面で本人の良さを見逃さず、誉めていく。
- 家庭との連携
  - ・まるごとの本人を認める見方を勧める。
  - ・心配する母親には、安心感を持てるように励ます。

【結 果】

- 新しいクラスでは、本人の良さを認める生徒が数人おり、うまく受け入れられている。
- 授業者の配慮により、発言がプラスに評価され、少しづつ自信を持ち始めている。
- どの授業でも居眠りは減少し、爪かみ等も見られなくなった。

【考 察】

- 何か他の生徒とは違うという印象だったが、小学校の担任や保護者からの聞き取りなどにより育ちの確認をしたり、学校生活の観察から学びの確認をしたりすることにより、思考の特性を理解することができた。
- その特性のために充足感を持てず上記の問題を生じてきたと理解し、自己充実感が持てるよう支援を始めた。学級編制の際工夫が最も功を奏し、気持ちが安定してきている。
- まだ本人が自分の特性に自信を持っているとは言えないし、この先のクラス替え等の不安もあるが、現在の視点に基づいて励ましを続けていけば、少しづつ良い方向に向かうのではと考えられる。

## 事例9・中2 男子

## 学習に取り組もうとせず考査を拒否した生徒

〈キーワード：自尊心へのこだわり、教師との信頼関係の確立、本音を出せる環境づくり〉

## 【配慮課題】

- 遅刻が連続する。
- 授業中に学習の姿勢をまったくとらず、考査も拒否する。
- 教師の指導をはぐらかす。

## 【これまでの育ち】

- 親は、おとなしくて手がかかる子ととらえており、個性が認められていなかった。
- 問題点を伝えても理解されにくく、協力が期待できない家庭である。
- 学習内容の理解に時間がかかり、担任が個別指導を行っていた。
- 体が弱く、保健室に行ったり欠席したりすることが多かった。

## 【学びの特性】

- 優しくおとなしい性格である。
- 小学校での知能検査は標準の範囲だったが、中学校では検査を拒否しており、定期考査も白紙回答なので、理解の程度は不明である。
- 教師の指導に対しては、反抗はしないが話をはぐらかしてしまう。
- 長髪にこだわり、視線を見えなくした時期がある。
- 学級の中では、協力的で級友と話もよくする。

## 【理 解】

- 多少時間がかかるが、ゆっくり個別指導ができれば、学習内容を理解する力はあるようである。
- 学習内容が分らないという悩みや、分かりたいという欲求をうまく自己表現できず、ごまかしたり逃げ出したりしてきたのではないか。
- 自分の弱点を見せまいとして教師の接近をかわし、自尊心を保ってきたのではないか。学習や考査の拒否は、その一連の行動といえるのではないか。

## 【望ましい育ち】

- 分からず、分かりたいという本音を率直に表現できる。
- 自分の現在の学習状況や生活態度を真直ぐに受けとめ、改善や発展への意欲を持つことができる。
- 仲間や教師との信頼関係を築ける。

## 【学びへの支援】

- 
- 担任との信頼関係づくり
    - ・進級の機会に、新担任がラポートづくりに努め、少しづつ本音を出し、内面を語れるように導く。そして、今後の生活への具体的な目標と一緒に考えていく。
  - 学級担任以外の教師との信頼関係づくり
    - ・授業中は極力1対1で指導できる場面を設け、本人とのつながりを作るようとする。意欲を見せた時には大いに励ます。
    - ・部活動への意欲をかって、ほめる機会を増やす。
  - 家庭との連携
    - ・現在の様子とこれからの具体的な目標を伝え、協力を求める。

## 【結 果】

- 新担任とのラポートが少しづつ取れるようになり、遅刻の回数がかなり減ってきた。その中で、考査を拒否している理由をポツポツと話し始め、これから目標を立てられるようになってきた。
- 定期考査は全部受けて、得点を気にするようになった。
- 授業には、きちんと準備をして臨むようになり、分かろうとする姿勢を見せている。個別指導も受けたい素振りは見せるが、まだなかなかスムーズに乗ってこない。授業内容についていくのが大変になってきて意欲が半減した状態にもなったが、指導をはぐらかそうとはしなくなった。

## 【考 察】

- 日常会話は人一倍楽しくできるのに、学習や生活の指導がまったく上滑りしていく生徒であった。自分の現実をなぜ真っ向から見ようとしないのか、なぜ欲求を表現しないのか。性格や小学校での様子、家庭の雰囲気等を総合して考えてみると、信頼して自分の本音を語れる相手の欠如が推察された。
- 担任を中心に教師たちが本気でかかわる必要を感じ、それぞれに実行していった結果、やっと周囲の人たちに「教えて」「認めて」という表現ができるようになってきた。その突破口となったのは、やはり一番身近な担任との信頼関係の確立であった。
- 中学生の時期に、自分の本音が見せられないというのは珍しいことではないが、全てを拒否して自分を防衛することは、かなり辛いことである。本生徒の学習面での苦労は、これからが本番となるだろうが、弱音を吐いても良いという環境づくりを心がければ、有効な支援の手立てが講じられるものと思われる。

表3 実態調査項目と事例の内容との関連

実態調査項目			事例	1	2	3	4	5	6	7	8	9
個別の配慮が必要とする課題	学習	授業についていけない 授業の妨害をする 授業中立ち歩く ※学習のアンバランスがある 課題に取り掛かるのに時間がかかる		○	○	○	○	○			○	○
	集中力	集中できない					○	○				
	感情	感情を爆発させる 暴力をふるう 気持ちの切り替えがうまくできない ※いたずらが目立つ ※感情を表に出さない		○		○	○	○		○		○
	友達	いじめられている 他の子をいじめる 友達ができない ※集団になじめない		○	○	○			○	○	○	
	基本的生活	時間にルーズである 動きがぎこちない 机の中等整理整頓が苦手である 忘れ物が多い 喫煙等の問題行動が見られる		○		○	○	○		○		
	不登校等	欠席が多い 授業中に保健室等にいることが多い 不登校		○					○			
課題の要因	現在の学びの特性	本人の課題 性格等本人の気質 障害等本人の能力		○	○	○		○	○	○	○	○
	人間関係の課題	学校での友人関係 広い範囲での交友関係 教師や学校との関係			○	○				○	○	○
	家庭環境の課題	現在の家庭等の環境 親子関係、兄弟関係		○			○		○		○	
	過去からの育ちの特性	本人の課題 性格等本人の気質 障害等本人の能力			○	○		○	○	○	○	○
	人間関係の課題	学校での友人関係 広い範囲での交友関係 教師や学校との関係			○	○				○	○	○
	家庭環境の課題	過去の家庭等の環境 育ってきた経緯や環境 親子関係、兄弟関係		○			○		○		○	○
個別の配慮の仕方	本人に対して	個別の声掛けを多くする 座席の位置に配慮する 個別に学習の指導をする 宿題や課題を減らす 話す速度や表情に気を配る 特殊学級等に通級させる 学級担任以外の職員が関わる ※情緒の安定を図る ※パソコン等本人の得意なことを生かす		○	○	○	○	○		○	○	○
	周囲	グループや友人関係を調整する 他の児童生徒に対して理解を求める ※学級づくりに配慮する		○	○		○	○		○	○	
	家族	家庭との連絡を密にする 担任以外に保護者の相談窓口を作る		○	○	○	○	○	○	○	○	
	担任	学年会や職員会議等で話題に取り上げる 学校外の機関等との連携を図る		○	○	○	○	○	○	○	○	

※は調査項目にはない「追加項目」

○は特に強調したい重点項目

### (3) 事例研究の考察

#### ① 9つの事例の共通点

表3は実態調査項目に合わせて9事例を整理したものである。実態調査を見ると、可能なら実施したい配慮（図10）として「個別の声掛け」「個別学習」「家庭との連携」が多く選択され、配慮するための条件（図11）として「時間的余裕」「人的余裕」が挙げられていた。これらの配慮は、担任以外の教職員がかかわることで実施が可能となり、家庭との連携を密にして指導の効果を上げていることが、表3の「個別の配慮の仕方」から分かる。

各事例に共通しているのは、その子どもに対する受容的なかかわりである。具体的には、「情緒の安定を図る」「本人の得意なことを生かす」などの本人に対する配慮項目の選択が多かった。さらにキーワードにも、自己決定、自己充足感、自立支援など、子どもが自分自身の行動や内面を見つめ、自己を育てていけるようになることを願った言葉が目立つ。具体的な支援の方法は様々であるが、基本的な姿勢としては極めて大切なことであろう。

#### ② ケース会議の有効性

ケース会議は、それぞれの子どもの課題の要因を探るところから始めた。要因が最初からある程度予想できた事例、指導する中ではっきりしてきた事例など様々である。しかし、どの事例も継続的に“学び”と“育ち”という視点からその子どもを幅広くとらえようと努めることで、子どもの特性をより明確に把握できるようになった。ケース会議の成果は、以下のとおりである。

**情報の収集：**養護教諭等、周囲の教職員と話することで、周りの先生も気をつけて見てくれるようになり、情報が自然に集まって、その子どものこれまでとは違う面が見えてきた。

**子どもの全体像の整理：**学びと育ちの視点をはっきり意識し、文章や構造図に情報を整理し直すことで、子どもの全体像がつかみやすくなったり。また、問題点ばかりを気にするのではなく、原因を考えることができるようになった。

**新しい視点や情報からの気づき：**担任は、その子どもの多くを知っているように思っている。他の委員からの質問をきっかけに、「このことは分からなかった」と気付かされることがあった。

**専門性を生かした話し合い：**養護教諭、特殊学級担任、教育相談担当、生徒指導担当など、専門的な立場から、子どもの理解や対応の具体策を話し合うことができた。

**過去からの育ちの見直しと学びの特性のとらえ：**子どもの成長と共に学びの特性と支援の方法を見直すことによって、より具体的で有効な支援を導き出すことができた。

## V 研究のまとめ

### ■1 子どもの実態の把握

103頁の表4は、学びと育ちからみた子どもの理解と支援の仕方を、考えられる対応の流れに沿って作成したものである。本委員会のケース会議では、この表に沿って事例を検討した。特に、学びの要因を共通理解することにより、実際の配慮すべき課題と子どもの学びや育ちの特性とを結びつけることができた。

表4の中で、配慮の必要な課題のいくつかは、学習障害（LD）や注意欠陥多動性障害（ADHD）等の特徴的な課題と重複していた。そこで、こうした障害に関する文献で示された配慮点と、一つ一つの事例を重ね、個々の学びの特性をとらえるために必要な視点を検討した。事例2、3、5などは、軽度の障害が指摘されたものであり、現在の学びの特性をとらえるためには、これまでの育ちをまず把握することが重要であることが分かった。まず、過去からの育ちの中で見出した要因と、現在の日常生活のエピソードを整理したり環境を見直したりして見えてきた現在の学びの特性とを照合し絞り込む。必要なならば保護者と相談して心理検査を実施したり、相談機関や医療機関での専門相談を勧めたりする。これらのことから子ども

の総合的な理解が可能となり、具体的なかかわり方や支援の方法が見えてくる。このことは、医学面や福祉面など教育以外の視点も取り入れることの重要性を指摘している。

実態調査の中で、担任が最も配慮すべき課題の要因をどうとらえたかを調べている。特に学習課題を選択した場合(図5)を見ると、小学校低学年では性格や障害等が半数以上であるが、中学年以降は障害等本人の課題よりも、育ってきた経緯や環境など、周囲の課題をその要因ととらえる割合が増えている。これは、求められる学びの質の変化と共に、その子どもの本来の課題が少しずつ見えなくなり、二次的に派生する表面上の問題や周囲との不協和音の方に目が向いていくためと考える。

すなわち、生徒指導上の問題や不登校等の課題を持つ中学生について、その過去からの育ち(生育歴や小学校での生活等)を調べていくと、実は「発達のバランスの悪い子」ととらえられていた生徒が数多くいるものと推測できる。このことは、その子どもの本質的な課題は変わらないにもかかわらず、学年が進むに従って課題が様々に形を変えながら表面に表れ、教師のとらえ方も発達課題から行動問題へと視点が変わっていく傾向があるということである。つまり、過去からの育ちという視点は、加齢と共に忘れられがちになる子どもの本質をとらえ、現在の課題を解決する上で重要な手掛かりとなり得ることを示唆している。

## ■ 2 課題の整理と見通し

担任は、様々な視点からの情報をもとに子どもを理解しようとしている。そのためには、担任が一人で全てを判断するよりも、むしろ複数の目から見て理解を深めることの方が、はるかに有効である。本委員会でも、ケース会議の中で“学び”と“育ち”という視点から話し合うことにより、担任独自の判断による理解が、より広い視野での理解へと深まった事例が多かった。例えば、休憩時間に他の教職員とその子どものことを話題にするだ

けでも、一人の場合とは異なった理解の視点が得られることが多い。

また、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、肢体不自由、情緒障害等に関する文献は、事例1、4、8のように明らかな障害はなくても特に配慮の必要な子どもの理解に、大いに参考になった。今後、通常の学級の担任がこれらの障害について理解しておくことも必要である。

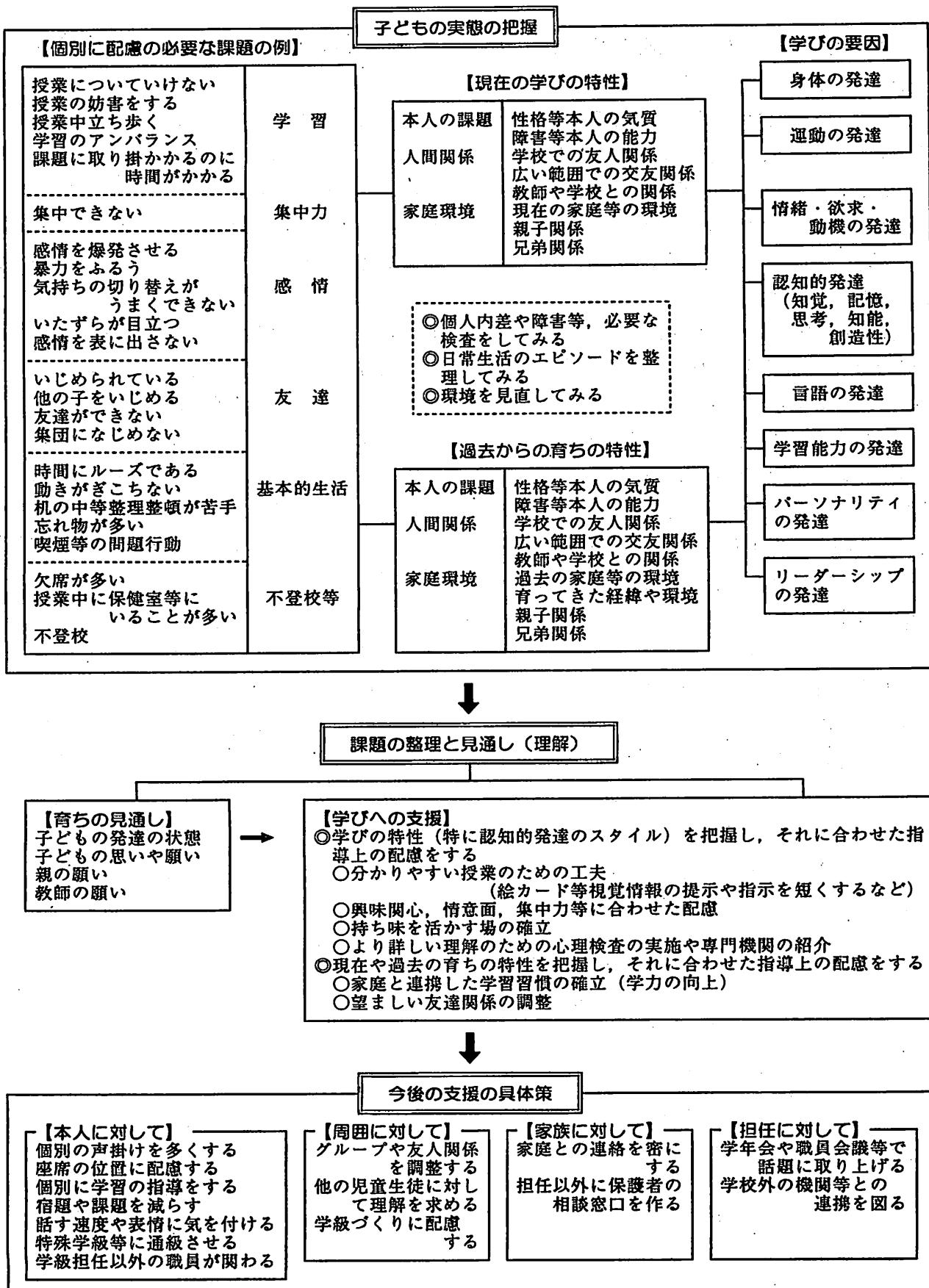
ところで、このような子どもの過去からの育ちの特性を最もよく知っているのは、保護者である。これまでに「親の育て方やしつけの問題」と言われることで傷つき、現在の担任に子どもの課題を話すことに対して臆病になっている場合も少なくない。教師が保護者に受容的な態度で接し、共に育てていこうとする姿勢で共通理解をし、互いのかかわり方を考えていくことも大切である。

## ■ 3 今後の支援の具体策

個々の対応は千差万別であり、何が有効か明確に示すことはなかなか難しい。しかし、個々の事例が教えてくれるように、その子どもだけではなく周囲や家族に対する配慮は、大変効果的である。事例2のように、集団を育てることが個に対しても有効な場合もある。さらに、そのような担任の取り組みに対して、学年や学校全体で具体的な視点に沿った話合いをしたり、他の職員がその子どもにかかわったりするなど、全職員による理解と支援についての共通した姿勢も大切である。

子どもは常に成長途上にあり、要因が分からなければ支援ができないという訳ではない。表4にあるとおり、状態によっては担任以外の教職員がかかわったり、個別の対応を行ったり、家庭との連携を密にしたりすることにより、現状を変えていくことができる。さらに、事例研究のまとめにあるように、子どもに対する受容的なかかわりもまた有効である。特に要因がはっきりしない場合には、まず受容的なかかわりの中で「理解」に努めながら、対応していくことが求められる。

表4 学びと育ちから見た子どもの理解とその対応



## VI 本研究を踏まえた提言

### ■ 1 「学びと育ちからみた子どもの理解とその対応」(表4)に沿って子どもの理解と支援を行う

子どもの実態を把握する時に、「学びの要因」や「過去からの育ち」等、発達の視点を加えてみるとが大切である。母親や前年度までの担任など、その子どものこれまでの育ちにかかわってきた方から話を聞くことで、本人の学びの特性が把握できる。その際に、LDやADHD等の生育歴のとらえ方や、軽度の障害に関する情報等も参考にし、これまでの発達の状態を理解することが大切である。そのことにより、なぜこの子がこのような行動を取るのかが、肯定的に理解できるようになり、具体的な支援の糸口が見えてくる。

問題が起こってから情報を集めることはなかなか難しい。問題の有無にかかわらず日ごろから、担任として「気になる子」の実態を、表4を参考にしながら把握しておくことが大切である。

### ■ 2 理解と支援の交互作用を大切にする

一度理解したと思ってもそれで終わりにせず、継続的に実態の見直しや支援の方向性の確認を行いたい。そのためには、学校内で、あるいは家庭と、日常的に情報を交換し、必要に応じては、その子どもにかかわる教職員全員によるケース会議を開催できる体制づくりが必要である。立場の違う教職員が入った、情報交換や報告のみではない視点を絞ったケース会議の開催により、課題が整理され、支援の見通しが立ちやすくなる。

### ■ 3 子どもの自己形成や自己実現を支援する

子どもの直接的な対応においては、まず受容的にかかわり、子ども自身が自己を肯定的にとらえることへの支援が大事である。また、個への働き掛けと同時に、個を大切にした学級集団づくりについても配慮することが求められる。このような取り組みは担任だけができるものではなく、学校

や学年全体でかかわっていくことが必要である。

## VII おわりに（反省と今後の課題）

実態調査を実施してみて、子どもたちのよりよい成長を願い、様々な努力や工夫をしながら指導や対応にあたっている担任の様子が、回答から伝わってきた。自由記述の中には、制度面での課題の指摘や要望もあったが、本研究では、現行の制度の中で何ができるかを考えた。今後、学級の人数による違いとかTTや加配教員が対応することの有効性、通常の学級で学んでいる障害のある子どもの指導法など、より具体的な研究が求められよう。

本研究では、「個別的な配慮を要する児童生徒」を広い意味でとらえ、「生徒指導」「特殊教育」など各分野におけるこれまでの研究の実績を統合する形で対応を考えた。今後、より具体的な配慮の方法を、実践の中で考えていくことが必要と考える。

### ●参考文献

- 上武正二著『発達心理学総説』金子書房 1974
- 菊池武剋他編『子どもの発達と学校生活』1992
- 文部省『みつめよう一人一人を』1997
- 司馬理英子「ADHDこれで子どもが変わる」主婦の友社 1999

### ●委嘱研究員

宮城教育大学教授 渡辺 徹	仙台市立中山小学校教諭 安田 まさ子
仙台市立松陵中学校教諭 小林 順子	仙台市立若林小学校養護教諭 熊谷 宏子
仙台市立沖野東小学校教諭 伊藤 雅亮	仙台市立生出中学校教諭 藤島 恒弘
仙台市立四郎丸小学校教諭 綱島 園子	

### ●担当

仙台市教育センター

主任指導主事 庄子 修	指導主事 中山伸枝
指導主事 佐々木 登三雄	指導主事 三品良春
指導主事 工藤洋	

## 資料 通常の学級における児童生徒に関する調査

この調査は、通常の学級にいる児童生徒に対して、その担任が個別の配慮が必要なのはどのような点と考えているか、どのような状態を一番教師がかかわらなければならない課題ととらえているかという、教師の立場から見た指導上の課題と児童生徒の実情を調べることを目的としています。「問4、5、14、15、16」についてはご自身の考えを、「問6～13」については現在担任している中で、最も個別の配慮が必要と思われる児童生徒1名を思い浮かべてお答えください。なお、回答はすべて回答用紙にご記入ください。その際、「その他」を選ばれた場合及び自由記述の項目は、文章でお答えください。

問1 あなたの年代 (7) 20代 (1) 30代 (4) 40代 (2) 50代 (3) 60歳

問2 あなたの勤務校種 (7) 小学校 (1) 中学校

問3 あなたの担任している学年（複式学級の場合は、該当学年すべてをお選びください）

(7) 1年生 (1) 2年生 (4) 3年生 (2) 4年生 (3) 5年生 (5) 6年生

(1) あなたの学年の学級数 (7) 1学級 (1) 2学級 (4) 3学級 (2) 4学級以上

(2) あなたの学級の児童生徒数

(7) 25人以下 (1) 26～30人 (4) 31～35人 (2) 36～40人 (3) 41人以上

問4 あなたが学級の児童生徒に対して、特別に「個別の配慮」が必要だと考えるのはどのような課題ですか。

下記の項目より3つ以内でお選びください。

(7) 授業についていけない (1) 授業の妨害をする (4) 授業中立ち歩く (2) いじめられている

(3) 他の子をいじめる (5) 友達ができない (6) 課題にとりかかるのに時間がかかる

(7) 集中できない (4) 時間にルーズである (3) 動きがぎこちない (1) 机の中等整頓が苦手

(5) 忘れ物が多い (6) 感情を爆発させる (2) 暴力をふるう (3) 気持ちの切り替えがうまくできない

(4) 欠席が多い (7) 授業時間中に保健室等にいることが多い (1) 不登校 (6) 喫煙等の問題

(8) その他 ( )

問5 あなたの学級には、問4のような「個別の配慮」が必要だと考えられる児童生徒がいますか。

(7) いる [ (4) 1名 (2) 2名 (3) 3名以上 ] → P2の問6へ

(1) いない → P4の問14へ

※ 問6から問13までは、最も配慮が必要だと思われる児童生徒1名を念頭においてお答えください。

問6 その子供を指導する上での課題は何ですか。下記の項目より4つ以内でお選びください。

(7) 授業についていけない (1) 授業の妨害をする (4) 授業中立ち歩く (2) いじめられている

(3) 他の子をいじめる (5) 友達ができない (6) 課題にとりかかるのに時間がかかる (7) 集中できない

(4) 時間にルーズである (3) 動きがぎこちない (1) 机の中等整頓が苦手 (5) 忘れ物が多い

(6) 感情を爆発させる (2) 暴力をふるう (3) 気持ちの切り替えがうまくできない (4) 欠席が多い

(7) 授業時間中に保健室等にいることが多い (1) 不登校 (6) 喫煙等の問題 (8) その他

問7 問6で選ばれた4つ以内の項目の中で、最も大きな課題と考えられるものはどれですか。1つだけ選んでお答えください。

問8 これらの課題を引き起こしている要因は何だと考えますか。下記の項目より3つ以内でお選びください。

(7) 学級での友人関係 (1) 広い範囲での交友関係 (4) 教師や学校との関係 (2) 現在の家庭等の環境

(3) 親子関係 (5) 兄弟関係 (6) 育ってきた経緯や環境 (7) 性格等本人の気質的課題

(8) 障害等本人の能力的課題 (3) よく分からない (1) その他

問9 現在その子供の指導について担任として個別に配慮しているのは、どのような点ですか。下記の項目より3つ以内でお選びください。

(7) 個別の声掛けを多くしている (1) 座席の位置に配慮している (4) 個別に学習の指導をしている

(2) 宿題や課題を減らしている (3) 話す速度や表情に気を付けている

(5) グループや友人関係を調整している (6) 他の児童生徒に対して理解を求めている

(7) 家庭との連絡を密にしている (8) その他

問10 現在その子供の指導に関して学校として配慮しているのは、どのような点ですか。下記の項目より3つ以内でお選びください。

(7) 同僚や上司が担任の相談にのっている (1) 特殊学級等に通級させている

(2) 学級担任以外の職員がかかわっている

(3) 学年会で話題に取り上げている（同学年の職員全部がその子供のことを知る）

- (オ) 職員会議等で話題に取り上げている（全職員がその子供のことを知る）  
 (カ) 担任以外に保護者の相談窓口を作っている  
 (キ) 学校外の機関等との連携を図っている (ク) その他 ( )  
 (1) 「(ウ) 学級担任以外の職員がかかわっている」を選ばれた場合、お答えください。  
最も多くかかわっているのはどなたですか。お一人だけお選びください。  
 (7) 同学年の担任 (イ) 学年主任 (ウ) 養護教諭 (エ) 教務主任 (オ) 教頭 (カ) 校長  
 (キ) TT担当 (ク) 教科担任 (ケ) 部活動の顧問 (コ) 生徒指導担当者 (サ) 教育相談担当者  
 (シ) スクールカウンセラー (ス) 心の相談員 (セ) その他  
 (2) その方は、時間にすると週に何回、何時間くらいかかわっていますか。  
 ①週に (7) 1回以内 (イ) 2~3回 (ウ) 4~5回 (エ) 毎日  
 ②1日に (オ) 30分以内 (カ) 1時間以内 (キ) 2時間以内 (ク) 2時間以上  
 (3) その方は、どのようななかかわりかたをしていますか。具体的にお書きください。  
 (4) (1) 以外でかかわっている方がいたらお答えください。（複数回答可）  
 (7) 同学年の担任 (イ) 学年主任 (ウ) 養護教諭 (エ) 教務主任 (オ) 教頭 (カ) 校長  
 (キ) TT担当 (ク) 教科担任 (ケ) 部活動の顧問 (コ) 生徒指導担当者 (サ) 教育相談担当者  
 (シ) スクールカウンセラー (ス) 心の相談員 (セ) その他

問11 可能であれば、今後その子供に対して実践したいと考えている配慮はありますか。下記の項目よりお選びください。（複数回答可）

- (7) 個別の声掛けを多くする (イ) 座席の位置に配慮する (ウ) 個別に学習の指導をする  
 (エ) 宿題や課題を減らす (オ) 話す速度や表情に気を付ける (カ) グループや友人関係を調整する  
 (キ) 他の児童生徒に対して理解を求める (ク) 家庭との連絡を密にする  
 (ケ) 学級担任以外の職員がかかわる (コ) 特殊学級等に通級させる  
 (サ) 学年会や職員会議等で話題に取り上げる（全職員がその子供のことを知る）  
 (シ) 担任以外に保護者の相談窓口を作る (ス) 学校外の機関等との連携を図る  
 (セ) 特になし (ウ) その他  
 (1) 問11の「可能であれば」の条件は何と考えますか。（複数回答可）  
 (7) 時間的な余裕 (イ) 人的な余裕 (ウ) 施設設備の充実 (エ) 同僚や上司の理解  
 (オ) 校内の協力体制 (カ) 研修の充実 (キ) 関係機関との連携 (ク) 家庭の協力 (ケ) その他

問12 その子供のことについて、学級の児童生徒に対して特別に話や説明をしたことがありますか。

- (7) ある (イ) ない  
 (1) どのような話や説明をしましたか。具体的にお書きください。

問13 その子供の性別をお答えください。 (7) 男 (イ) 女

\* 問14, 問15, 問16は、全員がお答えください。

問14 子供への配慮事項を考える時に、あなたが特に意識されているのはどのようなことですか。下記の項目より3つ以内でお選びください。

- (7) 性格等本人の気質 (イ) 障害等本人の能力 (ウ) 現在の家庭等の環境 (エ) 育ってきた経緯や環境  
 (オ) 親子関係 (カ) 学級での友人関係 (キ) 広い範囲での交友関係 (ク) 担任との関係  
 (ケ) 特になし (コ) その他

問15 学級作りに関して、あなたが現在配慮しているのはどのようなことですか。下記の項目より3つ以内でお選びください。

- (7) ルールは分かりやすいものにする (イ) 目標を決めて頑張らせる  
 (ウ) どの子も活躍できる配慮をしている (エ) 一人一人のよさを認める  
 (オ) なんでも話せる雰囲気を作る (カ) 子供たちと一緒に活動する  
 (キ) 分かりやすい授業を心がける (ク) グループで協力させる  
 (ケ) 保護者等の参加や協力を求め、開かれた学級を作る (コ) その他

問16 もし、校内に配慮を要する子供がいる場合、あなたは学校として一般的にはどのようなかかわり方をすればいいと思われますか。下記の項目より3つ以内でお選びください。

- (7) 同僚や上司が担任の相談にのる (イ) 特殊学級等への通級の可能性を考える  
 (ウ) 学級担任以外の職員がかかわる  
 (エ) 学年会で話題に取り上げる（同学年の職員全員がその子供のことを知る）  
 (オ) 職員会議等で話題に取り上げる（全職員がその子供のことを知る）  
 (カ) 担任以外に保護者の相談窓口を作る (キ) 学校外の機関等との連携を図る (ク) その他

\* 本調査及び研究に関してお気付きの点やお考え等がありましたら、お手数でも回答用紙の裏面にご記入ください。

## 抄録

## 総合的な学習の時間の推進に関する研究 (第二年次)

**総合的な学習**

——小・中学校における総合的な学習の時間の取り組みの事例を通して——

**キーワード**

総合的な学習の時間、移行期間中の実践、実践上の課題  
共通理解の視点、実態把握の視点、実践事例

この研究は、総合的な学習の時間の推進のために3年間の継続研究として行われている研究の、  
第二年次のものである。

新学習指導要領移行期間における総合的な学習の時間の実践に向けて、「第1段階：共通理解・  
実態把握」「第2段階：実践」の2段階を設定した。各段階における実践上の課題を検討し、解決  
のための具体的な施策を提示するとともに、各段階における実践事例を紹介した。

仙台市教育センター教育研究紀要第7号 平成12年3月

**教職研修**

## 仙台市立小中学校教員の 自己啓発・自己形成に関する調査研究

**キーワード**

これからの教員像、自己啓発、自己形成、教員研修、仙台市教育センター  
理想の教師像

この研究は、仙台市教育センターの今後の研修事業展開の在り方を探るため、本市教員の自己形  
成の実態と、これからの教育に対する意識、また、本センターの活用状況をとらえようとしたもの  
である。

その結果、本市教員の自己研修に対する意欲や自己啓発をどのように行おうとしているのかが明  
確になり、さらに、本センターに対する教員の具体的な期待や要望など、本センターの研修事業推  
進にかかわる生きた資料を得ることができた。

仙台市教育センター教育研究紀要第7号 平成12年3月

## 情報教育

## 学校における情報通信ネットワークの活用に関する研究

—インターネットを利用した教育に対する意識調査を通して—

## キーワード

情報活用能力、情報の光と影、webページによる発信

この研究は、現在急速に学校現場へ浸透しつつあるインターネットというメディアを、教育利用という観点からとらえ、その推進のための条件及び問題点について、市内教員の意識調査をもとに探ったものである。

調査の結果から、情報活用能力の育成のためのインターネット利用の条件や、望ましい情報教育の推進に向けて、インターネットをどのように活用していけばいいのか、それらについての提案を行うものである。

仙台市教育センター教育研究紀要第7号 平成12年3月

## 教育相談

子供の“学び”と“育ち”から見た理解の視点と  
支援の在り方を探る

—通常の学級で特に個別的な配慮をする児童生徒の調査と事例を通して—

## キーワード

学びと育ち、通常の学級での理解、個別的な配慮、自立への支援

本研究は、通常の学級において担任が特に「個別的な配慮をする」ととらえている児童生徒の課題やそのかかわりについての現状を把握し、その対応についての具体的な視点・方策を探ろうとしたものである。

その結果、これまでの育ちを振り返り、学びの特性を把握することの重要性が明らかになった。

そして、課題の要因の理解やその学びの特性に合わせた個別の配慮をすることにより、子どもの自立を支援できることを提言としてまとめた。

仙台市教育センター教育研究紀要第7号 平成12年3月

**教育研究紀要**

**『教育は いま』 第7号**

**発 行 日** 平成12年3月31日

**編集・発行** 仙台市教育センター

所長 早坂 祐

**所 在 地** 〒983-0825 仙台市宮城野区鶴ヶ谷北1-19-1

TEL (022) 251-7441~3

FAX (022) 251-7486

Web ページ <http://www.sendai-c.ed.jp>

代表E-mail [info@sendai-c.ed.jp](mailto:info@sendai-c.ed.jp)



古紙配合率100%再生紙を使用しています